

ふるさといまむかし

船着村史稿

船

着

村

史

稿

富

島

貞

雄

目

次

題 字		松岡 栄一
巻頭のことば		清水 敏郎
序		高木 正義
心から船附史の発刊をおよろこび致します		山口 一易
発刊を祝して		藤井 進一郎
はじめに		虫送り
むかし話 船附のみなと		お彼岸
ふるさと歳時記		釈尊降誕生会
お伊勢詣り		はらだいこ
左義長		念仏会
伊勢神楽		秋葉様祭り
粥占		収 穫
節分		大掃除
初 午		万灯流し
農休み		七五三
10	9	9
7	6	6
6	6	6
4	1	1
16	15	15
14	14	13
13	13	12
12	11	10

報恩講		16
寒修行		18
人物		18
参考 九里半街道		19
濃州三湊		20
参考 船附		21
大野		23
横曾根		23
多芸郡舟付村		25
多芸郡横曾根村		28
生蓮寺について		31
昔話のいろいろ		31
小字一覧		32
現在小字名		33
参考 各村庄屋人名調		33
八幡神社のお祭り		36
祭の音頭		38
戦死者村葬		40

戦没者と遺族		41
耕地整理		44
横曾根渡し		45
船頭さん		48の2
安全走行十則		48の3
養老町旧町村沿革表より抜萃		48
伝内切れ		49
昔の村と職業		50
大神宮さん		50
金比羅さん		51
今ある行事と兵隊のこと		52
神社		53
寺院		54
生蓮寺		54
法覚寺		54
尊光寺		56
竹腰系図		58
宗教神道について		59

大相撲歴代横綱一覧	62
老人会活動	65の2
暦法	66
結婚記念日	67
算賀のお祝い	68
法事年回	69
厄年	70
生れ歳による性格	70
ふるさとの文学	73
古い唄新しい歌	74
方言	79
村役場の沿革	82
学校の変遷	82
船附郵便局	84
三昧	85
養老の滝	85
船附湊	86
三湊船賃並人馬賃銭書上	87

県民性西濃人の性格	87
宝暦治水薩摩義士	88
濃飛震災	92
伊勢湾台風水害	97
養老鉄道	102
江戸時代封建制度とは	105
西美濃の藩主一覧	106
村高一覧表	108
慶安の御触書	110
時刻の呼び方	110
国民の祝日	114
藤井実応大僧正	115
人生の指標	121
日々の糧	121
食前食後のことば	122
老人六歌仙	122
老の戒め	123
村の変遷	124

あとがき		127
船附区の人口と戸数		128
岐阜県養老郡笠郷村全略図		129
参考 金銭換算表		131
米価格表		135
和暦西暦対照表		140
寿会高令者番付表		141
付 表		
美濃国地図		142
元禄時代旧多芸上石津両郡村落図		143
道中独案内図		144
多芸郡附近古地図		145
道中独案内図 駄賃附		146
笠郷周辺最新地図		147

巻頭のことば

養老町長 清水敏郎

緑の山清らかな水に恵れた養老町がすばらしい伸展をとげましたことは、古くからその地域に住む先人の努力したことに起因するものであります。

そのかげには多くの苦難の連続と愛郷心によって今日の町の繁栄の基礎ともなったのであります。その発展の足跡をふりかえり、それを歴史として記録に残し後世のために意義深いものに創作配慮されたことに心から敬意を表します。

数多くの資料蒐集から執筆・監修の労を賜った各位に感謝を申し上げる次第であります。

序

養老町教育長 高木正義

筆者宮島さんは、努力の人であり、情熱家でもあります。定年退職されてから、郷土船付に関する古い資料を自分の足で集め、自分の耳で土地の古老から聞き取りをされました。このことは、誰でも真似のできることはありません。

宮島さんの郷土を愛する熱い心と、労をいとわぬ誠実なお人柄がこの仕事を完成させたものと思います。

今日は、情報化・国際化社会といわれています。私達の生活している地域・環境は、めざましい勢いで変化し続けています。それだけに昔から受けつがれてきたことでも、消えてしまったものが多くあります。

失われていくものを、人の頭から忘れられたくない。何としても書きとどめて後世に残したい……これが宮島さんの本心でもあるのです。原稿を見せていただいて頭のさがる思いがしました。

今こそ、私達の郷土の自然の中で、先人達のたゆまぬ努力によって現在の養老町に発展してきたのだということを忘れてはいけないと思います。養老町に生れた文化や伝統、人情に接し、今後の郷土の発展に資していきたいと思います。

本冊子が多くの方々に愛読されることを願って序に代えさせていただきます。

心から船附史の発刊をおよろこび致します
元笠郷小学校長 山口 一 易

私がここに頁をかりることは、全く似つかわしくないことで、再三お断り申してきました。只、郷土の歴史を書き留めたいとねがう、同志の一人として、お許しをいただくことにします。

丁度、笠郷小学校が今の近代的校舎に、改築されます年に、勤めさせてもらう縁をいただき、PTAのみなさん、地域のみなさんの絶大なお力をいたゞいて、古い木造校舎から現在の新校舎へ移転をしました。

それを記念して「笠郷小学校の歴史」として、明治初年の学制発布からの学校の変遷そして、そこに学んだ人々の全名簿をまとめました。ついで「校舎改築記念史」―特に昭和三十四年の大水害に水びたしとなりつゝも、学輩を育てつゞけてくれた、木造校舎との別れ、うってかわっての近代的校舎への感謝とよろこび―つゞけてきました。

旧校舎には、郷土資料室が特設されていて、庶民の生活民具が数多く集められておりました。新校舎には、これらをすべて収納することができず、その一部を収め残りは、町の資料収納所に移管を依頼してきました。

そんな折、船附の生蓮寺境内の芭蕉句碑に接することができ、この地に、谷さんを中心とする芭蕉顕彰俳句会の活動の盛んだったことも知りました。

そうした環境の中で、笠郷の歴史を深かめていきたいと強く思いました。しかし、それは容易なわざではありません。慌しく二年間を勤めさせてもらって、笠郷を離れてしましますと、一層難しいものになって、空しい日を送って居りました。

そんな中で、町文化財保護協会で、ご活躍の宮島さんを知り、更に、船附史発刊のご計画を承り、羨しく思うと同時に、その完行の一日も早からんことを、願ってまいりました。

原稿が活字化されていくのを、喜びながらのお話を、一緒によろこび本日を鶴首してをりました。

よくやられた//の一と言です。

長い間のご苦勞に敬意を払い、衷心より祝詞を申し上げる次第であります。

発刊を祝して

船附区長 藤 井 進一郎

船附に生れ船附に育った宮島貞雄様が今度「船附史」を刊行された事を心よりお喜び申し上げます。氏は七十有余年大正・昭和・平成と世の移り変りを身を以て体験され、その史実を長期に亘ってまとめられたもので、明治それ以前の事も含まれて居りますが、本人が納得するまで調査研究され安易な妥協は絶対にせず事実を曲げないのは本人の固い人格がうかがわれ、本当に敬意を表する次第です。

私もよく相談を受けたわけですが、何分にも浅学非才な私とて御協力出来なかった事を申しわけなく思つて居りますが、氏の並々ならぬ郷土愛の賜ものだと思います。時としてふっと忘れそうな郷土愛を呼び起こす素晴らしい本であると思ひますので一人でも多くの皆さんが読んでいただき、船附区がさらに心豊かに素晴らしい地域環境が築かれ、受継がれていく事を心より願つて居ります。

宮島貞雄様の御健康を祈念申し上げお祝の御挨拶いたします。

ふるさといまむかし
船着村史稿

宮島貞雄

題
字

序

松	藤	山	高	清
岡	井	口	木	水
榮	進	一	正	敏
一	郎	易	義	郎

はじめに

日進月歩の文明の今日、兎が餅搗く神秘的な月の世界へ着陸したり宇宙旅行が出来る時代になりました。眼を村に向けてみますと豊穡な田圃の真只中に思いもかけぬ大桑道路（国道二五八号線）が出来、車の往来物凄くなり川北浅草では両側家であつてしまひました。環境の変化と共に村の家並も、又人の心も変つた様に思われます。

船附に生れ船附で育ち、今老境期に入りつゝあるので変り行く世相をみるにつけ、何とか昔をふり返り記録にしたいと思ひ立ち、激励下さる方もあり手をつけました。

偕而記憶力豊かな古老（例えば宮嶋惣六・野崎小作・藤井善弥・西脇こひな・藤井しゅう各氏達）も幽明境を異にされお教え願う術も無く、とりあえず村の長老からの聞き歩きから始めました。

何分当地は濃尾震災、明治廿九年の大洪水、度重

なる牧田川改修工事移転、伊勢湾台風等災害多く、古文書等資料は散逸して誠に乏しいのです。為に考証することが出来にくいのです。然し何とか昔の船附そして村人の暮しの一端だけでも纏めてみたいものだと思ひ欲だけあります。

郷土史家でもない私の計画は稚々として進まず、断片的な寄せ集めで雑然とした組立てとなり、所々に思いつく儘色々な余談も加りましたがお許し願います。

養老むかし話より船附のみなど

牧田川と揖斐川が重なつとるあたりに船附というところがあるわな。なんで船附いうんか知つとりんさるか？

そうや。船がつくからや。船を付けるとも書くし、船が着くとも書くわなも。そう、むかしはこのあた

りは湊として栄えたんや。

なんでも慶長一五年（一六一〇年）に淀書が与えられとるそうや。その頃の牧田川は、伊勢湾と琵琶湖の方へ、また、日本海に通ずる大事な所やったそうや。その頃の船附はにぎやかな湊やったやろなも。ほんとうに栄えとったんやろなも。ほんでもついなあだまで、船が行き来しとった湊やった。にぎやかなもんやった。今はあんまし、面影が残っとらんけど、ほんとうにええもんやった。私らの娘の頃は、船で嫁入したもんや。

白無垢に角隠しの嫁さん。お仲人さん。そして嫁入り道具が乗った船が続くんや。

船頭さんがろをこぐ。ギイー、ギイー、船が揺れる。嫁さんははかしいもんでうつぶく……ええもんや。嫁入りや、めでえたあことは、なるたけ朝のうちから始めるわなも。

嫁さんの行列が村人中入ってござるともう大騒ぎや。子供んたがぎょうさん寄って来て、両手を広げ

て、はやしたてるんや。

嫁さん 嫁さん

菓子 おくれ

菓子 くれな

通せんぼ

そうするとさいが、

嫁入の行列の中から、

菓子をまかせせるんや。

それで、子供んたが拾う。

むかしは、結婚式場

やら、ホテルなんかあ

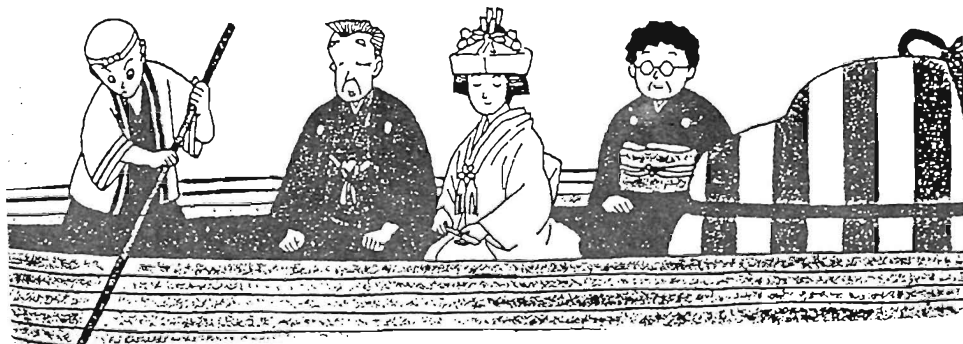
らへん。嫁入はみんな

むこさんの家でやった

もんや。それで嫁入の

ある家には、ひと目嫁

さんを見やし思って集



まってくるんや。近所はもちろん、隣りの村からもやってござる。ここでも菓子まかつせる。そんなもんで嫁入言ったら、みんなが楽しみにしとるんやなも。

嫁入はっかやあらへん。船を使うのは。いろんなもん売りに来るわな。とくにうれしいんは、お正月のごつつおや、着るもんやなんかや。ま、村とまぢを結ぶありがたあもんやったわなも、船は。

そう言やこんなこともあった。船附には。大雨と大風でえりゃあこっちゃった。忘れもせえへん。昭和三四年の八月一二日から一四日のことや。

思い出あてもおそぎゃあこっちゃ。牧田川が根古地のとこで切れてまって、そりゃ大変やった。こころあたりはみんな水びたしや。逃げるんも船や。牛を連れて逃げた人んたもいたよ。なんしよ、家族と同じ牛や。他のもんはあきらめても、牛を見殺すことはでけえへんのやわなも。あんなときは力を合わせてみんなでがんばったもんや。私もたきだしを手

伝ったよ。たきだしってなんやてか？ ご飯をたいて持っていくこっちゃよ。おにぎりなんかにして。

避難しとる人んとこへ、差し入れに行くのも船やわなも。この時見舞い品で一番、ありがたあのは何やろ？ そりゃあ、おにぎりやふとんもありがたあ。そやけど一番大事なのは、水や。水。皮肉なもんやわなも、水はいっぱああるのに。けど、きたなて飲めえへん。ほんで、何よりき



れいな水が一番や。 とにかくあんなおそぎゃあ
こと、まあごめんやなも。

いろんなもん乗せて船が入って来たり出てったり
しとるの見るのはええもんやった。いつの頃か船が
出入りせんようになってまった。さみしいもんやわ
なも、何でもかでもむかしのもんがのうなってまう
のは……。

ふるさと歳時記

当地は地形的には北に伊吹の秀峰聳え伊吹風が牧
田口から真直ぐで膚寒く浅草東村から池辺村根古地
迄の間が一番風の強く当る所です、広大な濃尾
平野を通り知多半島伊良湖渥美半島迄吹き抜けてゆ
き、古来寒漬大根、切干大根等が特産でした。

最新では、地球温暖化のせいか雪も年々少なくな
りましたが、昔は三、四尺（一米余）の積雪はザラ

です、小学校迄消防団や青年会等が通学路の除雪
をしたものです。

子供の遊びでも勉強なんかソッチノケで飛ばし・
こま回し・竹馬・竹とんぼ・メンコ・お手玉あそび・
かくれんぼ等暗くなるまで屋外でとび回っていました。
今は部活や塾通いで忙がしくTVを見たり週刊
誌を読んだり漫画をみたりファミリーコンピュータ
で遊ぶ時間も僅かです。

昔、村の情報源は隣近所での貰い風呂や夏夕涼み
の縁台で将棋さしつゝの噂話や床屋での雑談位でし
た。娯楽といえば若い衆が町へ映画を見に行ったり、
船頭さんの船便で子供連れで桑名沖での汐干狩、五
月五日の多度祭り又五月十五日の大垣まつり等川を
遡行してポンポン蒸気で遊びに出掛けるのが楽しみ
でした五月十九日の高田まつりが過ぎると農作業が
本格的に忙がしくなっています。

次に当地の風習を語るには私事で恐縮ですが、父
宮嶋惣右衛門を重ねて御説明します。その方が分り

易いと思われますので。父は明治十六年生れ、明治、大正、昭和と激動の時代に亘り、水呑み百姓ですが大変農事改良に意を用い生き抜いた篤農家でした。今の農業は機械化オンリーですが、当時は農耕に馬を飼育し厩肥を堆肥となし、犁（加良須岐Ⅱ倭名類聚抄）で深耕し土壌改良をして有機栽培に力を注ぎました。生来の馬好きで、見る眼があり農耕馬や輓馬の実用向きよりも、競争馬みたいな格好の良いのを求めて人気を集めており、横曽根堤福束川並や大巻の河川敷等で草競馬に出していました。これが父の唯一の道楽だったと思われます。

偶々勝てばそれこそ大変。「春日」と名付けられた馬が或る時優勝し、村の好事家達が列をなし、先頭には馬印の旗を立て賞金を貼りつけた高札の様なものを連らね馬を中心に伊勢音頭を唄って氣勢を挙げ、帰って来て祝宴を張ったとのこと。村で十軒位馬を飼育されていましたが中には三重県多度から神事の上げ馬に借りに来た事もありました。

一番最後は大東亜戦争で軍馬徴発となり、戦地に見送り以降は農耕の為に牛の飼育に切替えました。村中がそうなっていたのです。その後村の畜産組合員も七十名を数え、従来通り馬頭観世音（現警察官駐在所の北）をお祀していました。

船附は「多芸輪中」（揖斐、牧田、津屋川に囲まれており堤防によって村を川から守る自衛手段）中の北部に位置して地盤は高い方に属していますが、それでも伊勢湾台風堤防決潰では鴨居下迄浸水してしまいました。生活の知恵で大正頃迄惣六様と家では水屋が屋敷の中にありました。昔から度重なる洪水被害数知れず、母屋とは別に高く盛土した上に避難倉が築かれていたもので、家財の避難用に作られました。排水設備の整った今では取除かれて殆どないが、国営木曽三川水郷公園施設の中にも水屋屋敷が作られて面影を残しています。

以下順を追って風習行事にふれます。

お伊勢詣り

今は神官の厚意で年末に伊勢大祇園や神宮暦が配付され、各自で近鉄電車で初詣をしますが、当時は小部落交代で代参したものです。昔はお伊勢詣りと善光寺詣り出来れば日光をみたいのが、庶民のアコガレでしたが、村の代参として村人は村境迄飾り立てた花馬を組込んで出迎え、祝酒を掬み伊勢音頭で行列をして出向えたといひます。牧田川を船で帰り材長様土場で出迎えた事もあります。

左 義 長

正月十四日、松の内もすぎてドンドコ焼きが行われる。今は竹藪や行う場所も殆んど無くなったが、村人の屋敷から青竹を切り集めて小部落毎に竹の山を築き火を放って左義長が行われたものです。

書初めが天までとどけと高くもえ上ってゆき字が

上手になると云われており、「天筆和合楽地福田楽雲開萬天春」と大書したものを竹のもえ盛る空に天高く舞い上りもえ尽きるのを見上げたりしてオキ火で鏡餅や左義長用にこしらえた菱餅をやき、早速持販って家族一同分けて食べたりしました。養老山麓の村ではこの風習が残っておるが、当地ではドンドコ焼きも無くなってしまったので、一月十七日（十五日が多くなったが）の秋葉神社まつりで正月飾りや書初めを燃し鏡餅を焼いたりしています。

伊 勢 神 楽

春が訪れると伊勢大神楽、松井嘉太夫さん一行がやってくる。高田や魚茂旅館に泊り、車をひいて各村の一軒一軒回って歩く。心付けやお米等頂くと悪摩払いをして行きます。毎年回って来る太夫も昔か

らのシキタリか回る区域も決っていた様で大野村は回らない。

お大尽では半日広いお庭に蓆を敷き村人を集めて見せて下さったりした。大きな獅子頭を太夫道化お嘶連がたくみに操る仕ぐさを鈴の舞、女形の道中、剣の舞、コップの段重ね、皿回し等ピイヒヨロピイヒヨロピッピッと特殊な嘶子に合わせて色々な曲芸を面白く披露してくれたものです。

娯楽のなかった大正始めに紺屋敷秋葉神社下の畠で女角力の興行あり、腹の上に木臼を据え餅搗きをしたそうです。

又掛小屋での芝居興行等もありました。

粥 占

毎年一月十五日、八幡神社の境内で宮総代達が十四日晚から大釜でお粥が炊き続けられます。用意さ

れた二十糎位の太い葦の菅の両端を麻で竹簀の様に編み夜半に鍋の中央に入れ翌朝皆立合の上管を割り、粥の米粒、小豆の入る具合を標準に合せて何歩と判断しこれを公表します。神官の御祈禱に始まる粥占項目も昔の儘で、麻や綿ひえ（稗）とうきびそば（蕎麦）あわ（粟）きび等は殆んど姿を消してしましました。

		平成四年一月十五日	
		粥 付 表	
一	大 麦	三 歩	
二	小 麦	四 歩	
三	菜 種	四 歩	
四	大 豆	八 歩	
五	小 豆	六 歩	
六	ひ 豆	六 歩	
七	ひ え	六 歩	
八	木 綿	七 歩	
九	とうきび	三 歩	
一〇	い も	八 歩	
一一	早 稲	八 歩	
一二	中 稲	八 歩	
一三	晩 稲	四 歩	
一四	あ わ	三 歩	
一五	き び	三 歩	
一六	え い	二 歩	
一七	ご ま	七 歩	
一八	養 蚕	二 歩	
一九	そ ば	二 歩	
二〇	總 札	五 歩	
船附八幡神社総代会			

ひえは今のタビエより大粒な種で食用にしたもので、木綿とは茄子の様な木に白い綿の実が出来、布団綿にする。又糸につむぎ着物地を織りました。

えい（穎）はどんな作物なのか、見た事がないので説明できません。あわ、きび等は餅をつく時混ぜて入れ（きび餅）とうきびを入れると（赤餅）白米と餅米を混ぜると（こわ餅）等、年の暮一日掛りの餅搗きで作っておき、主食の足しにしたものです。水かめにしたし水餅として保存しました。お百姓だからお餅が頂けただけでも有難いことでした。

餅も乾かす時に薄く細かく切って（アラレ・カキモチ）等も作っておき、子供達のおやつになったものです。

麦、菜種、れんげ等当地方の二毛作地帯では米作りのあと、秋植えつけ田植前に取入れるのですが、折悪しく梅雨時とて大麥、養蚕も田仕事の合間をみて年三、四回掃き立て飼育したもので、手間の要る大変な事で次第に姿を消してしまいました。今では

減反政策が推し進められても手間がかかるので仲々二毛作に手が出ません。

俳匠山口誓子先生は度々美濃を訪れられ昭和四十七年れんげを讀えて

げんげ田の広大これが美濃の国

と詠まれた。「げんげ」はれんげのことと岐阜県の県花なのです。指折りの米の生産地である美濃の平野では、春になるとどの田にも菜の花が咲き、黄や赤紫のモウセンを敷きつめた様、美しくて、大垣や桑名に製油所があって、菜種油粕や大豆粕等も田畑の肥料によく使われたものでした。

美の豊さをげんげ田という物を通して表現した句であり、この句碑が揖斐の碧石大きな自然石で作られ羽島市福寿町浅平にあります。

こうして行われる粥占豊凶を参考に作付の計画も立てられます。この神占を信ずるか否かは別として水入の年の管に全然入らなかったのは不思議だったと当時の宮総代の人は語られました。

他所では粥占の項目も異り上田・下田に分けたり、果物名を入れたり、降雨や台風を共に占う所もあります。

各戸からは早朝に入れ物をもって行き粥をわけてもらいます。このお粥を食べると病氣にならないといわれています。

節 分

毎年二月三日（四日の年もある）節分祭として、全国の寺院仏閣で有名人を招いて福豆まきがされたり或いは星祭りが行われます。

各家庭でも「福は内鬼は外」と大声で云い乍ら部屋で豆まきをして、後で自分の年だけ炊豆を食べる風習があります。翌日は立春とて春を告げる行事なのです。

誕生祝いやクリスマスにケーキを囲んで一家団楽

するのは最近になって行われる様になったものです。

初 午

食物の神お稲荷様をまつる祭礼で、二月の第一の午の日を初午といい、京都伏見稲荷初め全国の有名稲荷神社ではこの日に初午祭が行われ縁日とされていますが、愛知県豊川稲荷（祭神吒^ダ枳^キ尼^ニ真^マ天^{テン}）等旧暦二月の初午の所もあります。

一般に稲荷大明神のお使いは狐とされていますが、狐が祭神ではありません。祭神は宇賀魂神、豊受大神（穀物の神）であります。五穀豊穰を祈ります。

稲荷様をお祀りされている家ではこの日御供物をそなえてお祭りがされます。

農 休 み

養蚕と農耕以外何も無い当地で田植（大体夏至前後が最盛期、尾張地区は半夏至頃）が終ってホッと息づく時区長が二日間の農休日を決められ皆でユックリ休んだものです。

各家庭では小麦粉をねって中に餡を入れて蒸す田植饅頭を作ったり草餅を作る等して、お隣近所へも配ったものです。

又田植前後は梅雨時とて雨も多く、川魚の産卵期でもあり起した田圃に冠水するので堀田迄出かけ、
ひ・ぶ・り・漁をしたものです。カーバイトに点灯したカ
ンテラを持ちドツペを腰に竹編み籠で堀り田辺り迄
行き伏せこみ漁（ヒブリと云う）をなし鮒や鯉鯰等
獲ったものです。

虫 送 り

虫送りの日には各農家で昼間からタイマツを作
て準備します。夕方村人が寄り集まり若衆が半鐘や
太鼓を打ちならし乍ら先頭に点火したタイマツを担
ぎ、稲の田圃の畦道を行列して歩き、村境堤防迄虫
を送ったものです。やがて田圃に誘蛾燈が出来た為
かこの風習はやまってしまいました。大昔は藁で人
形や虫も作ったそうですがいわれは余り存じません。
（大場新田には実盛さんの伝説が残っていますが。）
一般にはイモチ送りと云い、お大尽では作男達に大
タイマツを作らせ参加されました。

稲田の病氣予防のマジナイか、螟虫予防の行事な
のか、兎も角、初夏の風物詩となっていました。

お 彼 岸

お彼岸、彼岸の中曰、お彼岸だんど、暑き寒さも彼岸まで……と曰唄なれ親まれておりますが、「彼岸とは」と正面からその意味を尋ねられると返答につまって「お墓詣りする日のことよ」位に返答してしまう始末です。

春秋二回あり大体三月二十一日、九月二十三日を中心に関前後三日間を含めた一週間で前記をお中曰といい国民の祝日とされており春分の日（自然をたたえ、生物をいつくしむ）秋分の日（祖先をうやまい、なくなった人々をしのぶ）となっています。

彼岸とは彼の岸であり煩惱で汚れ切った此岸（この世、生死の世界）に対して彼の岸（つまり向う岸の意）理想の境地、清らかなお浄土の世界を指す言葉です。

お釈迦様の入滅後この世の煩惱を解脱して悟りの境地に到達するというこの教えを説く人も聞く人も

なくなってしまうという末法思想が平安時代末期に日本各地に広まり、相つぐ戦乱の中で極楽浄土に強いあこがれをいだくようになりました。末法の時代に入るとされた翌年の一〇五三年極楽浄土を再現する為京都宇治に平等院鳳凰堂が建立されました、仏師でも定朝の居た頃でしてこの後鎌倉時代にかけて四条仏所の円派、七条大宮仏所の院派、奈良仏所の慶派（後に康慶運慶等出る）等優秀な弟子達が沢山出て立派な仏像も彫刻されました。この裏には西方十億土にあるという極楽浄土を願う風習があり、末法思想が大きく影響したと思います。

聖道門の人は仏道修行に心を向けるによい期間としてお彼岸を見、煩惱にふり回されている此岸から正覚の彼岸に至るを願う意味で悟りの世界に渡る船として布施、持戒、忍辱、精進、禪定、知恵の六波羅密の修行に励むようになりました。

日が真西に沈む日を中曰としたお彼岸の信仰から寺では彼岸会といって仏事を営み一般に祖霊を祭る

日となっています。

お彼岸の行事はもともと日本で初められた宮中行事なのです。大同元年（八〇六年）三月十七日病臥中の桓武天皇の病状が日増しに募っていったので、側近権力者たちはこの頃に起っていた母后や皇后を初め宮中側近の婦人たちが死んでいったのは、天皇の地位を守る為手にかけて追いやった怨霊等物の怪の祟りだと考えた。天皇がこの災禍から逃れる為に春秋二度の季節のなかばに七日間の「金剛般若経」を読誦せよと全国の国分寺に勅命を出させました。病氣平癒読誦祈願が天皇の為であったのだが、今日に至ってもなお「春秋二季皇霊祭」という形で宮中行事として伝えられています。

「たたりしづめ」という密教的怨霊信仰が一般民衆の間に次第に広まり、浄土信仰に支えられていったので、墓詣りや先祖供養の習俗を生み出してきました。この習慣はインドにも中国にもなく、日本特有のものなのです。

釈尊降誕会

四月八日はお釈迦様の誕生を祝う法会で、灌仏会とも花祭りともいい、保育園では白象をひいて村内を回ったり、れんげ草の花等できれいに飾られた花御堂に小さなお釈迦様の像をまつり、頭へ甘茶をそそいでお祝いするのです。又ヤカン等もってお詣りし甘茶を貰って賑いました。

これは生蓮寺で行われた行事でしたが、今では寒修行共々姿を消してしまいました。又善光寺如来一光三尊仏の御開帳も気候のよい時期に勤修され、余興に浪花節が行われたりしたものでした。

花まつり



おしゃかまの
かたんじょうを
みんなで
おいおいいた
しましゅう

はらだいこ

十三夜（陰曆九月十三日の夜枝豆や栗などを供え月を鑑賞する行事陰曆八月十五日の十五夜は仲秋の名月とて薄を立て団子、里芋等供え月見をした。十三夜は豆名月とも後の月見ともいう）この日昼間、新藁二、三把を束にし縄でぐるぐる巻にスゴク堅く結びつけ一米位の野球のバット様のもの（藁鉄砲）を作っておく。中にはよく音が出るよう中心に里芋のズイキを入れて作る人もあった。

どこの家でも乾粳の為庭は広かったので、夜になると村の子供達が持ち寄って集まってきて「九月節句の腹だいこコワイを食べて腹一杯腹につかえてようたたかん」と歌い乍ら一処に地面にたたきつけながらしたものだ。そして二、三日は続けられた。

所によつては、お大尽の庭先でやりお菓子を買った事もあったそう。農村の風習か、もぐらおどしか或は子供の遊びかは定かでない。

念仏会

生蓮寺では、大豆の獲れた頃に、夜念仏講信者達が本堂に集まり、大きな数珠を手ぐりに回し乍らお念仏を高唱したものです。これを百万遍念仏と申します。

建暦二年（一一二二年）正月二十三日病床に臥されていた、念仏の元祖法然上人に門弟たちが「浄土念仏の教えの要点を書き残して下さいませ」とお願いし「一枚起清文」を書かれて二日後の二十五日の昼称名念仏の中に息を引きとられました。この入滅の日（今の二月二十五日）を御忌会と申し報恩法要がとまりました。浄土宗の開祖、法然上人は親鸞聖人の御師匠様です。

秋葉様祭り

船附は他村にくらべて秋葉神社の多い所です。大
体小字毎に奉祀されて居り、今では鼠ヶ森、港、中
屋敷、紺屋敷、寺屋敷、六羽野、元屋敷と七ヶ所あ
ります。

十月十七日と一月十七日（十五日が祝日になって
からこの日お祭りを行う所が多くなった）には幟や
屋形を建て境内で火を燃やし神官を招き祭典が行わ
れます。この前に遠州秋葉山本社へ代参する風習が
残っています。火伏せの神様でしてお使いは天狗様
です。

収 穫

稲刈りはノコギリ鎌で手刈りし束ねたのを、ハサ
掛け田乾して干藪で穂籾を稲扱きし（やがて足ふみ

機械に変わりましたが）藁を丸めて作った大きなビク
に入れ田圃から家迄になってきたものです。その後
大八車が出来て家へ運ぶ様になり非常に楽になりました。
家では乾し籾といい庭一杯藁を並べて天日で
乾かします。鎌上げは野上がりとも云い、牡丹餅を
作って労をねぎらいました。

乾燥籾がたまると夜に籾摺り土臼で唐臼引きをし
ます。男は俵編み縄ない女はつぎ当て、お裁縫等夜
なべ仕事をしました。こうして四斗入り米俵（今六
十疋）に詰めて俵装縄がけし、十二月に年貢出し
（戦後は供出米）を終り、歳末には媒払い等して新
春を迎える準備をして来たものです。

今では農機具の発達によりコンバインで稲刈りか
ら脱穀迄一度に出来て自動車で袋詰め籾を家へ運び
乾燥機にかけて乾かします。乾燥したら機械で玄米
にし三十疋入り紙袋詰となし農協倉庫に保管売渡し
ます。近頃は営農形態も変り段々農協のカントリサ
イロを利用委託する農業に移りつつあります。

大掃除

戦前は毎年春秋二回、決められた日にしたが、家の中の大掃除が義務付けられていた。各家では期日前晴天の日を選び、長竹の先に笹葉をゆわえ家の天井の煤を払い落とし、畳は天日に乾して細い竹等で埃を叩き出す。

床板もめくってくもの巣や塵埃もキレイに掃きとり、風を通して乾かし最後に消石灰粉を播いて蚤等の発生を防いだ。

障子の破れの繕いもして廊下に至る迄雑巾がけしてピカピカにしたものだ。終ってから検査があり「清潔検査済」の紙札が配られた。

今は掃除機で毎日清掃するので大掃除も行われ無くなった。

万灯流し（火流し）

毎年八月三十一日夕方には機帆船や砂利船所有者で船附栗笠横曾根の船頭が主体となって船の安全を祈念して牧田川で火流しを行った。これも大神宮お祭りの行事です。

横曾根橋の下に船を浮べ、品質の悪い綿やボロ布切に石油をしみこませ、これを小さな板切れに乗せて火を点けて流す。火流しの火は点々として流れ川面に映えて旧笠郷郵便局北太神宮さんの所から川に添って右へ曲り見えなくなりますが、夏の風物詩として横曾根橋の上や右岸堤防は沢山の人がで埋まり観賞されました。

これも牧田川改修工事開始と共に姿を消してしまいました。

七 五 三

報 恩 講

十一月十五日は子供の無事成長と健康を願うひとつの節目に当り、これを祝う行事として、三才の男児（髪置き）五才の男児（袴着）七才の女児（帯直し）を祝い、将来に対する願いをこめて、子供の年令に合った晴着姿で近くの神社などに参拝してお祈りし、親は千歳飴を買い与えたものです。大体十一月中に行われます。

七五三は子供の成長の過程で智慧がつき初め、また病気にもかかり易い時期なので良い子に成長することを神様をお願いする親心の大切な祭りであり、子供に責任感と行いの善悪を躾ると共に、年齢に応じて自分のことは自分で出来るよう良い習慣を身につけさせ、独立心を養う幼児教育の大切なときでもあります。

昔、尊光寺では寒の内一月中頃に三日間に亘りつとまり御伝抄が夜で寒いので、只今では十一月十四、十五日、法覚寺が廿四、廿五日、横曽根安臨寺は一月卅、卅一日に勤修されます。

「御正忌報恩講」は浄土真宗十派本山とも宗祖親鸞聖人への感謝を捧げ恩徳に報いる最も大切な法会で七昼夜八日間に亘り行われています。

京都東本願寺では十一月二十一日から二十八日迄行われ、仏光寺、興正寺、錦織寺の各本山も同様で、農家では平素から本山詣りを楽しみに秋の取入れ作業に努めており（お西と高田本山は一月九日から十六日まで）又村々の末寺ではその前後につとまります。お寺と門徒が一体となって行う年中行事です。門信徒の方々の協力で、仏具のお磨きから始まり、お華束搗き五色の幔幕張りがなされ、仏華も見事にたてられ最上の打敷を用い、仏前を荘厳されます。

どこでもお逮夜・晨朝・お日中・親鸞聖人の伝記
 「御伝抄」の拝読等おつとめと御法座があります。
 読経の中心は、浄土真宗の根本教典「教行信證」の
 行巻の最後にある「正信念仏偈」と和讃です。昔は
 子供達も手をひかれて詣り、新嫁様は着飾り姑に案
 内され師匠寺へお詣りしお斎を頂いて飯りました。
 おときは精進料理でお坪にはイトコニといって小豆
 に里芋を入れてよく煮た甘い汁が出ます。一説では
 遺徳煮のなまったもので芋や小豆で甘味を出したも
 のと云われます。又所によりノッペ汁（野菜のゴタ
 煮）や納豆汁の所もあります。
 お平は大根二切とアゲ一枚です。何れも親鸞聖人当
 時を偲ぶ精進料理なのです。
 在家でもお取越といって、新春前後に勤められて
 おり、お手次の僧侶を自宅に招き縁者知己が集まり、
 正信偈勤行を唱和し、イトコニを作りノッペ汁等簡
 単な料理で酒やお斎が出て雑談したものです。

仏教会寺院地域別宗派別一覧表 (S53.10調)																										
地域別	合計	天台宗	高野山真言宗	真言宗智山派	真言宗豊山派	浄土宗	浄土宗鎮西派	浄土宗西山派	西山淨林寺派	派済宗妙心寺派	派済宗南禅寺派	曹洞宗	浄土真宗本願寺派	浄土真宗大谷派	浄土真宗高田派	浄土真宗盛願寺派	浄土真宗仏光寺派	日蓮宗	真言宗	本門仏立宗	妙見宗	法相宗	黄檗宗	時宗	中 立	浄土真宗興正派
大垣市	197	5	1		19		1	13	8	8	120	1						6	7	1	1	1			4	1
養老郡	117	3	1		3			17	1	2	5	85														
安八郡	99	3				6	1	2	7		3	7	65	2				2						1		
海津郡	111		2	1		2	10		6		4		82	1	1		2									
不破郡	71	2			1	3			10		11	4	37				1								2	

寒 修 行

毎年一月寒の入から寒明けまで厳寒の中、生蓮寺の庵主様と尼僧二人で寒修行をなされ村中或は隣村、横曽根や下笠迄廻られた。

お釈迦様の托鉢修行を偲び乍ら、草鞋履で笠を冠り法衣をまとい、首から前にかけた鉦（真鍮性）を小さな金槌でチンチンチンと打鳴し乍ら念仏して回られた。後に藤井貞三郎さんが籠を天秤棒で担いで付添われ、夫々の家で寄謝されたお米を運ばれた。

家の前で鉦が鳴りお念仏の音が聞えると農家では米一合、非農家は一〜二銭を施した。托鉢が終るとお念仏とお経を読まれ、次の家へ立ち托鉢を乞われるものだが、戦時中に世相の変化で途絶えてしまった。

今も街では禅宗の若い雲水僧の鈴の音や日蓮宗の僧侶がウチワ太鼓をたたき乍ら寒修行をして廻っているのを見る。

人 物

○村会議員

谷 省吾 安田 稔
西脇 東作 伊藤 孫三郎

野崎 正男 西脇 正義

藤井 作蔵 近藤 繁

伊藤 幸平 西脇 余一

○町会議員

田中 虎男 近藤 繁

西脇 長吉

○郡会議員

鹿野 正雄

○県会議員

安田 正鷹（笠郷村長もされた）

○渋谷代衛翁

大野

文政七年三月二十五日生れ（一八二四年）

明治二十九年八月十五日没（一八九六年）

一、堤防修繕 大野村を守る堤防のため私財を

投じて修繕工事

一、学制のはじめ 私宅の一部を校舎にして私

費で先生をたのみ村内の子

弟を教育

一、養老公園の開発

同志を集め偕楽社を興し公園づくりに
私財を投入（道路 桜 楓 並木）

一、明治二十四年 濃飛大地震で家屋全壊 残材
を集め小屋をつくり弥縫庵に
住む（弥縫庵逸話）

※養老公園滝谷に顕彰碑が建てられている。

○藤井実応明誓上人 船附

・藤井宗市さんの長男として明治三十一年十月二
十三日（一八九八年）生れ 名前重吉

・船附の学校を卒業後苦学して京都の中学校へ

・お母さんの急死にあい大正八年八月南濃町行基
寺に入って得度 大正十四年宗教大学卒業

・豊橋住友青年学校校長、名古屋市の東海高校講
師、旧国鉄名古屋鉄道教習所講師 各寺の住職

・昭和五十三年大僧正 大本山増上寺第八十四世
法主

・昭和五十七年六月第五代浄土門主

知恩院第八十五世門跡

・全日本仏教会会長、全国国宝重要文化財所有者
連盟副理事長等就任、

・平成四年九月三日遷化 享年九十五歳
法名 光進社大僧正明誓上人生阿法仙実応

大和尚

（以上両氏略歴は笠郷小学校廊下掲示に依る）

（参考）

九里半街道

（岐阜県地理地名事典）

江戸と京都を結ぶルートの脇往還のひとつであり、
中山道より牧田川沿いに揖斐川に達するものである。

具体的には名古屋・桑名から京都への荷物は揖斐
川水運を利用して牧田川に入り、美濃三湊の柴笠、
船附、烏江につき、ここより荷物を牛馬につみかえ、

ではないが、濃州循行記に「此三ヶ湊は元龜、天正

年間の比、西国の諸候中山道より牧田川へかかり、
是より船にて通行せらる事ありし也……」とあり古
くから利用されていたことが分る。江戸時代になる
とこの三湊が尾張藩領にあたるため強い保護策がと
られ、元和七年（一六二一年）に木曾川の錦織・太
田、長良川筋の上有知、墨俣などの領内の諸湊、諸
河川の庄屋に対し、上方への荷物舟などは濃州三湊
に着けるように命じている。しかし、後背地をもた
ない中継港、濃州三湊は尾張藩権力による統制もむ
なしく、次第に衰退し、大垣湊にその繁栄をうはわ
れていく、この三湊の盛衰は米原港開発による琵琶
湖水運と密接に結びつく一方、牧田川が扇状地河川
であるため、土砂堆積により天井川化したため湊と
しての機能を失なわせたことに一因がある。

（注）三湊が発展した理由

太平洋方面と日本海方面・東日本と西日本の間の
輸送に一番短かく、一番速く、一番賃金が安くつい

た為だ。

（参考）

船 附（ふなつき）

（角川日本地名大辞典）

船着とも書いた。牧田川の下流右岸に位置する。

中世から近世にかけて河港として栄えた所で地名は
それに由来する。

「新撰美濃志」は、平治の乱に源義朝が美濃国青
墓から野間の内海へ落ちた時は、平氏の兵にとがめ
られた折戸の関は当地であろうと記している。当村
はもと小字米野附近にあったが水害を避けて永禄年
間に現在地に移ったという。

〔近世〕 船附村 江戸期～明治二二年の村名。美

濃国多芸郡のうち。はじめ幕府領下笠代官、石原
清左衛門支配。元和五年からは尾張藩付家老今尾

竹腰氏知行地。村高は「慶長郷牒」七〇二石余

「正保郷帳」七一〇石余はかに新開六三〇石余

「天保郷帳」七二八石余。弘化五年二一〇戸・一

〇五〇人。民家は川岸に沿って建ち並ぶ。烏江・

栗笠とともに濃州三湊の一つとして繁栄。浦高札

があり、船稼ぎ戸数は八戸湊問屋は安田七郎兵衛

上り荷物を多く取り扱い、名古屋の荷物は納屋町

桑名より運送、信州あたりの荷物は犬山問屋より

運送（濃州循行記）明治四年岐阜県に所屬。

「町村略誌」によれば、当村は東西九丁南北二十

一丁総反別二一九町余（田一四八町・畑二十町・

原野一町二反）県庁へ七里、郡役所へ一里三十四

丁、掛斐川・牧田川には五間以下の船が通じた。

掛斐川の堤八五〇間、牧田川の堤一六五七間。

用水は牧田川から引水。荷物問屋一軒、運船二二

艘。戸数二四七戸、人口一二〇三、ほとんどが農

家であるが、料理屋、居酒屋のはか商店が数軒あ

った。なお人力車を十四両保有し、船附組合駅伝

取締所がある。五等郵便局、修文学校があり、通

学生徒一八九人。神社に郷社八幡神社のほか村社

伊雑神社など六社、寺院に真宗東本願寺派尊光寺

・同法寛寺、浄土宗鎮西派知恩院末生連寺がある。

土産物は米一三一〇石・大麦六〇石・小麦五〇石。

同二二年船着村の大字となる。

〔近代〕 船着村 明治二二～三十年の多芸郡の自

治体名。船附村・大野村が合併して成立。旧村名

を継承した二大字を編成。明治三十年下笠村はか

二か村と合併、笠郷村となる。二大字は同村の大

字に継承。

〔近代〕 船附 明治二二年～現在の大字名。はじ

め船着村、明治三十年からは笠郷村、昭和二十九

年からは養老町の大字。

昭和五十年国道二五八号が完成。

（注）最近一般的に（ふなつけ）と呼んでいる。

大 野（おおの）

牧田川の下流右岸に位置する。当芸野の東端にあたる地域といわれる。「美濃国諸旧記」の城主所主諸士伝記によると当地の住人は大野主水義光とある。

〔近世〕 大野村 江戸期～明治二二年の村名。

美濃国多芸郡のうち。はじめ幕府領下笠代官石原清左衛門支配。元和五年からは尾張藩付家老竹腰氏知行地。村高は「慶長郷牒」一一三石余「正保郷帳」一一九石余「天保郷帳」一一一石余「旧高旧領」では一七八石余、寛政年間の戸数六〇（うち高持百姓四〇）人口三〇四馬三匹、弘化五年五八戸二六四人 明治四年岐阜県に所属「町村略誌」によれば当村は東西三丁南北十二丁余総反別四九町八反余（田二八町余畑九町）県庁へ七里二八丁郡役所へ一里三四丁堤は揖斐川に七三〇間余津屋川請中堤九六間、烏江・江月両村恵水落杵樋を揖斐川筋に設置（昭和三十九年土地改良工事の結果

この恵水落江はなくなったが杵樋はそのまま残る）用水はこの恵水路から引く。戸数七一、人口三八八馬一八匹全村農業。船附村修文学校出張所があり生徒七六人。神社は村社八幡神社ほか二社、寺院は真宗東本願寺派寛林寺。低湿地であるため堀田があり。農業用船兼揖斐川舟運用として六三艘の小舟を持っていた。主な物産は米二六七石余大麦六三石余小麦一六石余 同二二年船着村の大字となる。

〔近代〕 大野 明治二二年～現在の大字名。はじめ船着村、明治三十年からは笠郷村、昭和二十九年からは養老町の大字。

横 曾 根（よこぞね）

抗瀬川中流の左岸の低地に開け浅草輪中の南部を占め東境に水門川が南流する。大永年間に土豪安田

右兵衛尉重春が開発したと伝える。枝村に横曽根新田がある。

〔近世〕 江戸期～明治三十年の村名。美濃国多芸郡のうち。はじめ高須藩領のち幕府領 元和五年からは尾張藩領、慶安二年本田久兵衛の取立てにより横曽根村新田が開発。村高は「慶長郷牒」三〇石余「元和領地改帳」三六石余のはかに新開畑方二石余 承応二年の検地による新田高は六八四石余（濃州循行記）「天保郷帳」七二三石余「旧高旧領」では七二一石余 寛政期の家数七九人数四二七（濃州循行記）寺院に真宗大谷派安臨寺があり、大永三年創建 明治四年横曽根新田を合併同年岐阜県に所属同一四年の反別二四町戸数一〇九（神社一、寺院一）人口六〇〇。小学校区は高遠学校。舟は三間船十一艘荷積車三両を使用、堤は村の南方牧田川に沿って九四〇間、村の東方揖斐川に沿って九四〇間、漁場は揖斐川筋にあり。漁船五艘小網十張大網一張を有し漁人五人。津渡

は横曽根渡しと称し牧田川岸にある。物産は米、大麦、小麦、黍、稗、大豆、藁麦、蜀黍（町村略志）同二十四年の濃飛地震による被害は全壊五十三戸半壊五十八戸（震災詩附一）明治三十年安八郡浅草村の大字となる。

〔近代〕 横曽根 明治三十年～昭和二十三年の浅草村の大字名。

昭和二十三年大垣市横曽根町となる。

〔近代〕 横曽根町 昭和二十三年～五十一年の大垣市の町名 昭和四十九年一部が昭和一丁目となり残余は同五十一年横曽根一～五丁目となる。

〔近代〕 横曽根 昭和五十一年～現在の大垣市の町名一～五丁目がある。

（注）昔は多芸郡横曽根村だったが後浅草村そして大垣市となり明治三十年八月安八郡に編入。

多藝郡舟付村

一竹腰小傳次采地。

一太閤^〇概免六ツ五厘八毛、元高千六十三石三斗九升麥租廿九石二斗田畠七十二町四反五步内畠三十三町六反九畝十六步、
一高七百十石九升、内八石溪後高元高六百三十石一斗九合、概免六ツ五厘八毛高九百四十三斗六升七合麥租二石同前同村新田、田畠六十二町九反二畝六步田五十九町六反九畝十八步、畠四町二反一畝十八步、内屋敷二反八畝二步

一延寶八申年御纏入高六石五斗一升二合麥租一石一斗八升同前同村中新田、畠五反九畝六步此新田を村方にては古堀新田と云

○濃陽志畧「舟付」莊名不詳、南北可^ニ五町、東西一町、至^ニ尾州府下二十里「山川」牧田川、揖斐川至此合流○渡

口、航至^ニ横會根「戸口」戸二百十三、口千「租税」七百二石九斗「神祠」八幡祠、村民奉祀「寺觀」法覺寺、一

向宗東派、直參○尊光寺、同上。「州此ニヶ寺共境内ニ畝廿歩あり、御年貢地也、八幡社境内一反、是も御年貢地。」

一此村野西東へ三町程、北南へ一町程艸野郷の北にあり。

一新田元高の内九石八斗六升大野村小物成高新田になる分、殘て六百二十石二斗四升九合、繪圖帳に新田と立よし覺書にあり。

一通衆御馳走船其外御用の船役あり。

一古男女六百六十五人、馬五十三匹○今家二百十二戸、男女九百四十一人、馬十八匹。

一此村覺書に北村郷の内とあり○三日役百八十人。

一名古屋へ九里、船路十五里 ○佐渡川、牧田川の落合に村あり、此村より養老瀧の南の山を踰伊勢國川原村へ出る歩行路あり。

一此村元高七百二石九升は元和五末年御拜領五萬石の内なり。

一見取二町五反五畝七步、内畠一畝六步定引、殘二町五反四畝一步、此内田二畝十五步、畠二町一反五畝五步、柳原

一反三畝廿步反三升河原二反二畝廿一步反一定納米二石五斗五升。

一元文三年改見取九畝廿二步、内畠六畝十七步、屋敷廿五步、草野二畝十步、定納米四升五合。

一本田高の内一石七斗四升四合、此田畠九畝十五步、堤敷地前々引十五石五斗五升一合、此本田田九反七畝廿五步、

此概高十五石五斗五升一合、新田田三町二反一畝十七步、内上田九反一畝六步分米十一石八斗五升中田五反一畝九步イ五ナシ

分米五石六斗四升下田一町七反九畝二步分米十六石一斗一分米合三十三石六斗一升五合、此概高四十八石二斗四升六合、

二口高合六十三石七斗九升七合、右の本田田九反七畝廿步田井桁敷地證文引、此本田、新田惡水落園新井桁敷地系は

享保八癸卯年より證文引になる。

一新田高の内一斗九升一合、此畠一畝十步、堤敷地前々引四十八石二斗四升六合、此田三町二反一畝十七步園井桁敷

地證文引○此新田は下笠村界にありて水場なり、されば高九百四石三斗六升七合の内五百五十一石六斗六升八合、

此田三十八町三反八畝九步年毎に御代官檢見の上三役銀引高に立來れり、畠は伊尾川堤外にあり。

一四至、東西七町、南北十七町半ほど。志東隔川至豊喰西至上郷南至大野北隔川至横須賀。」

一經界、東は伊尾川を限り、川向は大垣御預處鹽喰村、南は大野村、下笠村、西は大垣御預處上ノ郷村、栗笠村、北は

栗笠村もかゝり、又牧田川を限とし、川向は横會根村なり、此にては伊尾川は東より、牧田川は西より流來れり。

一此村は伊尾川の堤西傍にあり、こゝにて牧田川伊尾川へ落合、川中廣くよき湊也、民戸は川の落合にかたどりと建並船着自由也、村の名もよく叶へり、此湊に浦高札あり、村中南北に堤の跡あり、今古堤新田と云、傍らに街道通ぜり、北の方牧田川に横會根への渡船あり、町並なく商家とびく^くにあり、船かせぎをする者も八戸ほどあり、御役船九艘、外に無役船一艘、鵜飼船三艘、小船五艘ほどあるよし、湊間屋を安田七郎兵衛と云、こゝは上り荷物を多く取扱ひ、名古屋よりは納屋町桑名屋伊右衛門より運漕し、信州邊商物は犬山間屋より運漕するとなり、湊役は金一兩三分納來れり、此湊は伊尾川附故船がかりも多くみへたり、此村は農商を兼る者少く先農事を専世産とす、頭百姓を谷傳之右衛門、安田與左衛門、安田七郎兵衛、安田金十郎、勇吉と云、與左衛門、金十郎は庄屋也、七郎兵衛湊間屋の由緒わからず、此村にては安田氏を稱する者皆頭百姓なればいづれ古き家筋の者とみへたり、此四人は地頭より帶刀、苗字免許也、其内勇吉は萬治元成年より帶刀、年頭御目見被^レ仰付、苗字は天和二戌年初て御免の由、安田氏なり、今は幼年に付繼目を未願と也、其餘中以下の百姓多し、一村立の處なれども本郷の外に六羽野、鼠ヶ森は西にあり、○田面は本田の字を村西、元屋敷、米野、五反田、アガタキ、門田、中起、フゴバ、雨引場、七反、長杖、下文、苗代、井戸池など云、又新田の字を東沼の江東、江西、外沼、外沼、中沼、西沼の江東、小曲輪、神成と云、此村は本田共に新田界よりは水場なり、惡水落は東大江通と云、又栗笠村よりの惡水落を西大江通と云、東西共に下笠村の細池へ落込めり、江月、烏江の惡水落江筋は南の方へ筋ちがひにあり、○堤外新田畠伊尾川岸に鹽喰村のとび地あり。

一牧田川中三十間、伊尾川中五十間ほどあり。

一此村に親子、毒藥、切支丹、火付、浦高札あり。

イ御

イあり

イ大

多藝郡横曾根村

一石見檢○概免四ツ五分八厘二毛○元高卅六石一斗八升内八石野年貢

一高四十一石四斗四升五合、田數九町三畝廿一步、内畠二町六反九畝七步、屋敷三反十八步、葭野二町三反三畝廿步、草野三町七反六步。

一麥租一石五斗○畠積六七一五反米六斗三升○屋敷高段米九斗一升六合四勺、葭野高段米七斗六升二合七勺、草野高段米二斗二升九合一勺○稅則不同。

一元高二石四升四合、概免一ツ七分五厘新田高八斗九升五合古野也此畠四反四畝一步○麥租一斗五升○畠積四五一反米四斗三升○免不同。

一承應二巳年御總入巳新田高六百八十四石八斗六升八合、此田畠五十九町二反七畝廿六步、内前々引高百四十一石六斗五合の田畠十二町二反五畝三歩、引殘高五百四十三石二斗六升三合、此田畠四十七町二畝廿三歩田卅町七段七畝、畠十五町二段五畝廿三歩、内三段一畝十九歩屋敷○麥租十五石四斗五升○稅則不同。

○澤陽志略「横曾根」莊名不詳、東西三町、南北二町許、至尾州府下九里、或云大塚莊「山川」梓斐川、在村

東○牧田川、在村南「戸口」戸六十八、口三百十九「租稅」三十六石一斗八升「神祠」八幡祠、村民奉祀「寺觀」安臨寺、一向宗東派、屬今尾西願寺「州安臨寺境内一反除。」

一此村野北南へ二町程、西東へ一町程草野郷の東北南にあり、今此草野は皆新田の内へ入たとみへたり。

一此村は元來野方にて大川筋高き處へ付品ありて葭野、草野高卅六石一斗八升なりしが慶長二五年本田久兵衛新田を取立、五年の内は段米四斗つゝ召上られ、承應二巳年檢地入高六百八十四石八斗餘の新田となるる由百姓除地覺書

にあり、此元高三十六石餘、長十三申、年石見檢なり。

一此村新田の内、杖守給下田一反五畝餘。

一牧田川に船付の方へ渡船あり、横倉根持にて馬船也、又此村より福東村へ伊尾川に船渡あり、是は福東持也、此先

萩原宿へ出る街道也、是より大惣村にて長良川を越、又尾州中野村にて木曾川をこす也

一古男女百三十八人、馬十匹、○今家七十九戸、男女四百二十七人、馬九匹、○三日役四十八人。

一名古屋へ九里、船路十五里。

一此村元高三十六石一斗八升、元和五末年御拜領五萬石の内なり。

一見取田畠一反八畝、田一反五畝、畠三畝、後田になる、水場に付定納不同。

一米五石、是は淺草村より出る井領、内一石九斗三升八合、飯田村井領年々渡、○此井領の事覺書にあり。

一四至、東西八町五十間、南北五町三十九間。○志東隔川至福東、西北至淺草、南隔川至舟付、北至中村。

一經界、東は大垣御預處福東村、南は同支配鹽喰村界に伊尾川を隔つ、又正南は牧田川を限り、川向は船付村也、西は大垣領高淵村、西村、北は同領中村、東村なり。

一此村は石見檢の後徳永法印領せられ、隱居後は岡田將監支配になり、元和五末年御拜領御領分となる、其比まで本田ばかりにて一面葭野、草野なり、新田を開墾せしより一村立となれり、民居は牧田川の渾りにありて船付村と川を隔向合へり、本田高は皆堤外牧田川より伊尾川の岸へ付押回しにあり、居屋敷も三反七畝廿歩ありて民居餘程堤外へつけり、小百姓ばかり也、畠方も元河原にて地高けれども其内高低により三四合目より水溢れのと云、新田は堤内へつけり、田三十一町七反七畝一步の内一ノ割二町九反九畝十八歩、二ノ割六町三反四畝十九歩、四、五ノ割三

生蓮寺について

浄土宗で高称山と号し開創は元徳元年三月徳川時代浄念大徳を開山とし元祖法然上人によって独創せられた本願念仏の実践道場としている。

御本尊は舟形阿弥陀仏で両脇には善導大師法然上人が安置されている。伝説では村内で火事が非常に多く鎮護を願ってお寺を招請され以後火事が無くなったとか。

始め住職は男僧だったが最近は尼僧となり、歴代は浦善了、川瀬了道、川瀬（松永）了光である。檀家がなく村中信徒達が取持って居る。

本堂南墓地には生蓮寺中興開山忍誉上人（文化八西四月二十日遷化）を中心に日露戦争、大東亜戦争戦没者の石碑が一番高く祀られている。

孟蘭盆会の前八月十日に精霊棚を飾ってのお施餓鬼法要が勤まり八月二十四日地藏盆には境内地藏堂にお供物をそなえ赤提灯をつるし村人達浴衣着の子

供を連れてお詣りする。

宗祖大師七百五十年の際何とか御遠忌を行いたいのと庵主様の熱意要請により世話方達も動き出して百二十万円の多額浄財が集まり昭和四十二年五月浄土宗大僧正藤井実応貌下を招聘し稚児行列も谷省吾宅から寺迄行われ実に盛大に勤修された。現在本堂再建は大正末期栗笠大工故田中庄三郎氏丁稚上がりの初仕事といわれ一之瀬方面迄用材曳きに行かれた人もあった。

門前には耕地整理完了を記念し船附土地改良区で浄土宗高称山生蓮寺の寺標を建てられた。

昔話のいろいろ

冒頭昔話の舟での嫁入三件、人力車でのお嫁入り、狐狸の住む竹藪が所々にあったせいか狐にバカされて泥田の中を歩き回って帰った話、下池細

池の竜の天上り（竜巻で小船が遠くの池迄飛んでいった）細池囲提防で大蛇を見たとか、多度山麓を行く狐の嫁入りという火の行列、村の小川での小魚すくい、川藻など生えてる中を鯰や鰻捕り或いは蜆取り田圃でのたにし拾い源氏螢の生息東八間での草刈り牧田川や掛斐川での水泳、とあみ漁池でたらいに乗ってひしの実とり等色々懐かしい話を聞かせて頂きました省略致します。

小字一覽

（角川岐阜県地名大辞典）

笠郷村船附

栗笠東 北小川道西 南小川 北小川道東 釜池
西小川 西深池 東小川 鱒池 江西 宮辺
村内西ノ割 村内北ノ割 村内南ノ割 鱒池江東
寺屋敷 六羽野 元屋敷 北米野 県木道西

栗笠

県木道東 角田江西 角田江東 五段田
南米野 中起 富護場 雨引場 七段長
杵下江東 杵下新堀 杵下江西 茶ノ木原
大苗代 東井戸池 西井戸池 北ノ切 砂切戸
大流 神成田道西 神成田道南 神成田道東
乙堀 上田 西沼堀西 除外 西沼堀東
十人割 中代道西 中代道東 弥造バツカ
名古屋地 名古屋地新堀 中沼堀西 中沼堀東
外沼 勘右衛門田 大割田 仁右衛門田道西
仁右衛門田道東 東深池 東沼堀西 東沼堀東
十二石 小曲輪 南川並 東川並 北川並
西川並中道東 西川並中道北 西川並中道南
西川並杵西 西本田飛地
村内 村前 仲田 内草場 井戸池 五島新田
上之郷
川田 大具戸 蓮池 浮 乙ヶ池 砂盛
一丁貝戸 川原毛 井戸池 戸池 流 池田

畑屋 乙堀

下笠

川東 下市場 上市場 湯口 中島前 中島

和田ノ崎 中村 東江下 西江下 構 懷

三ツ屋 中段 三畝町田 日暮 除下 諏訪ノ木

中沼 五町田 山ノ内 細池 東真曾根 除内

大野

船附境 六左田 畔江田 平池 出口 村内

馬道 横代 大勢町 南横代 南長嶋

二ツ杵福束田 南川並 中川並 北川並

現在小字名

(笠郷村土地宝典)

小川 深池 村前東 西川並杵西 西川並中道南

西川並 中道北 西川並中道 宮辺 北川並

村内西ノ割 村前西 井戸池 杵下 上田 中代

大割田 村内北ノ割 村内南ノ割 東川並

西本田元屋敷 南川並

(参考)

各村庄屋人名調

(古文書に依り)

田中育次調査)

船附(ふなつき)

(寛文) 七郎兵衛・太右衛門・三郎右衛門

(享保) 忠兵衛・三郎右衛門・金十郎・伝之右

衛門・弥兵衛・新十郎(元文) 与左衛門(寛保)

弥兵衛(延享) 安田弥兵衛・与左衛門(宝暦)

与左衛門(明和) 金十郎・与左衛門・弥兵衛・

伝右衛門(安永) 与左衛門・金十郎(天明) 安

田与左衛門・安田金十郎(享和) 与左衛門(文

化) 谷伝之右衛門(文政) 谷伝之右衛門(天保)

谷伝之右衛門・要吉（嘉永）総年寄 庄屋兼谷民吉・谷伝

之衛門・安田弥兵衛・安田七郎兵衛・七郎兵衛・舟付村惣年寄庄屋兼帯谷伝之右衛門（安政）谷伝之右衛門・安田七郎兵衛・安田弥兵衛（万延）安田弥兵衛

（文久）谷伝之左衛門・安田弥兵衛・安田七郎兵衛

衛（元治）谷伝之右衛門・安田弥兵衛（慶応）谷

伝之右衛門・安田弥兵衛・安田七郎兵衛（明治）

谷伝之右衛門・総年寄 庄屋兼谷伝之右衛門・戸長安田七郎兵衛・谷伝之衛

郎兵衛・谷伝之衛

大野（おおの）

（寛文）孫左衛門（享保）利兵衛（元文）利兵衛

（延享）利兵衛（宝暦）喜兵衛（明和）利兵衛

（安永）渋谷理兵衛（天明）渋谷理兵衛・渋谷利

兵衛・祐右衛門（寛政）渋谷理兵衛（享和）利兵

衛（文政）渋谷利兵衛（天保）渋谷理兵衛・彦吉

（嘉永）渋谷代右衛門・代右衛（安政）渋谷代右

衛門（万延）渋谷代右衛門（文久）渋谷代右衛門・

彦吉（慶応）渋谷宅右衛門・渋谷代右衛門（明治）渋谷定次郎・渋谷宅次郎・戸長渋谷代衛・戸長渋谷宅治郎

下笠（しもがさ）

（明暦）伊左衛門・庄左衛門（寛文）瀬兵衛・

左七郎（享保）彦作・林蔵・孫右衛門・弥三右

衛門・下笠邑 全名主庄五郎（元文）惣十郎・孫右衛門

（寛保）宗十郎（延享）孫右衛門・惣十郎（宝

暦）孫右衛門（明和）儀右衛門・勝六・磯右衛

門（安永）四郎右衛門（天明）小野作兵衛・与

三郎・彦作（寛政）彦作（享和）彦作（文化）

北垣彦作・田中文左衛門（文政）常三郎・田中

文左衛門・北垣彦作（天保）頭百姓 庄屋彦一郎・

長百姓惣年寄 見習庄屋兼田中権之右衛門・頭百姓 庄屋常三郎・

田中常三郎・北垣彦一郎・田中文左衛門・作右

衛門（嘉永）作兵衛・文左衛門・北垣彦一郎

（安政）田中文左衛門・常三郎・彦一郎・作兵

衛・北垣彦一郎・田中常三郎・山野作兵衛（万延）
田中文左衛門（文久）田中長右衛門・幸三郎・作
兵衛・田中文左衛門（元治）小野作兵衛（慶応）
小野作兵衛・田中千代三郎・田中文左衛門・田中
幸三郎・田中長左衛門・北垣要太郎・泰三（明治）
庄屋 田中権之右衛門・田中千代三郎・田中文左衛
当番 門・小野作兵衛・田中長右衛門・北垣要太郎・田
中藤次郎・戸長田中貞次郎・戸長田中泰造・戸長
田中要造

栗笠（くりがさ）

（寛文）九兵衛・所平（元禄）二郎左衛門・治郎
右衛門・治郎左衛門 以上三人
同一人か（永禄）次郎右衛門
（宝永）次郎右衛門（享保）長右衛門・元右衛門・
彦助（元文）元右衛門（寛保）元右衛門（延享）
元右衛門（寛延）川口元右衛門（宝暦）元右衛門
（明和）市右衛門・惣右衛門・武左衛門・喜三郎・
文四郎（安永）伊三郎・文四郎（天明）伊三郎・

佐藤文四郎（寛政）伊三郎・佐藤文四郎・市右
衛門（享和）市右衛門（文化）佐藤文四郎（文
政）佐藤宇内・佐藤右内・庄屋 佐藤多左衛門
（天保）佐藤文四郎・市右衛門・佐藤宇内・文
右衛門・庄屋 佐藤常三郎（嘉永）文四郎・佐藤
道三郎（安政）佐藤文四郎（文久）佐藤稀造
（慶応）庄屋代 武右衛門（明治）佐藤稀造・佐
藤文四郎・佐藤宇右衛門・戸長高橋治兵衛・戸
長佐藤吉六

上之郷（かみのごう） 幕府直轄地

（明暦）治郎兵衛・五兵衛（寛文）治兵衛（享
保）源次郎・領左衛門・留兵衛（元文）留兵衛・
領左衛門（寛保）次郎兵衛・留兵衛（延享）次
郎兵衛・留兵衛・領左衛門（宝暦）留兵衛・領
左衛門（明和）領左衛門（安永）領左衛門（天
明）藤太夫（文化）周右衛門・藤太夫（文政）
藤太夫（天保）領左衛門・藤太夫（嘉永）藤太

夫・周右衛門・領左衛門（慶応）川口藤太夫・藤
右衛門（明治）川口藤右衛門・戸長白井速雄

（注）庄屋役は十八世紀頃は世襲であったものが、
江戸時代中期以降互選の方法が見られるようになってきた。互選の中には毎年あるいは隔年に交替
していく年番庄屋等といっている場合もある。また
入札で決める場合もある。（今で言う選挙）特
に西美濃では「頭百姓であること」という前提条
件があり、農民の中には頭百姓と脇百姓（下百姓）
の上下に分れ、村の開発以来在村しているとか、
かつては侍の家系であったとか、身分階級制村落
秩序の維持に努める為に苗字を名乗り家屋の構え
や婚姻祭礼などに特権を持っていた。
庄屋になるには役柄上、筆で文字を書き算盤を使
う事多くその知識教養が是非必要であり、村内の
もめ事も解決せねばならず、家格や財産を備えて
いることが必要となっていた。

八幡神社のお祭り

毎年十月五日は旧笠郷地区全村がお祭りです。

この日に親類縁者を招び手作り料理で御馳走しあ
ったものです。今は昼間に青年会が揃いの祭半被
を着て大御輿をつり村中を練り回ります。朝神官
を招き神事を行います。

大太鼓は四張あり、上若（鼠ヶ森）寺若（寺屋
敷）一若（六羽野）と呼ばれていた青年会主体で
各組毎にお守りしています。祭り前に夫々の組で
も幟や提灯屋形を立ててお祝いします。

四日試楽祭五日日本楽祭が行なわれ夕刻には太鼓
を八幡様へ持寄ります。宮総代達も協力してくれ
ます。

夏には破れた太鼓は張り替え等しておき、九月中
には二丈余の大櫓が組まれ幟を立てたり準備して
おきます。そして夜大櫓にひき上げて四個の揃い
打ちをするのです。

深夜のこととて太鼓の音は大垣市街地でも聞えたといわれました。

境内には大櫓中心に両側には雨障子屋根のある屋形をたて御神燈提灯に灯を入れます。新樂は白洋蠟燭三本、本樂には四本をとりかえ櫓太鼓は打囃し続けられ下では櫓の周囲を円形に微酔い機嫌の村人の踊りが行われます。八幡神社大鳥居前には大幟二本立て国旗竿先端に高張提灯が上げられ櫓正面には養老町無形文化財と大書した長い角提灯が飾られ石垣合間合間に角行燈もつけられます。村中の参詣道路には下馬提灯もともされます。

でんからかしどじよう白川踊りと順次行われ提灯の蠟燭も終り太鼓を各組に引上げると二時近くになった事もありました。昔は福束から仁輪加に変相して組になって踊りの輪に入られ近村からも踊りに来られてそれは賑やかでした。

村の若連中も東村や横曾根（一日祭り）福束（十七日で近郊秋祭の最後）の祭りに豆しばり手拭持参

で踊りに行ったものでした。

今では他村は大部分十月十日（体育の日で祝日なので）に村祭の日取りが変り客招びの風習も少なくなりました。昼間から出店がお宮付近に一杯出て、着飾った子供達は輪投げをしたり、駄菓子や甘栗もちやや綿菓子等貰って貰う楽しい一日なのです。

六日は山おろしといい若連中は太櫓を取壊し、材料丸太を片付け境内清掃して祝宴に入ります。栗笠では子供の獅子舞いがあるので見に行ったりしました。昔はテレビもカラオケもなかったので祭の晩、手拭で頬かぶりしたり捻鉢巻したり、花笠かぶって女の長襦袢借着して踊るのも、娘が晴着姿で踊るのも若い衆のエネルギーの発散の場所となっていたのかもしれない。

兎も角昔から伝わる伝統行事なのです。年々青年会の数も減りつゝある現代（出生率の低下）大変ですが、伝えてゆきたいものです。

祭の音頭

お祭には村人氏子一同孫にも着物をきせて氏神様にお詣りする。お宮前の露店で駄菓子やおもちやをねだって買って貰う。夜お詣りするには晩秋とて膚寒い、親達は子供達に風邪ひかせぬ様注意して連れて行く。夜店は大賑いだ。夜が更けると共に白川からどじょう踊りになる。拝殿前石段と大鳥居下とに歌い手が分れ上の句下の句掛台いで唄われる。お酒も入り相手次第で歌はどう変るか分らない。歌詞はきき覚えで正確には伝わらないが大体次のようである。

「年に一度の鎮守の祭り

猫も杓子も皆出て踊る

そろたそろたよ踊り子が揃ろた

踊子がそろたら音頭にしよか

音頭はどじょだよ皆出て歌え

へたも上手に皆踊れ

太鼓たたけば踊り子が寄るよ

下手も上手も皆出ておどる

踊りおどるなら品良く踊れ

品のよいのを婿にとる

松坂越えて今出たが

何からいをやら申そうやら

「いざり勝五郎車にのせて

引けや初花 箱根山

こころ辺りは山がゆえ

紅葉のあるにき雪が降る

引かるこの身はいとわねど

車引く身はさぞ辛からう

松坂越えて今出たが

こころ辺りは山がゆえ

寒かる寒かるさぞ寒かる

雪の峠を越す迄は（註いざり勝五郎）

「鈴木主水という武士は

女房持ちにて二人の子持ち

子供二人あるその中を

今日も明日もと女郎買い許り

見るにみかねて女房のおはる

ある日わが夫主水^{ツモシズ}に向い

わたしやりんきで云うのぢやないが

殿の御首尾が気にかかる

十九二十の身ぢやあるまいに

やめておくれよ女郎買いばかり

聞いた主水は腹立てられて

己が才量で直らぬものを

たかが女房のこしやくな意見

たぶさ^{チャ}とらえて打ちちよう着^{チャ}（註鈴木主水）

「寺は駒込吉祥院

書院座敷の次の間で

もしもしこれ吉三^{キッサ}さん

私しや本郷へ行くわいな

たとえ本郷とこの寺と

道のりどれ程へだつていても

道のどれ程へだつていても

心へだてておいとくれ（註八百屋お七）

「己が鎮守は陽気な方で

踊つて歌つて馬鹿さわぎ

娘島田に蝶々がとまる

とまる筈だよ花ぢやもの

唄え唄えとせきたてられて

歌が出ましょか汗が出る

音頭歌うのはアラ内^{ウチ}の人

踊り踊るのはアラ内の嫁

唄の文句はコンナ調子でまだ色々あるのだが、

酒の勢いで声をはりあげて延々と深夜迄続くのだ。

太鼓の音と共に大櫓中心に輪になって踊りもされる。

戦死者村葬

(尊光寺記録)

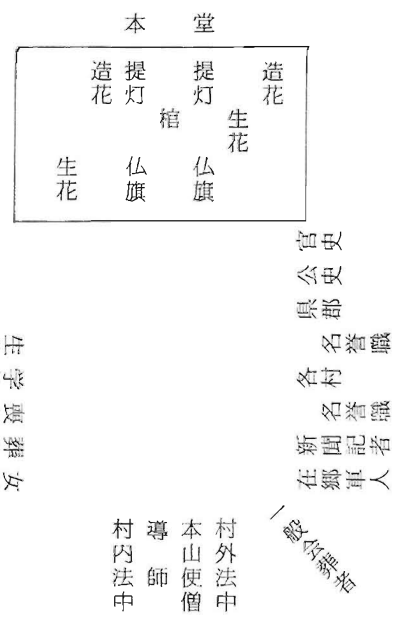
六羽野 北川繁蔵

法名 釈 学了

明治三十七年十一月廿六日

右三十七年二月十日宣戦ノ詔勅発セラレ日露ノ大偉
 戦開始セラル同人補充兵トシテ召集ニ相成同年十一
 月廿六日旅順口ニ竜山攻撃ニ参加シ名誉ノ戦死ヲ遂
 ク但其当時行方不明ノ処五旬余ヲ経テ死体発見ノ上
 戦死ト認定相成候 尚同人ハ補充歩兵一等卒ニテ恩
 賜金四百七拾円 公債 証書 葬資料十八円下付本山ヨリ前記
 法名表装書附ノ上下附 三十八年九月十八日当寺境
 内ニテ村費ニテ即チ笠郷村長兼義勇会長元吉孝三郎
 葬主トナリ村葬執行当寺導師已下笠郷村内寺院法寛
 寺専了寺興専寺願専寺浄誓寺浄雲寺覚林寺生蓮寺会
 葬、先ツ当日喪主宅ハ代本尊安置内勤終リテ庭内勤
 メ終リテ列ヲ為ス先高張ニ基佛旗 六金色縮緬 一基村
 ニテ新調

外寺村内寺次ニ導師生花造花各二対松明銘旗香炉
 棺 四名 白丁 喪主葬主佛旗一基高張二基一般
 会葬者威儀ヲ正シテ当寺境内ニ入ル当寺境内ノ装
 飾ハ本門前ニ白高張二本国旗交サシ本堂向拝裏ヲ
 白幔ニテ張り左ノ図ノ如シ着席



(注) 六羽野 岩田未蔵 九月十八日午后一時当寺境内ニ於
 テ村葬執行
 六羽野 宮嶋芳兵衛 鼠ヶ森 西脇留兵衛 九月十九
 日当寺境内ニ於テ村葬執行

戦没者と遺族

私が物心ついた大正昭和始め頃は世界大戦後の不景気のドン底であり、きびしい政治世相の中、どんな仕事をするにも忍耐と体力を余儀なくされました。ただ一つの救いは人と人とのふれあい、ぬくもりのこもった思いやりのある親しいおつき合いであったことです。

経済的にゆとりはなく粗食に耐え身にはボロに等しい着物をまとい、土に生きる喜びと感謝に、常にもったいないばかりが当たると物を大切にした先人たち、太平洋戦争中は若者を戦場に送り、老人と女子で銃後を守り食糧増産に努められた。そして終戦後は帰還された方々共共荒廃した社会を一致団結復興に努められ、幸いにして戦後四十数年平和に過ぎ今では世界の経済大国と云われる迄発展しました。

旧笠郷村での戦死傷病死者は日清戦争（明治二七八年）二、日露戦争（明治三七・八年）一八、日華

事変一六、大平洋戦争一二四計一六〇名地区別では船附四五、下笠六一、栗笠二二、大野二二、上之郷一〇計一六〇名であり、大平洋戦争では戦没者三〇〇万人四九六億円の膨大な戦費を費している。船附区関係で御国の為一命を捧げられた方々を風化させない為にも次に列記させて頂きます。

光陰矢の如しとか、あたら若き青春の命を戦争の犠牲として散された最後の方でも早日露戦争では九十回忌、大東亜戦争でも五十回忌（平成六年）となりますので、平和な日々暮らしに慣れつつある今日、御先祖様にこんな方があったかと思っ頂けたらと祈念しつつ、今更過ぎ去りし日の速さを感じる次第です。

（法事年回の項参照）

(順序不同)

法 名	年 月 日	死 亡 場 所	俗 名	遺 家 族	続 柄	住 所	備 考
釈 大 佳	明 38. 3.27	奉 天	留兵衛	西脇 久衛	兄	鼠ヶ森	
釈 俊 勇	37.11.25	清国盛京省	定 七	西脇 新七	叔 父	紺屋敷	
釈 学 了	37.11.26	旅 順	繁 蔵	北川角治郎	兄	六羽野	(釈齊入)
釈 大 信	38. 3. 2	奉 天	末 蔵	岩田伊三郎	父	中屋敷	
釈 順 知	38. 3. 7	旅 順	芳兵衛	宮嶋 惣六	子	六羽野	
釈 観 信	38. 3. 9	奉 天	新 蔵	水谷新兵衛	子	紺屋敷	
釈 俊 道	37. 8.20	旅 順	金 弥	水野 新六	子		(名古屋)
釈 正 感	37. 8.15		藤 弥	水野			(不 詳)
寂光院釈普覚	昭 20. 8.17	満 州 国	長 一	近藤 進	弟	六羽野	22才
勝智院釈正武	20. 8. 5	兵庫県 川西航空機	武 司	水谷 繁	子	中屋敷	軍 属
浄心院釈詮寿	20. 3. 5	ジャワ沖	萬寿枝	伊藤 喜作	弟	紺屋敷	26才
忠順院釈了勝	19. 7.18						(不 詳)
釈 昭 栄	20. 5.27	フィリピン	栄 一	渋谷 秀雄	妻の兄	元屋敷	大野より移住
武勇院釈秀康	17.11.21	中 支	秀 康	生田 一男	義 兄	港	21才
釈 義 周	12.10.10	中支宝山県	滋	西脇 孝一	兄	紺屋敷	
閻光院釈善隨	12.11.12	上 海	伊 六	藤井貞治郎	長 男	六羽野	
忠良院釈孝真	18. 5.20	マーシャル群島	金 一	野崎 秀雄	弟	六羽野	
至誠院釈徳香	20. 7. 8	中 支	徳次郎	藤井 信雄	父	六羽野	39才
誠心院釈忠鋭	18. 8.28	中 支	鋭 雄	野崎 藤市	子	鼠ヶ森	
盡忠院釈義丈	18. 9.30	中 支	丈 夫	西脇 俊裕	叔 父	六羽野	
至誠院釈明忠	19. 7.16	門司海上	明	伊藤マヌヲ	夫	(犬 山) 港	(釈清聖)
南浄院釈忠武	19. 7.18	マリアナ諸島	武 夫	西脇 忠男	兄	港	
南溟院釈義正	19. 7.18	サイパン島	正 八	西脇 利吉	弟	六羽野	
揚徳院釈俊雄	19. 7.30	フィリピン	俊 雄	栗田 一郎	弟	元屋敷	27才
義徳院釈正道	19. 9. 6	サイパン島 ホーゲンビル	道 雄	中島 かつ	夫	元屋敷	34才
悠久院釈義賢	19. 9.30	マリアナ諸島	賢 三	宮島 芳一	義 兄	寺屋敷	32才
至誠院釈大信	19.10. 7	ビ ル マ	大 造	西脇勘十郎	妻の弟	鼠ヶ森	25才 (釈教信)
忠照院釈壽明	19.11. 5	中 支	照	西脇 信義	義 兄	鼠ヶ森	

法 名	年 月 日	死 亡 場 所	俗 名	遺 家 族	続 柄	住 所	備 考
純孝院 釈義信	昭和19.11.11	フィリピン レイテ島	義 信	水谷 始	弟	紺屋敷	
至誠院 釈良雄	19.11.14	シンガポール バーシー海峡	良 雄	伊藤 多助	四 男	寺屋敷	22才
鑑忠院 釈秋孝	19.12. 4	ソロモン諸島	秋 雄	藤井 泰一	長 男	元屋敷	22才
了知院 釈正道	19.12.14	フィリピン レイテ島	長 一	中島 長治	長 男	港	
報国院 釈利忠	20. 1.18	満州方面	利三郎	高木 利則		紺屋敷	37才
殉国院 釈貞意	20. 1.22	中 支	貞 幸	大橋 貞一	子	紺屋敷	
法性院 釈秋明	20. 2. 8	レイテ 島	正 一	伊藤 美義	兄	鼠ヶ森	22才
直行院 釈数芳	20. 4. 6	フィリピン レイテ島	治 吉	伊藤治郎七	長 男	鼠ヶ森	
純真院 釈義俊	20. 4. 8	フィリピン方面	俊 夫	西脇			(不 詳)
至誠院 釈義道	20. 5.16	マレー半島 軍艦初鷹	義 男	中島 又三	長 男	元屋敷	26才
一行院 釈正信	20. 5.25	ジャワ方面	才 市	西脇 久衛	弟	鼠ヶ森	(岐阜) 44才
一行院 釈信道	20. 8. 7	ルソン 島	一 男	宮島四一郎	兄	寺屋敷	
忠孝院 釈繁勇	20. 5.29	太平洋 野崎東方	繁 雄	宮島 真吾	弟	寺屋敷	
了知院 釈政道	20. 6.15	フィリピン ミンダナオ島	政 一	北川 よね	長 男	港	(今村移住) (不 詳)
信義院 釈浄智	20. 7. 6						(不 詳)
護国院 釈清意	20. 9.20	北支 河南省	幸	伊藤 義照	弟	鼠ヶ森	27才
護皇院 釈成道	20.11.12	撫 順	日之丸	伊藤 義照	弟	鼠ヶ森	(長 浜) 32才
鑑忠院 釈章人	20.12.14	シベリヤ	章 人	児玉 秀月	義 弟	鼠ヶ森	
大光院 釈貞徳	20.10.30	フィリピン	貞 雄	伊藤 利雄	義 兄	港	27才
鑑忠院 釈武運	19. 7.18	マリアナ サイパン	武 保	生田 一男	義 兄	港	28才
忠良院 釈武信	20. 4.23	沖縄 群 島	武 雄	西脇 勘治	父	紺屋敷	(釈信導)
順国院 釈幸洋	19. 7.18	サイパン島	渡辺 幸四郎	岡田 守	妻の父	寺屋敷	(輪の内)
清信院 釈正敏	20. 4.10	マニラ 沖	村瀬 正 敏	川瀬ひふみ	弟	紺屋敷	(馬之瀬)
安陽院 釈忠證	19. 1. 8	台 湾 沖	忠 一	西脇定右衛門	三 男	鼠ヶ森	(野 口)
(不 詳)	20. 6.15	ルソン 島	娶 夫	中島			(不 詳)
報国院 釈順西	20. 5.19	豊川海軍工廠	木村 三 吾	伊藤きたを	弟	鼠ヶ森	(小倉)16才 学徒動員

(昭和24年3月10日遺族会追慕謹誌法名記に依る)

耕地整理

昭和三十四年夏八月十三日、明治二十九年大水害以来の集中豪雨に依り根古地に於いて牧田川堤防が決潰し家財道具、小動物等流失し農作皆無損失甚大、辛じて人命の損失は免れたが牛馬と共に高地避難生活が続き、切れ所がほゞ復旧した九月廿六日伊勢湾台風で再度決潰多芸輪中は月餘にわたって泥海と化し惨状言語に絶するものがあった。

救助と復興の一助として農林省は農地復旧整備

(土地の区画整理と共に埋立干拓事業)を計画せられた。関係者これをうけて立ち百七十四名団結して笠郷埋立干拓組合を結成、総工費四千五百萬円をもつて池沼を埋立ておよそ二十町歩の美田を造成した。

一方笠郷土地改良区では理事十九名監事三名総代五十名を代表に救農土木事業として34・11・25申請翌35・4・12認可され4・13起工式を行ない工事終了期日は40・3・31換地面積六九〇万平方米六九〇

町歩で組合員数六八九名総事業費六ヶ年分一億九千七百三十七萬九千円費やして現状の様に道路水路が整備された。

工事中には農家組合員は一丸となり協力、女性でも就労して慣れぬトロツコ押し等もされた。

(日当四八〇円位か)又或る時には内部告発があり、改良区役員二人が警察で嚴重取調を受けたが、不正は見つからず不起訴となり、関係全百姓の始末書押印提出でケリがついた由。

今日自治会館前に整地記念碑が建てられてある。

(注) 明治廿九年大洪水

大垣城天守閣北西石垣に水位標が表示してあり、その高さに驚かされるが港西脇礼二様二階迄浸水したと語られていた。

伊勢湾台風襲来 午后十時瞬間最大風速は四二、二米

※残念土地の高低基盤整備迄は手が廻らなかったが、道路水路は出来現状となった。

横曾根渡し

昔濃州三湊（鳥江・栗笠・船附）として船運で栄えた船附には牧田川対岸の多芸郡横曾根村への人々の交通として渡し船があった。

上流の栗笠村東端に対岸多芸郡浅草西村（現大垣市浅西町）への渡しもあり、対岸から川の上にワイヤーを張っておいて、それに船をこいでいく「おかたしき」という方法がとり入れられていた。知る限りでは横曾根渡し船は横曾根の杉本清作さんが船賃をとり船頭をされていた。へ宝暦十二年（一七六二）御船奉行所の掟あり。後記参照」その頃には運営されていたものと思われる。

昔の船附は半農半商の村ではあるが高田に次ぐ大村であり、三湊で桑名・名古屋への船便物資の陸揚地でありここから九里半街道を通り牧田へ出て琵琶湖畔米原湊に通ずる水陸の要地なので町通りではあらゆる種類の商売屋が立ち並び近郷村人が日用品を

求めて集まり又福東大藪へ行くにもこの渡しを越え船戸新水門を通り揖斐川へ出て再度船渡の渡船（上流には城浦^{シロウラ}渡し）を利用せねばならず、又笠郷地区から大垣の町へ行く道筋でもあり人の往来が多かった。最近では国道が開通し福東大橋（46・11・20完成）も出来て便利になったものだ。

大正二年（一九一三）木造一部金属利用の横曾根橋（延長50米）が架けられ横曾根寄橋脚中央に川上に向い飛び込み板（鉄製幅90糎）が造り付けられており水泳で高飛び込みをした記憶がある。又この橋の西側に渡橋料金徴収所（番小屋）が設けられて徴収していられた。渡し船は架橋と共になくなり橋賃はその名残りか。又この橋は横曾根区民が地租割に準拠して賦課した金を基に架けたものであるからか。横曾根区民は無料、船附住民は区費で毎年一括して支払っていた。料金は一人一銭自転車二銭定期バス六銭馬車五銭荷車三銭となっていて横曾根のドル箱的存在だったが昭和

十四年頃国の移管となって料金徴収廃止となった。

昭和28・9・24台風13号の余波で当地方一帯に集

中豪雨が降り輪中堤防上からうつむいて手が洗える程の大洪水であり夜半遂に橋は流失してしまった。

その後暫くして仮橋が架けられたが川面に近く雨で牧田川が増水すると浸水して通行止めになったりした。昭和33・8・17旧横曽根橋下流約百米のところ
に外淵橋と共に横曽根橋が永久橋として架けられ人も車も往来が楽になった。反面天井川で川の様子も
変わり船便物資も水門川で大垣高橋湊に移り垂井經由
となり今ではその面影を偲ぶ事も出来なくなつてしま
った。

現在では更にその下流に養老大橋（52・2国道大
桑道路二五八号線の開通）も出来て時の流れでトラ
ック陸運輸送に変わり車の往来が頻繁となって仕舞っ
ている。

参考（今村輪中郷土誌より抜萃）

◎多芸郡横曽根村渡船定書

牧田通り

一、多芸郡横曽根村 自分渡船壹艘 長五間四
尺 巾四尺八寸

右渡船、常々往来乗入数高三十人程度迄、乗セ
来候由候得共以後乗人数高十五人迄に限り、乗船
致させ、其の内乗馬壹疋は人八人前駄荷壹駄は三
人前、乗懸壹駄は二人前、長持一掉四人前、乗物
一挺四人前、挾箱一荷一人前之積り相心得、其外
牛馬荷物等、右に準し、乗入数之高に積り渡越可
申候且又右渡船作直し又は修復等にて間数延縮有
之候はば其旨早速役所へ申達、乗入数之定可請差
船図。

一、渡場往来 指^{サシ}湊^{アツリ} 候節は船人より断等不
聞入、船不相応に大勢乗込候故怪我等有之旨相
聞候間以後右定之外、人数多く、乗込候はば船人
より強氣に無之様委断申聞、船よりおろし、渡船
迄為待置可申候若断承引無之放て有之候はば幾度

も断申、船出し、申間敷候、勿論漕渡し候節は、船投等骨折を不厭、随分大切に取扱可申候。

一、出水風雨之節は、別而入念乗入数相減、船入相増、大切に渡越可申事。

一、渡場往来 指^{サシ} 湊^{アツリ} 候節、又は出水風雨之節は、庄屋組頭会裁許過等無之様可想事。

右之趣以来堅く相守、毛頭^{ソリヤク}鹿略無之様に取扱可申候以後若忽ニ想得猥之儀於有之は、船人は勿論、庄屋組頭等迄吟味之上急度処可申付者也

宝曆十二年午十二月 御船奉行所

この渡船定書を現代風になおすと次の通り

牧田通り

一、多芸郡横曾根村 自分渡船一艘

長五間四尺（一〇、三 m）

幅四尺八寸（約一、五 m）

右渡船は常に往来に際しては三十人程度まで乗せてきたが、以後は十五人迄に限って乗船させ、その内馬一頭は人八人、駄馬に乗せた荷物は三人（馬と

荷物で十一人分となる）、背負った荷物は二人、長持一掉四人、乗物（駕籠）一挺四人、挾箱^{ハサボコ}（かえ持つ箱）一荷一人前である。そのはか牛馬荷物等は右に準じ、乗船人数に換算すること。また、右渡船の作り直し、または、修復等で間敷延縮のあるときは、その旨速かに役所へ申達し、乗入数を定める。船の設計図等を添付すること。

一、渡場に多くの人が集った時は、船人から断わり、不相応に大勢の人が船に乗込み怪我等も出るから、石定に従い、もし人数多く乗込んだ時は、船人は強気に断わり、多く乗った場合は船からおろして待たせおき、幾度も船を出し、乗る人を大切に扱うこと。

一、出水や風雨の時は、乗る人を少なくし、回数を増やして大切に渡すこと。

一、渡船場が混雑したり、出水風雨の時は、庄屋組頭会は過ちのないようにすること。

右の趣旨を堅く守り、いささかでも粗略に扱わないようにし、もし好^イい加減な運営をしていた場合は、船人は勿論、庄屋組頭等に至るまで吟味の上処罰する。

宝暦十二年十二月（一七六二） 御船奉行所

◎養老町旧町村沿革表より抜萃

明治元年 村名	幕末 領主名	明治元年 村高	明治四年 村高	旧県名	沿革	
下笠村	今尾藩	一、八一六	一、八一六	今尾県	下笠村	
船附村	今尾藩	一、九九三	一、九九三	今尾県	船附村	船着村
大野村	今尾藩	一七九	一七九	今尾県	大野村	
栗笠村	今尾藩	九七八	九七八	今尾県	栗笠村	明二三七一合併
上之郷村	幕領大垣預	六一六	六一六	笠松県		
笠郷村 明治30.4.1合併					沿革	
養老町 昭和29.11.3合併						

（注）一、明治六年六月 石高の称を廃し反別を使わせる。

二、横曽根村は始め高須藩領幕府領次いで尾張藩領（石高七二九石四斗二升）明治三十年安八郡浅草村大字横曽根 昭和二三年六月一日大垣市に合併横曽根町となる。

船頭さん

今はみられぬ風物詩だが昔はのどかに帆かけ船が川を遡江したものだ。^{ソコウ}

牧田川の中央が村境であり、向う側は輪之内町や大垣市となっている。船附地内は度重なる改修工事で全く川の面影は無くなってしまった。

川幅や水量は米野団地の新提合流地点から南の大野分に残っているのみだ。

船附には港地区主体に専業の船頭さんが沢山住まわれ栗笠にも安藤甚平・伊藤末吉（栄一）様等居られた。勿論百姓と兼業の方も居られる。三湊盛んな徳川時代は分らないが、大正から昭和初期の村での船主船頭を思い出す儘列記してみよう。

港 西脇茂作（正一）・伊藤金蔵・伊藤政吉・

伊藤円吉（浅吉）・伊藤与右衛門・

伊藤竹治郎・小川喜市（清）・西脇禮二・

松原万次郎

紺屋敷 安藤乙吉・伊藤余兵衛^{ヨヘエ}・西脇定吉

鼠ヶ森 小畑嘉平治・中川文七

六羽野 藤井新蔵・西脇国三郎・水谷賢造・

藤井市治郎

砂利漕船 西脇多十郎・野崎金次郎

注（ ）は親子、敬称略す。

近世江戸時代当地の輸送は水路船運送が主体だった。おそらく谷氏等庄屋の仕切られた年貢米等は船で尾張藩へ運搬されたと思われる。

取扱荷物は野菜、反物以外一切の雑貨で米、味噌溜、油、材木、^{ダンス}箆、陶磁器等ポンポン船で運ばれた。

船頭仲間頭分的存在で面倒見の良かった円吉様息子で唯一人現存の浅吉様のお話では、持船は今でいえば長さ約一六、一米八間一尺（九、九四トン）で米だと二百俵から二百三十俵（一三トン位）大垣への石炭運搬は濡れてもよいので一五トン位のせて河合石炭や松岡石炭店等へ運んだものだとこの事。

桑名から海へ出ると大変だった。風向きや天候急

変を心配しつゝ航行され、漸く名古屋に着き堀川に

入ると又々船がヒシメキ合いその混雑の中の出入りにも難儀された由。伊藤金蔵・中川文七・伊藤浅吉・伊藤栄一様達四人だけが名古屋に店を持ち、名古屋大垣間荷物を運んで居られた。

女房は舳^{ヘサキ}で監視道案内夫は後部で舵^{カシ}取り、赤坂行で川上にのぼる時米野や十七淵の急瀬はロープで先引きし大垣行水門川は八兵衛橋から今村まで先引きしたものだ。ポンポン船になってからは機械操作に変わった。

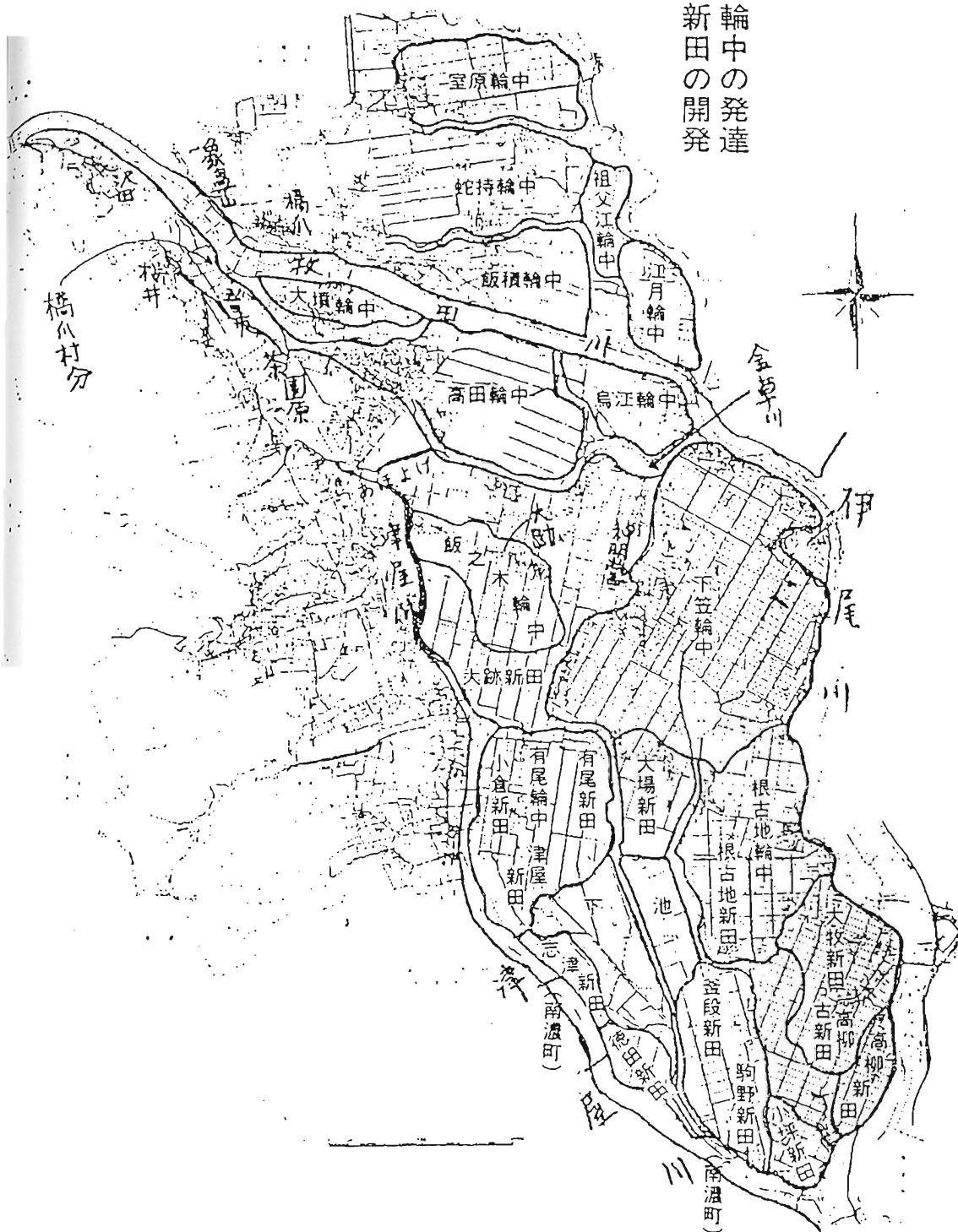
船大工は二戸で船源（小川源太郎）玉屋（水野玉次郎）そして横曾根にも一戸あった。

盛んだった船附湊を後世に残す様にと区長様達役員の骨折りで船附湊址碑を大垣共立銀行船附出張所付近に建立下さる様、町に申請中です。

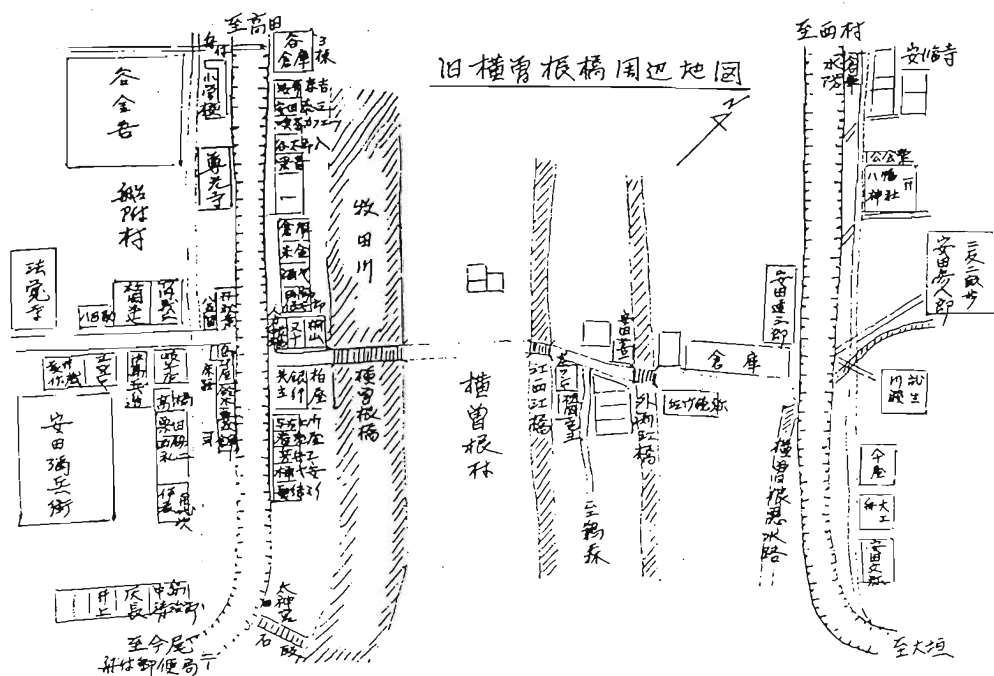
安全走行十則

- 一、運転する前にシートベルト
- 一、安全速度を必ず守る
- 一、十分な車間距離をとる
- 一、カーブの手前でスピードを落す
- 一、交差点では必ず安全を確める
- 一、割り込み運転をしない
- 一、一時停止で横断歩行者の安全を守る
- 一、わき見運転をしない
- 一、睡眠不足や体調のよくない時は運転しない
- 一、飲酒運転は絶対にしない

輪中の発達
新田の開発



◎旧横曽根橋周辺地図



伝内切れ

六羽野材長様西で堤防が切れて洪水となり、その折西脇国三郎様と近藤作右衛門様屋敷間に大きな池が二つも出来てミヨと呼んでいた。今は埋められて宅地や田畑に化して居るが、この切れ所復旧には砂利や砂で埋められていた。

又堤防小段には小さな祠が建っていた。古者は「伝内切れ」と呼んでいたが、伝承によれば堀田音治郎様五代前に伝内と呼べる人あり、少く共百五十年前以前と思われるのだが……

昔から牧田川筋大出水水害は度々あり大墳村嶋田村烏江村破堤はしばしばで多芸輪中入力で万延元年（一八六〇）六月二十九日舟付村堤切れの記録あり、これかも知れない。

昔の村と職業

村には鎮守さま八幡神社があり、各地区では秋葉神社を祀り、お寺も三ヶ寺（真宗二ヶ寺浄土宗一ヶ寺）あって、昔から宗教心の厚い土地柄なのだ。今は信教の自由で数多の新興宗教も広がりつつあるのだが、大部分は浄土真宗の門信徒である。

官公署でも役場・小学校・巡査部長派出所（部長と巡査二人常駐）郵便局・銀行が整い、職業でも殆どものがある、近郊から用事で集まる村人も多かった。

当時の職業を次に列記してみよう。

酒屋 溜り屋 米屋 薬屋 油屋 八百屋
豆腐屋 風呂屋（銭湯） カシワヤ 茶碗屋
商人宿 玉突 呉服屋 料理屋（飲屋・仕出屋）
下駄屋（履物） 紺屋（藍染物） 洗張屋
タバコヤ 塩屋 菓子司 雜貨屋 人力車夫
灰買 船頭（大船・砂利船乗り） 飛脚屋

荷馬車曳き 髪結 産婆 内科医院
針はねつぎ医 棺屋 仏壇屋 提灯屋 僧侶
材木屋 大工 木挽引き 石屋 左官屋
指物屋 土建屋（土不請負師） 瓦葺師
自転車屋 鋳力屋 鍛冶屋 漁夫 庭師
先生（学校教師・裁縫お針子） 蚕桑仲買人
養豚 養鶏 船大工 卵仲買 養蚕 等々。

大神宮さん

元郵便局の北に船頭さん達が招請されてお祀りしてあった。下から堤防外側に石掛けで積み上げられていて横に川面迄階段で降りて行ける様になっていた。お祭は八朔（旧八月一日）と思われる。川使とは今のトラックに替る流通輸送方法で、積荷を満載し牧田川揖斐川伊勢湾を航行して名古屋迄船で往復され、桑名からは帆かけ船で遡って

来て、長閑な風景もみられたものだった。

川が近くで曲り、瀬になっていたので船便の目印か、航行の安全祈願の為か……

第一次牧田川改修の時現在地（中屋敷地区）に移転された。其後戦争となり、村の若者達の応召が続いたので、昭和十四年支那事変応召記念として留守家族達や石工安田喜八さん水谷周造さん等のお骨折で台石に出征兵士の名を刻み武運長久を祈られたもので、残念今では風化して姓名定かに読みとれないが……

今は区で護り申して居り九月始お祭りがなされている。

金比羅さん

船附湊船運の關係で、大正末期にも港地区に多数の船頭さん達が居住されていたので皆で船の安全航

海を祈り、金比羅様を招聘されて当時堤防上の港地区秋葉様境内にお祀りなされた。時は大正十四年四月、竣功の余興の催物として、子供角力や餅撒きが行われた。

昭和八年牧田川右岸堤防拡張の為移転、幸い河川敷地（堤防の村側下部）に余祐あり、内務省（今は建設省管轄）の許可を得て移転した。昭和五十一年二回目牧田川改修拡張の時は余祐がなくなり、移転場所数ヶ所を物色したが色々事情があって定まらず困り果てていた。此頃にはお祭等一切船頭さんから区長主管に渡っていたので、困った時の神頼み、或る人の発案で直江の御嶽様にお伺いしたら場所を指定され、金比羅大権現様も余り遠くへ行きたくない兼ねてお願いせよの御返事あり地主と交渉したが駄目。

遂に三役で地主の御先祖にお願いする事となり、墓前で僧侶を招き読経祈願を行った。翌朝交渉に際し漸く地主二人の承諾を得る事が出来、現在地

（紺屋敷地内）に決定。移転して今も四月始めに区
でお祭りを行っている。これは知られざる移転につ
いての裏話なのである。

今ある行事と兵隊のこと

昔なかって今ある行事に成人式と敬老会とがあり
ます。成人式は男女満二十才になる同級生達が一月
十五日におとなになったことを自覚しみずから生き
抜こうとする青年を上げます意味の祝祭日となり、
全国で地方自治体毎に催されます。

又敬老会は九月十五日敬老の日に多年にわたり社
会につくしてきた老人を敬愛し長寿を祝う行事とし
て、満七十五才以上を招待し公民館婦人会が主体に
なっている行われています。

昔は徴兵検査があり郡役所で満二十才となった青
年男子が身体検査を受けたものです。体格に依り甲

種第一乙種第二乙種丙種等にランクづけられ、甲
種合格者は帰りに料理屋へ繰込み祝宴を張ったり
した。

やがて現役兵として否応なく軍隊に入隊して国
を護ったものです。

明治六年（一八七三）一月十日徴兵令公布以来
富国強兵の掛声の許に昭和二十年八月の大東亜戦
争敗戦（一九四五）前迄続いていました。

兵隊送りには入営男子は親類知人村人達に見送
られ各家を出て鎮守の八幡さまにお詣りし武運長
久を祈り最後の祝盃を上げ烏江駅まで祝入営の幟
を先頭に村人達楽隊で送り出したものです。

昭和二年十一月中旬に陸軍秋季大演習が当美濃
平野部から関ヶ原に回けて行われて、歩兵部隊が
田圃の中を北上してきて散兵線突撃演習をしたり、
又一部の騎兵部隊は横曽根橋落下を想定して東側
から港地区で渡河作戦をしたり又民家に分宿した
りしました。

歩兵・騎兵・砲兵・工兵・輜重兵・通信兵・航空兵等兵科はちがっても二年間の現役生活満期除隊には部隊前土産物店で連隊名や軍旗入りの盃等を買ひ隣近所へ配り其後在郷軍人として予備役、後備役と毎年訓練は続きました。

昭和十二年（一九三七）日支事変勃発以降戦争拡大に伴い現役兵予備役兵は云うに及ばず乙種丙種等国民兵役の男子も召集令状（赤紙）に依り応召して戦争にかり出されました。

神 社 （養老郡志）

八幡神社 郷社 笠郷村大字船附字宮辺

祭神 応神天皇 比咩神 神功皇后

由緒 当社は寛文五年五月里人安田孫三郎、伊勢神宮に到り、御師某の周旋に依り八幡大神を勧請し、安田弥兵衛所有地一段二畝餘を寄附して社地とし

て創建す。孫三郎は安田淨通という人の孫にて、同弥五右衛門の子同通意の従弟なり。其後境内猶狹隘なるに依り、同金十郎及高淵村川口太郎兵衛の兩人各社地を寄附せりとぞ。如斯由緒あるを以て安田弥兵衛子孫の者社地の公租課役を勤めすべて一社の事務を管理し来りしが、明治六年一月村社より郷社に列せらる。境内伊雑神社（同名二社有り）は伊佐波登美命及玉桂屋姫命を祀る。由緒不詳。秋葉神社は火之迦具土神をまつる。初め牧田川堤上に創建しありしが、明治十年九月当八幡社境内に遷座す。境内四百七十四坪。

秋葉神社 無格社 笠郷村大字船附字六羽野

祭神 火之迦具土神

由緒 不詳 境内四十三坪

多度神社 無格社 笠郷村大字船附字宮辺

祭神 天津日子根命

由緒 文久元年酉五月牧田川堤上に鎮座敷地一坪

多度神社 無格社 笠郷村大字船附字六羽野

祭神 天津日子根命

由緒 文久元年酉五月掛斐川堤上に鎮座 敷地二坪

秋葉神社 無格社 笠郷村大字船附字北ノ割

祭神 火之迦具土神

由緒 不詳 明治十年九月再建 敷地二坪二合五勺

秋葉神社 無格社 笠郷村大字船附字寺屋敷

祭神 火之迦具土神

由緒 不詳 明治五年九月再建 敷地一合

秋葉神社 無格社 笠郷村大字船附字村内南ノ割

祭神 火之迦具土神

由緒 不詳 明治十年九月再建 敷地一坪

〔参考〕

寺院 （養老郡志）

生蓮寺 浄土宗

笠郷村大字船附字寺屋敷

本尊 一光三尊善光寺如来木像（前立阿弥陀佛）

由緒 正徳元辛卯年三月創建。

開基 美濃国安八郡大垣圓通寺第十世誓誓徒弟浄

念其後中絶。弘化元甲辰年五月大垣松涛寺二十

世住職忍誉再興。境内二百三十六坪。境内仏堂

二字あり、一は本尊地藏菩薩にて嘉永四辛亥年

七月創立。一は薬師如来を安置し嘉永五壬子年

三月創立。

法覚寺 真宗東派

笠郷村大字船附字村内北ノ割

本尊 阿弥陀佛

由緒 寺伝に「人皇第百四代後相原天皇永正三寅

年春日山の樹木七千本枯死す。統いて洛中洛外

年号創建	皇紀	元宗旨	改宗年号	紀元	現在宗旨	本願寺法主名 改宗當時	所在地	寺院名
大同三年	一四六八	天台宗	明応六年	二一五七	真宗大谷派	八代 蓮如	笠郷村 上之郷	願專寺
治承年中	至一八四〇 自一八三七	同	文政十七年	二二四五	同	同	栗笠	專了寺
建暦二年	一八七二	浄土真宗	—	—	同	初代 親鸞	下笠	浄雲寺
長祿二年	二一一八	同	—	—	同	八代 蓮如	船附	尊光寺
不詳	—	同	文明十六年	二二四四	同	同	栗笠	興專寺
大永二年	二二八二	同	—	—	同	九代 実如	大野	覚林寺
大永六年	二二八六	同	—	—	同	十代 證如	船附	法覚寺
正徳元年	二三七一	浄土宗	—	—	浄土宗	—	同	生蓮寺
不詳	—	—	—	—	真宗大谷派	—	下笠	浄誓寺

悪疫流行し、猖獗を極め遂に官中をも犯すに至り、近侍の寵妃数名忽ちにして没す。天皇大に之を悲み給ひ、北面武士安田織部なるもの豫てより出塵の素心あるを察したまひ一字を建立し侍女の菩提を弔せしめんとしたまふ。織部は經基の末裔にして延徳元年を以て生れ長じて後柏原帝に仕へ奉り、

後信任を辱くしたる忠節の臣なりきといふ。織部諸国を遍歴し、地を石津郡北村（今養老郡笠郷村大字栗笠地内）に相し居を定む。其後寛正六年当地元屋敷北村郷の内米野（船附大野中間ノ地）に移住す。大永六年織部本願寺第十世證如上人に帰依し得度して慶了と号し、一字を創

立して安田法覚寺と称す。是を当寺の開基とす。

永禄元年米野より現在の境内に移転し、慶長十一年二月東本願寺に属す。境内五百七十二坪。

尊光寺 真宗東派

笠郷村大字船附字村内北ノ割

本尊 阿弥陀佛

由緒 長禄二戊寅年九月創立、開基了教恭哉真宗教

如法主に帰依し、慶長十五庚戌年十月東本願寺に

属す。境内二百六十二坪。(改修移転後三反歩)

当寺に蓮如上人自作阿弥陀佛一鉢及同作尊像一鉢

を安置す。何れも天保七年九月三日多良村高木修

理より当寺に寄附せられしものにて其由来左の如

し。

一、〔両佛寄附添状〕

蓮如上人御自作 阿弥陀佛 壹鉢 由来書付添

同 尊 像 壹鉢 由来書付添

右御秘佛二體御当家御代々御寶藏ニ有之候處、

其寺先年より御由緒之事ニ付今般御領主竹腰山

城守様へ御掛合済の上御寄附被成候間、永々

大切ニ御取扱可有之候、依之佛供米一ヶ年ニ

八斗宛永々御寄附船付村之内において田地御

買得、右之加地子米庄屋元より差出有之筈御

頼入相済候間、此旨御心得無怠慢御取計可有

之候為後證連印仍而如件

天保七丙申年九月三日

高木修理内

小 寺 勇 印

伊藤幾右衛門 印

三和六左衛門 印

大嶽半之進 印

酒井春之丞 印

竹腰山城守様御領知濃州多芸郡船附村

尊光寺

二、〔阿弥陀佛由来書〕

蓮如上人御自作 阿弥陀佛 一體

右者御先祖高木彦左衛門尉源貞久候当国今尾

城主之節天正年中教如上人東国ヨリ御帰路之、
刻城中御逗留有之其節貞久候へ御譲有之以後甲
斐国上総国及美濃国へ御引移御当代迄御寶藏ニ
候へ共舊キ由緒ニ付今般其寺へ御寄附被成候間
大切ニ御守護可有之候事

天保七丙申年九月三日

高木修理内（前文同様連署）

三、（阿弥陀尊像由来書）

蓮如上人御目作 尊像 一體

右其由来ハ応仁乱之頃、三河国西畑之住人山田
小平治政勝、世之盛衰ニ有為転変之形勢発明シ、
頻ニ出離ノ一事ニ志シケル折節、幸ニ蓮如上人
三州へ下向アリ、真宗易行之要法ヲ教タマフ。
人挙ツテ日夜群参セリ。爰ニ政勝奇異ノ思アリ。
蓮如上人ノ御所へ参リ教化ヲ受ケ、直チニ廻心
シテ剃髮シ御弟子ト成リ西国ト改名シ、後高取
之庵室ヲ結び光陰ヲ送ル處、其後蓮如上人越前
国吉崎ニ一字御建立有リ、普ク化導シタマフ。

右西圓文四年辰ノ冬越前ニ趣キ御化導ヲ蒙リ
帰色之砌御形見ヲ奉願處上人感賞在シ而自ラ
鏡ニ向ヒタマヒ、御姿ヲ写シ御年五十八歳ノ
真影ヲ刻ミタマヒ、凡夫往生ノ為證據一首ノ
御詠歌ヲ添ヘ玉フ。「後の世のしるしのため
にささみ置く姿ぞ今は記念なりけり」ト遊シ
テ西圓へ授興シタマフ。西圓觀喜ノ儘其真影
ヲ御供シ三州ニカヘリ高取ノ草庵ニ尊敬シケ
ルニ西圓延徳三年ノ頃、終ニ相呆一子圓暢明
応六年ノ秋、舟岡山ノ麓へ引移リ居住ノ處、
永正八年ノ春ノ頃、右御木像夜毎ニ靈告アリ、
可引退之由十夜ニ餘リケル故、圓暢不思議ニ
思ヒシニ其年船岡山合戦ニ相成念佛修行モ出
来難キ折トナリ、尊影ノ威徳ヲ感ジ其地ヲ退
キ、美濃国中山ノ麓野上ノ里へ引越三代ノ間
住居ノ處、不時ノ変事ニ臨ミシ時ハ縷々御告
アリ。危難ヲ遁レ候事在ル故、人皆是ヲ寄異
ノ尊像ト称シ敬ヒケル處、慶長五年関ヶ原御

陣ノ節野上ノ里ヲ引払ハレ、流浪ノ身ニテ右尊

天保七丙申年九月三日

像安置ノ場所モ無之隠レ住居シケルニ、慶長八

高木修理内（前文同様連署）

年春先祖高木権右衛門尉源貞利候御帰依、西京

（注）法龍山尊光寺歴代住職（二十二世以降）

ヨリ右蓮如上人御尊像ヲ譲リ請、御尊敬被成以

児玉徳鳳、徳任、徳温（副住職徳眼）

後代々御寶藏ニ御秘藏ノ處、武門ノ家ニ而ハ諸

高任、章人、秀月、俊雄（現在）

人拜禮ノ事難叶、依之舊キ由緒ニ付、今般其寺

※本堂掲額 **法龍山** は今尾藩主竹腰豫堂

ヘ御寄附有之候、向後大切ニ取計可有之候事。

正美の筆 **尊光寺** 彰如上人（大谷句佛）

の揮毫で、昔は今尾高須藩主が月次二

竹腰系図（国史大辞典ニヨル）

佐々木信綱 — 重綱 — 高綱（重綱九世ノ孫） — 重綱

高綱ノ二男ナリ始メテ竹腰ヲ称ス、
斉藤道三ニ仕ヘ大垣城主トナル

正信

重綱ノ孫ナリ、慶長六年徳川家康ニ仕ヘ、五千石ヲ甲斐国ニ於テタマハル。同十二年尾州義直ノ伝相ニ補セラレ
五千石ヲ尾張国ニテ加増セラレ、元和五年十二月義直一萬石ヲ与ヘ前封ヲ合シテ三萬石トナル。同八年美濃国ニ
移封セラレ今尾城主トナル。

正晴 — 友正 — 正映 — 正武 — 勝起 — 睦群 — 正定 — 正美 — 正舊 — 正己（男爵）

お正月の門松や鏡餅、初詣で、七草粥、左義長、

節分、春や夏秋のお祭等宗教祭事が村人達の風俗慣習となっております。

仏教は仏の道、釈迦の教えを説きます。それをお経と申しています。宗派により基本になる経本はちがいますが皆釈尊のお説法なのです。八萬四千もある法門の根本は「諸行無常」と「因果律」を教えておられます。神仏の御加護に依り健やかな成長を祈る日本人特有の信仰が根底にあるのです。

いづれにしろ人として「朝に礼拝昼は汗夕べに感謝の合掌」を実践し勤労と報恩を心懸けて行きたいものです。これが人の道だと思えます。

伊勢神宮では二十年に一度の「第六十一回式年遷宮」があり、平成五年秋十月二日には内宮の御神体が新神殿へ、五日外宮でも遷御が千二百年伝統行事で古代ゆかしく無事行われて終り、春六月九日の皇太子殿下御成婚と共に喜ばしい年であります。

宗教神道について

日本国に生れ、しかも人間として生れたからには古来からの処世の考え方がある筈です。宗教家でも教育者でもありませんので詳しい事は省きますが、明治以来の国家神道に対する反発もあると思いますが、反面それなりの良さもあります。

人間とは萬物の霊長と云われ自惚れていはって居ります。然し人間とは人の間と書かれ人の道として畜生（本能の儘に動く生き物）と違った生きる道があります。

又日本の宗教も大きく分けて神道と仏道とがあります。そして道があるので必ず教えがあります。

神・仏と名前はちがっていても、要は自然の法則であり、生成化育するのが目的ですから、拝まないから罰をあてる等は考えられません。西行法師の「何事のおわしますかは知らねどもかたじけなさに涙こぼるる」の歌の如く委縮すること無く

神仏は敬うことから始まるのです。

人生には誰でも山あり谷ありですが与えられた生命を大切に、ドン底からふり立つべきが教えるのです。

神道は天地悠久の大道であり神様を崇拝します。

天照大神^{アマテラスオホカミ}を祀る伊勢皇太神宮と生れ故郷の鎮守のお宮、村によって社名や祭神は色々違いますが、ふるさとのお宮様のことです。これを産土大神^{ウツスナオホカミ}と申します。私達が先づ崇敬すべきは、この大神様達です。

お伊勢様は天の神様、鎮守の神様は地の神様なのです。其他八百萬神様^{ヤオヨロズノカミ}があります。

さて神様は清浄が一番大切なのです。道には守るべき法があり儀式を伴います。一般的作法について述べてみます。

(1) 神符の祭り方

伊勢の大神宮の御神札^{オツダ}は神宮大麻^{カマ}といい正面中央を最上位としますので中央に向って右が氏神さま、左はその他の信仰する神社の御神札をお祭りしま

す。小さい神棚の場合は信仰する神社の御神札を重ね一番表に神宮大麻をお納めします。毎朝のお供えはお米（お洗米^{センマイ}又は御飯）とお水とお塩で、お祭りの時はお酒や山海^{ミキ}でとれた物初穂等をお供えます。

(2) 神社参拝の作法

まづ手や口を清めて神前に進み軽くおじぎをします。つぎに二拝（深くおじぎを二度する）して、祓詞^{ハライゴト}、神拝詞^{シンハイシ}を奉上（できなければ忠うままのことを心の中でお祈りしてもよい）つぎに二拝、二拍手、一拝、軽くお辞儀して神前を立退きます。

簡単な略拝詞は、祓^{ハライ}へ給^{タマ}へ 清め給^{キヨ}へ 守り給^{マモ}へ 幸^{サキ}へ給^{タマ}へです。

(3) 手水の使い方

先づ批杓^{ヒヤク}を持って左手を洗い、次にもちかえて右手を洗い次に左手に水を受けて口をすすぎ再び左手を洗います。

又、お祓を受ける時は頭を下げます。

(4) 玉串のあげ方

イ、右手が榊の根本を持つように神主から玉串を受ける。

ロ、神前の机の前に進み軽く一礼する。

ハ、右手で榊の根本を手前に引き（時計の針の回る様）

ニ、左手を下げて根本を持ち葉先を右へ回しながら右手で中程を裏より執り（のの字形に回す）

ホ、左手を添えて机の上に差出す（根元神様の方になる）

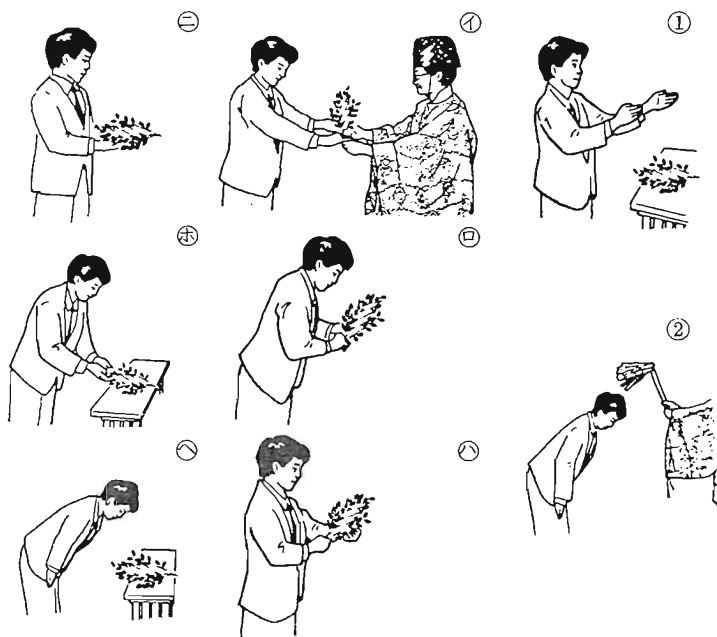
ヘ、次に二拝、二拍手、一拝する。

（注）拍手は両手を胸の高さにあげて合せ、右手を少し引き肩幅程に開いて拍手を打つ
（女姓はそれより幅をせばめる。）

図解説明

- ① 柏手の打ち方
- ② お祓を受ける時
- ④ 玉串を受ける
- ⑤ 神前に進み一礼
- 榊の扱い順序
- △ 拝礼

（神社暦より）



大相撲歴代横綱一覧

(大相撲まるごと雑学事典)

代数	力士名	出身地／生年月日	横綱在位期間	優勝
1	明石 志賀之助	栃木県宇都宮市	寛永元年～	
2	綾 川 五郎次	栃木県栃木市 元禄元年		
3	丸山権太左衛門	宮城県登米郡米山町 正徳3年	寛延2年8月～ 寛延2年11月	
4	谷 風 槐之助	宮城県仙台市 寛延3年8月8日	寛政元年11月～ 寛政7年1月	21
5	小野川 喜三郎	滋賀県大津市 宝暦8年	寛政元年11月～ 寛政9年10月	7
6	阿武松 緑之助	石川県鳳至郡能都町 寛政3年	文政11年2月～ 天保6年10月	5
7	稲 妻 雷五郎	茨城県稲敷郡東村 享和2年	文政13年9月～ 天保10年11月	10
8	不知山諾右衛門	熊本県宇土市 享和元年	天保11年11月～ 天保15年1月	1
9	秀ノ山 雷五郎	宮城県気仙沼市 文化5年	弘化4年9月～ 嘉永3年3月	6
10	雲 竜 久 吉	福岡県山門郡大和町 文政6年	文久元年9月～ 元治2年2月	7
11	不知火光右衛門	熊本県菊池郡大津町 文政8年3月	文久3年10月～ 明治2年11月	3
12	陣 幕 久五郎	島根県八束郡出雲町 文政12年5月3日	慶応3年10月～ 慶応3年11月	5
13	鬼面山 谷五郎	岐阜県養老郡養老町鷺巣 文政9年	明治2年2月～ 明治3年11月	7
14	境川 浪右衛門	千葉県市川市 天保12年4月8日	明治10年2月～ 明治14年1月	5
15	梅ヶ谷藤太郎①	福岡県朝倉郡杷木町 弘化2年2月9日	明治17年2月～ 明治18年5月	9
16	西ノ海嘉治郎①	鹿児島県川内市 安政2年1月3日	明治23年3月～ 明治29年1月	2
17	小 錦 八十吉	千葉県山武郡横芝町 慶応2年10月15日	明治29年3月～ 明治34年1月	7
18	大砲 万右衛門	宮城県白石市 明治2年11月28日	明治34年4月～ 明治41年1月	2

代数	力士名	出身地／生年月日	横綱在位期間	優勝
19	常隆山谷右衛門	茨城県水戸市 明治7年1月19日	明治36年6月～ 大正3年5月	8
20	梅ヶ谷藤太郎②	富山県富山市 明治11年3月11日	明治36年6月～ 大正4年6月	3
21	若 島 権四郎	千葉県市川市 明治7年8月2日	明治38年4月～ 明治40年1月	
22	太刀山峰右衛門	富山県富山市 明治10年8月15日	明治44年2月～ 大正7年1月	11
23	大木戸森右衛門	兵庫県神戸市東灘区 明治11年11月2日	大正元年12月～ 大正3年1月	
24	鳳 谷五郎	千葉県印旛郡印西町 明治20年4月3日	大正4年2月～ 大正9年5月	2
25	西ノ海嘉治郎②	鹿児島県西之表市 明治13年2月6日	大正5年2月～ 大正7年5月	1
26	大 錦 卯一郎	大阪府大阪市南区 明治24年11月25日	大正6年3月～ 大正12年1月	5
27	栃木山 守 也	栃木県下都賀郡藤岡町 明治25年2月5日	大正7年2月～ 大正14年5月	9
28	大 錦 大五郎	愛知県海部郡弥富町 明治16年3月22日	大正7年4月～ 大正11年1月	
29	宮城山 福 松	岩手県一関市 明治28年2月27日	大正11年4月～ 昭和6年1月	2
30	西ノ海嘉治郎③	鹿児島県始良郡隼人町 明治23年11月2日	大正12年4月～ 昭和3年5月	1
31	常ノ花 寛 市	岡山県岡山市 明治29年11月23日	大正13年3月～ 昭和5年5月	10
32	玉錦 三右衛門	高知県高知市 明治36年11月15日	昭和7年10月～ 昭和13年12月	9
33	武蔵山 武	神奈川県横浜市港北区 明治42年12月5日	昭和10年5月～ 昭和14年5月	1
34	男女ノ川 登三	茨城県筑波郡筑波町 明治36年9月17日	昭和11年1月～ 昭和17年1月	2
35	双葉山 定 次	大分県宇佐市 明治45年2月9日	昭和12年5月～ 昭和20年11月	12
36	羽黒山 政 司	新潟県西蒲原郡中之口村 大正3年11月18日	昭和16年6月～ 昭和28年9月	7
37	安芸ノ海 節男	広島県広島市南区 大正3年5月30日	昭和17年6月～ 昭和21年11月	1

代数	力士名	出身地／生年月日	横綱在位期間	優勝
38	照 国 万 蔵	秋田県雄勝郡雄勝町 大正 8 年 1 月 10 日	昭和 17 年 6 月～ 昭和 28 年 1 月	2
39	前田山 英五郎	愛媛県西宇和郡保内町 大正 3 年 5 月 4 日	昭和 22 年 6 月～ 昭和 24 年 10 月	1
40	東富士 欽 壱	東京都台東区 大正 10 年 10 月 28 日	昭和 23 年 10 月～ 昭和 29 年 9 月	6
41	千代の山 雅信	北海道松前郡福島町 大正 15 年 6 月 2 日	昭和 26 年 6 月～ 昭和 34 年 1 月	6
42	鏡 里 喜代治	青森県三戸郡三戸町 大正 12 年 4 月 30 日	昭和 28 年 2 月～ 昭和 33 年 1 月	4
43	吉栗山 潤之輔	北海道厚田郡厚田町 大正 9 年 4 月 3 日	昭和 29 年 1 月～ 昭和 33 年 1 月	1
44	栃 錦 清 隆	東京都江戸川区 大正 14 年 2 月 20 日	昭和 29 年 10 月～ 昭和 35 年 5 月	10
45	若乃花 幹士①	青森県弘前市 昭和 3 年 3 月 16 日	昭和 33 年 1 月～ 昭和 37 年 5 月	10
46	朝 潮 太 郎	鹿児島県徳之島 昭和 4 年 11 月 13 日	昭和 34 年 3 月～ 昭和 37 年 1 月	5
47	柏 戸 剛	山形県東田川郡楡引町 昭和 13 年 11 月 29 日	昭和 36 年 9 月～ 昭和 44 年 7 月	5
48	大 鵬 幸 喜	北海道川上郡弟子屈町 昭和 15 年 5 月 29 日	昭和 36 年 9 月～ 昭和 46 年 5 月	32
49	栃ノ海 晃 嘉	青森県南津軽郡田舎館町 昭和 13 年 3 月 13 日	昭和 39 年 1 月～ 昭和 41 年 11 月	3
50	佐田の山 晋松	長野県南松浦郡有川町 昭和 13 年 2 月 18 日	昭和 40 年 1 月～ 昭和 43 年 3 月	6
51	玉の海 正 洋	愛知県蒲郡市 昭和 19 年 2 月 5 日	昭和 45 年 1 月～ 昭和 46 年 10 月	6
52	北の富士 勝昭	北海道旭川市 昭和 17 年 3 月 28 日	昭和 45 年 1 月～ 昭和 49 年 7 月	10
53	琴 桜 傑 将	鳥取県倉吉市 昭和 15 年 11 月 26 日	昭和 48 年 1 月～ 昭和 49 年 7 月	5
54	輪 島 大 士	石川県七尾市 昭和 23 年 1 月 11 日	昭和 48 年 5 月～ 昭和 56 年 3 月	14
55	北の湖 敏 満	北海道有珠郡壮瞥町 昭和 28 年 5 月 16 日	昭和 49 年 7 月～ 昭和 60 年 1 月	24
56	若乃花 幹士②	青森県南津軽郡大鰐町 昭和 28 年 4 月 3 日	昭和 53 年 5 月～ 昭和 58 年 1 月	4

代数	力士名	出身地／生年月日	横綱在位期間	優勝
57	三重ノ海 剛司	三重県松坂市 昭和23年2月4日	昭和54年7月～ 昭和55年11月	3
58	千代の富士 貢	北海道松前郡福島町 昭和30年6月1日	昭和56年7月～ 平成3年5月	31
59	隆の里 俊 英	青森県南津軽郡浪岡町 昭和27年9月29日	昭和58年7月～ 昭和61年1月	4
60	若羽黒 光 司	三重県津市 昭和38年8月12日	昭和61年7月～ 昭和62年12月	0
61	北勝海 信 芳	北海道広尾郡広尾町 昭和38年6月22日	昭和62年5月～ 平成4年3月	8
62	大乃国 康	北海道河西郡芽室町 昭和37年10月9日	昭和62年9月～ 平成3年7月	2
63	旭富士 正 也	青森県西津軽郡木造町 昭和35年7月6日	平成2年7月～ 平成4年1月	4
64	曙 アケボノ 太 郎	アメリカ合衆国ハワイ州 昭和44年5月8日	平成5年1月～	4 (8月 現在)

(注) 第13代横綱鬼面山谷五郎は養老町鷺巣出身 文政九年生れ本名田中新一 明治4・7・23没45歳 石像が養老公園にある。(身長186cm 体重140kg)

慶応元年冬場所で大関鬼面山と小兵衛國との仕切り直しお互が合わせず延べ百回近く二時間に及ぶ珍記録がある。勝負は立ち上がると鬼面山の電車で五秒程で決着がついた。

明治元年(一八六八)十一月二十日を初日に本所回向院で興行した時大関鬼面山谷五郎が全勝した。

又この時飛驒国白川郷出身で幕内十五年勤めた人気力士で三枚目に上った白真弓肥田右衛門(五代浦風林右衛門襲名)は不幸にも初日を待たず死亡したので星取表は全部ヤ(休)となっている。得意技は鉄砲だが、危険をとまなうので封じられていたので三役昇進を妨げられたとの事。金星一つで高山国分寺境内には碑文がある。

老人会活動

高令化社会に向けて保健福祉の一環として全国的に老人クラブ活動が盛に行われています。

養老町内各村でも結成の機運高まり同時に笠郷船附地区も安田稔様篠田光男様等尽力されて寿会が発足致しました。当初北南二老人会でしたが、昭和五十一年四月会員増加に伴い中寿会が創立され三単位となった。(昭和五十七年度会員数、北六二中七〇南七三計二〇五名)そして今も追弔会親睦旅行や各種競技友愛奉仕活動等が続けられています。

船附寿会連合会規約

(名称及び事務所)

第一条 本会は船附寿会連合会と称し、事務所を會長宅におく。

(組織)

第二条 本会は船附地区寿会をもって組織する。

(目的)

第三条 本会は寿会組織の充実を図り、広く老人福祉の増進に寄与することを目的とする。

(事業)

第四条 本会は前条の目的を遂行するため、次の事業を行う。

(一) 寿会相互の連絡協調

(二) 寿会の育成指導

(三) 他の団体及び関係機関との連絡協調

(四) その他寿会の健全育成のための事業

(役員)

第五条 本会に次の役員をおく。

(一) 会長 一名(各単位寿会の会長互選)

(二) 副会長 二名(他の寿会長)

(三) 理事 若干名(各単位寿会の役員)

(四) 監事 二名(各単位寿会の会計互選)

(役員の任務)

第六条 役員の任務は次の通りとする。

(一) 会長は本会を代表し、会務を総括する。

(二) 副会長は会長を補佐し、会長事故あるときは、会長の任務を代行する。

(三) 理事は役員会を構成し、会の運営をつかさどる。

(四) 監事は会の会計を監査する。

(五) 会長は、会計及び書記を委嘱する。

(役員任期)

第七条 役員任期は二年とし、再選を妨げない。

役員補欠者の任期は、前任者の残存期間とする。

(会議)

第八条

(一) 会議は役員会とする。

(二) 役員会が必要に応じ開催する。

(三) 役員会は会長が招集し、会議の議決は出席者の過半数により成立する。

(議事)

第九条 役員会に附議する事項は次の通りとする。

(一) 規約の改廃に関すること。

(二) 会務運営の基本的事項。

(三) その他会長が必要と認めた事項。

(会計)

第十条 本会の経費は、各単位寿会からの分担金、

寄附金、その他の収入をもってあてる。

第十一条 本会の会計年度は、四月一日より翌年三

月三十一日までとする。

第十二条 本会の経理は、年度末の役員会に報告する。

(附則)

この規約は、昭和六十三年四月一日より施行する。

暦 法

(日本神社暦編纂会)

〔太陰暦〕一月は二十九日又は三十日からなり、これがほぼ一対一の割合で繰返され、その平均の長さが月の満ち欠けの一周の平均の長さ即ち一朔望月、二十九日五三〇五八八に殆ど等しく、従って毎月同じ日附は殆ど同じ月相を示すものである。

一年はこれを常に十二月、三百五十四日又は三百五十五日とするものと、十二月又は十三月とし、これをほぼ十二対七の割合で繰返してその平均の長さを季節の一周の平均の長さ即ち一回帰年、三百六十五日二四二二に大略等しくし、日附が大略の季節をも示すようにしたものがある。前者を純太陰暦、後者を太陰太陽暦といっている。回教暦は前者、中国やわが国の旧暦は後者に属する。わが国で暦法が始めて用いられたのは推古天皇十二年(西紀六〇四年)といわれ、爾後明治五年の

改暦直前に至るまで暦法は九変したが、千数百年間一貫して立春の頃を年始とする太陰太陽暦が用いられた。

〔太陽暦〕一年を三百六十五日又は三百六十六日としてこれをほぼ三対一の割合で繰返し、その平均の長さを季節の一周の平均の長さ即ち一回帰年、三百六十五日二四二二に殆ど等しくするもので、従って毎年同じ日附は殆ど同じ季節を示すものである。わが国で現在用いられている暦は明治五年十一月九日太政官布告によって定められた「太陽暦」(明治三十一年に置閏法を明確化)であるが、この暦の本体は遠く古ローマの暦に源を発するグレゴリオ暦(西暦一五八二年ローマ法皇グレゴリオ十三世制定)である。今日世界の文明国は殆どこの暦を用いている。この暦の置閏法によれば西暦紀元年数が百の倍数の時は四百で割切れる年、百の倍数でない時は四で割切れる年は閏年、その他の年は平年と

なる。この置閏法によれば三千年後始めて日附と

季節とが平均に於て一日喰違ってくるに過ぎない。

(注) 明治五年十一月九日太陰暦を廃し太陽暦を用いることになったのだが移行につき十二月がなくていきなり正月となったので庶民一同大騒ぎしたとのことです。

又戦時中迄使用された皇紀は西暦紀元に六六〇年を足したものです。所謂日本歴史天皇制時代の数え方でした。

西暦紀元年数が四で割切れる年は閏年で二月に二十九日を置き世界五輪(オリンピック)開催の年として定着しています。

又米国大統領選挙の年でもあります。

結婚記念日

欧米人は誕生日クリスマスと同じくらいに家庭内の大切な行事の一つに考えられていて、毎年訪れる記念日に年数毎に名称がついているのも賛同派増加の一因。イベント気分をかき立てられるのだ。

日本では明治二十七年(一八九四)三月九日明治天皇が結婚二十五年目を祝って銀婚式をされたのが始まりといわれ西欧のしきたりだったというだけで、そのもともとの起源については、はっきりしないが最近では日本でも徐々に普及しはじめました。

皆に祝福され喜びの絶頂だったあの日から、別々に生れ育った男と女がともに喜びともに悲しみながら結婚生活を送ってこられたことを喜ぶお祝いとして、多少情性でおくっていた生活を反省し初心に戻る精神面を大切にします。

銀婚式迄の結婚記念日は夫婦だけで行いその後のパーティ形式などで人をお招きする場合はおもてなしの心に注意、押しつけがましくならない様注意したいものです。

西欧でつけられている名称は次の通りです。

年	名 称	年	名 称
1 年	紙 婚 式	14 年	象 牙 婚 式
2 年	綿(藁) 婚 式	15 年	水 晶 婚 式
3 年	革 婚 式	20 年	陶(磁器) 婚式
4 年	書 籍 婚 式	25 年	銀 婚 式
5 年	木 婚 式	30 年	真 珠(象牙) 式
6 年	鉄 婚 式	35 年	婚 瑚(ひすい 式
7 年	銅 婚 式	40 年	緑玉) 婚 式
8 年	青銅(電気器具) 婚 式	45 年	ル ビ ー 婚 式
9 年	陶 器 婚 式	50 年	サ フ ァ イ ア 式
10 年	錫(アルミニウム) 婚 式	55 年	(生糸) 婚 式
11 年	鋼 鉄 婚 式	60 年	金 婚 式
12 年	絹 麻 婚 式	75 年	エメラルド 婚式
13 年	レ ー ス 婚 式		ダイヤモンド 婚式
			金 剛 石 婚 式

※結婚記念日の名称および年数にはいくつかの説があります。

算^{サン}賀^ガのお祝

結婚式 新しい人生の出発を祝う厳粛な儀式です。

銀婚式 結婚満二十五年に行う。

金婚式 結婚満五十年に行う。

還^{タシ}暦^{レキ}祝 六十一歳(満六十歳)の誕生日に行う。

暦の十二支及び十子の組合せが六十年で一巡し再び生れた年の干支にもどる年で「本卦販り」ともいいます。昔は赤い布でつくったチャンチヤンコや赤い頭巾を贈る習慣があり本人がそれを着て祝ったものだそうです。

古^コ稀^キ祝(七十歳)

「人生七十、古来稀なり」杜甫の詩より。

喜^キ寿^{シュ}祝(七十七歳)

喜の字の草書が七十七に近い書体だから。

傘^{サン}寿^{シュ}祝(八十歳)

傘が八十と見える所から。

ベイジュ
米寿祝（八十八歳）

米が八十八と書くことに似ている。

ソッジュ
卒寿祝（九十歳）

卒の略字が九十に似ている。

ハクジュ
白寿祝

九十九歳の誕生日に行う。

白が百の字から一をとったところから。

百歳を過ぎると百一歳の賀と呼んで一歳ごとに毎年

祝う。

サジュ

茶寿（百八歳）

コウジュ

皇寿（百十一歳）

法 事 年 回

当地方は報恩講統計欄の如く真宗大谷派が大多数なので、仏教の風習に依って述べてみます。

誰でもが人間の一生が終ると葬式を行います。

厳肅な儀式なのです。

続いて中陰といって初七日（死んだ日から数えて七日目）二七日（十四日目の忌、以下同じで一週間毎）三七日、四七日、立日（一月おくれの亡くなった日）五七日、六七日、七七日、百ヶ日と続けて読経を上げて頂きます。三十五日（五七日）か四十九日（七七日）施主は都合の良い日を決めて、お世話になった隣組の人々親類を招待して忌明法要を勤め後香奠返しを考えます。

その後は一回忌（満一年目の忌日）三回忌（死後三年目の忌日、以下同様）七回忌、十三、十七、二十三、二十七、三十三、三十七、四十三、四十七、五十回忌、百回忌と続けて法要を営みます。

法事は仏教の流れを汲む者として個人の供養の為読経をあげるのではなく、忌日を御縁に平素疎遠の縁者達相集い、故人の遺徳を偲びつつ御経（釈迦の教え）を聞き又茶飯を共にしながら語りあい、仏恩に只今生かされて居るいのちを喜びあ

う行事としたいものです。

〔神式靈祭〕

一年祭 死後満一年目に行く。以下同様。

二年祭・三年祭・五年祭・十年祭・二十年祭・

三十年祭・四十年祭・五十年祭・百年祭

厄年

俗信ですが数え年一歳から四、七、十、十三、十六、十九、二十二、二十五、二十八、三十三、三十七、四十、四十二、四十六、四十九、五十二、五十五、五十八、六十一歳を厄年とされ中でも男二十五歳、四十二歳、六十一歳、女子十九歳、三十三歳、三十七歳を大厄といっています。考えてみれば、いずれも身体又は精神の変動期に当る年頃なので、あながち迷信だとばかりもいえません。いたずらに萎縮することなく、平素以上に謙虚に且、慎重に物事を処

理することが肝要なのです。

一般には数え年男の四十二と女の三十三は大厄といい、その前後の年（前厄・後厄）を含めて身を慎しむ習慣があります。

丁度この時期は肉体的にも社会的にも転換期に当り何かが訪れ易い年なのです。健康上の問題、職場業務上の問題、人間関係交際上の問題、家庭内の問題、子供の問題、金銭上の問題等色々と起り勝ちの時ですが、注意しながら身を慎しみ善処して頂きたいものです。

生れ歳による性格

〔子^ネの年生れの性格と守り本尊〕

満九才、二十一才、三十三才、四十五才、五十七才、六十九才、八十一才、九十三才

○長所 正直で愛嬌がある。

几帳面で細かいことに気がつき無駄使いせず貯蓄心に富む。

○短所 温厚に見えるが内心利己小心、人の批評を好み怒りやすい。

○守り本尊 千手観音 縁日 毎月十七日

〔丑^{ウシ}の年生れの性格と守り本尊〕

満八才、二十才、三十二才、四十四才、五十六才、六十八才、八十才、九十二才

○長所 辛抱強くて押しが強い、才気弁舌勝れて正直者。

○短所 負けず嫌いで偏屈。悠長に見えるが短気剛情。

○守り本尊 虚空蔵菩薩 縁日 毎月十三日

〔寅^{トラ}の年生れの性格と守り本尊〕

満七才、十九才、三十一才、四十三才、五十五才、六十七才、七十九才、九十一才

○長所 思慮深く慈悲心あり。俠気心あって威風好し。

○短所 剛気で短気。気ままで目上を無視する傾向あり、感情激発して損する事多し。

○守り本尊 虚空蔵菩薩 縁日 毎月十三日

〔卯^ウの年生れの性格と守り本尊〕
満六才、十八才、三十才、四十二才、五十四才、六十六才、七十八才、九十才

○長所 温厚で才能あり、愛嬌があって交際円満、思想目的大、学究心あり。

○短所 大きい夢を追いつぎ移り気、経済観念にとぼしい。

○守り本尊 文殊菩薩 縁日 毎月二十五日

〔辰^{タツ}の年生れの性格と守り本尊〕
満五才、十七才、二十九才、四十一才、五十三才、六十五才、七十七才、八十九才

○長所 威勢よく生一本、てきぱきしている。正直で勇氣と同情心あり。

○短所 短気、負けず嫌いの偏屈、感情的。
○守り本尊 普賢菩薩 縁日 毎月二十四日

〔己の年生れの性格と守り本尊〕

満四才、十六才、二十八才、四十才、五十二才、

六十四才、七十六才、八十八才

○長所 容貌美しく智恵あり、勝気、世話好き。

○短所 猜疑心、嫉妬心が強い、剛情、我慢、感情

過敏、浮気を好む、決断力に乏しい。

○守り本尊 普賢菩薩 縁日 毎月二十四日

〔午の年生れの性格と守り本尊〕

満三才、十五才、二十七才、三十九才、五十一才、

六十三才、七十五才、八十七才

○長所 機敏才智勝れていて器用、業務に熱心。

○短所 根気なくむら気。情にもろく色情に流され

やすい。口先上手だが真意が少い。怒りが

顔に出る。

○守り本尊 勢至菩薩 縁日 毎月二十三日

〔未の年生れの性格と守り本尊〕

満二才、十四才、二十六才、三十八才、五十才、

六十二才、七十四才、八十六才

○長所 気品よし、哀れ深い、従順型、一芸一能

に秀でて人に好かれる。

○短所 内気、多情、執着心強く愚痴が多い。

他人の言に迷い易い。

○守り本尊 大日如来 縁日 毎月八日

〔申の年生れの性格と守り本尊〕

満一才、十三才、二十五才、三十七才、四十九

才、六十一才、七十三才、八十五才

○長所 才能旺盛、活動家、赤裸々で進取的気風。

○短所 偏屈、大望を抱くが浅慮妄動する、他人

を信ぜず利己主義。

○守り本尊 大日如来 縁日 毎月八日

〔酉の年生れの性格と守り本尊〕

本年度月数、満十二才、二十四才、三十六才、

四十八才、六十才、七十二才、八十四才

○長所 才気溢れ交際上手、世話好き、大望を抱

く。

○短所 自先にとらわれる、気が多く、利己的で

落ちつかない。

○守り本尊 不動明王 縁日 毎月二十八日

〔戌^{イヌ}の年生れの性格と守り本尊〕

満十一才、二十三才、三十五才、四十七才、五十

九才、七十一才、八十三才、九十五才

○長所 義理深い、直言直行、凝り性。

○短所 剛情・我慢、偏屈、冷たくて愚痴多し。

○守り本尊 阿弥陀如来 縁日 毎月十五日

〔亥⁺の年生れの性格と守り本尊〕

満十才、二十二才、三十四才、四十六才、五十八

才、七十才、八十二才、九十四才

○長所 俠気、竹を割ったような潔白性をもつ。

研究熱心、愛情深し、親兄弟思い。

○短所 間口広く興行させまし。前後を考えない。

何事も最後まで完うしがたし。一人で万事

解決しようとする。

○守り本尊 阿弥陀如来 縁日 毎月十五日

注(一)年令は平成五年に依る。

(二)智山御寶曆参照させて頂いた。

ふるさとの文学

朝夕伊吹山を眺め育った私達に吉田欣一氏の詩を御紹介します。大正四年岐阜市加納に生まれ、現在新日本文学評議員であり、伊吹山詩人と呼ばれています。

伊吹山慕情（抄）

（正直一途の貧乏がよ

働いても働いても食えんと云う

馬鹿な事があるかよ）

今日への俺の闘志

伊吹山お前は仲々尖鋭である

戦い敗れた祖国へ南の島から帰って来て

慰まない

荒れ果てた都会の風景ばかり

復員列車の窓へその時

お前が飛び込んで来た

伊吹山

俺は涙が流れた

本当に帰ったと思ったよ

今日は伊吹山が姿を見せない

あるがままにあるものの美しさ

俺の精神の郷愁のように

今日は伊吹山が姿を見せない

(「吉田欣一詩集」昭四十所収)

又生蓮寺境内に松尾芭蕉の句碑が

あります。

「今日ばかり人も年とれ初時雨^{シグレ}」

(明治三十六年三月建立)

鉄道唱歌

全国的に愛唱された東海

道——汽笛一声新橋を——

以下六十六章のうち岐阜県

の部分抄出。

(明治三三年五月発行)

大和田建樹 作詞

岐阜を過れば長良川

愛は名所よ鵜飼船

至孝鬼神を感動し

恐れ多くも元正の

帝の幸ありしとて

残る美談も幼児も

知れる養老公園は

大垣駅に程近く

垂井過れば関ヶ原

いづれ劣らぬ奸雄が

一世を賭けし修羅の跡

鬼哭啾たり古戦場

古い唄新しい歌

手まり数え唄

一番初めは一の宮

二は日光の東照宮

三は佐倉の宗五郎(讃岐の金比羅さん)

四には信濃の善光寺

五つは出雲の大社^{イズモ オオヤシロ}

六つ村々鎮守さま(天神さま)

七つは成田の不動さま

八つ八幡の八幡宮^{ヤワタ ハチマングウ}

九つ高野の弘法さま^{コウヤ}

十で東京泉岳寺(博覧会)

これほど信心したけれど

浪ちやんの病気は直らない

武男が戦争に行くときは

白い白い真っ白い

ハンカチ振り振りネエあなた

早く帰ってちょうだいな。

伊勢音頭（地唄）

目出度 目出度の ヨンヨイ

若松さまよ ハア ヨーイセ ソーコセ

枝もなッ栄えりや ソレサ

葉も繁げる ソリヤ ヤートコセ

ヨウイヤナ

アリヤリヤ コレワイサ

サア ヤレ コーノセ

伊勢は津でもつ 津は伊勢でもつ

尾張名古屋は 城でもつ

（はやし省略）

目出度 目出度が 度重なッて

鶴^{ソル}がなッ ご門に巢をかけた

どなたさまにも 永々御苦労

御苦労なッいでに 又頼のむ

田植うた

ころじや ころじやよ 七ツのころじや

あゝ 日の入る頃は よい頃だ

ぬしサにもろうた 八ツ房のかんざしを

落したぞ 川の真中で

この田を植えて あぜ越すときは

すすきの葉で すそなでた

ひょうたんブキ 作曲 江口夜詩

（一九〇三―一九七九）
上石津町時出身

故 春日八郎 唄

一 飲めや唄えや 世の中は

酒だ 酒だよ 瓢箪ブキ

どうせ 飲むなら 養老の滝を

飲んで見たいよ 腹いっぱい

滝がお酒に なつたとさ

アッ ほんとかネ ほんとかネ

ソリヤ ほんとかネ

そんないいこと もうないか

ブンラ ブラブラブラー 瓢箪ブキ

二

何をくよくよ 世の中は

いつも愉快に 瓢箪ブキ

かわいい女子の お酌で飲めば

心うさうき 花ざかり

茄子も 南瓜も 恋の味

アッ ほんとかネ エッ ほんとかネ

ソリヤ ほんとかネ

そで一杯 もう一杯

ブンラ ブラブラブラー 瓢箪ブキ

三

酒はよいもの 世の中は

酔つて踊ろよ 瓢箪ブキ

いくら飲んでも 養老の滝が

からになつたる ためしない

飲めよ浴びろよ 滝の水

アッ ほんとかネ エッ ほんとかネ

ソリヤ ほんとかネ

腰の瓢箪 親ゆずり

ブンラ ブラブラブラー 瓢箪ブキ

笠郷小学校 校歌

朝日を浴びて 僕等は歌う

明るく肩を くみあつて

笠郷 笠郷の仲間

さあ一所に行こう

僕等の行く手は 風かけめぐる

この青空の広がりに

夕日を受けて 私達は唄う

やさしく手と手を とりあつて

笠郷 笠郷の仲間

さあ一所に行こう

私達の行く手は 花園の道

もえたつ夢は 咲きさそう

我等 笠郷小学校

我等伸びゆく どこ迄も

たくましく たくましく

笠郷音頭

作詩 江口夜詩
作曲

ハハー明けりや平和の笠郷の春は
風も養老のさくららのたより
チヨイと花見は花見は誰とゆこう
ソレ輪になつて輪になつて踊ろよ踊ろ
笠郷の笠郷のゆかいな音頭

ニハアー苗は伸びるよ 蚕は太る
たすき娘の小唄が呼べば
チヨイと若衆の若衆の気もめる
ソレ……

三ハアーおらの思ひをこがすが裳
もえる心で人待つ影が
チヨイと河原の河原の二十日月
ソレ……

四ハアー村の夜道にゆかたが浮いて
笠郷音頭が青田にひびきや
チヨイと月夜の月夜の盆踊り
ソレ……

五ハアー境の山から初秋だより
誰と飲みましよ月見の酒は
チヨイと笠郷は笠郷は夢の国
ソレ……

六ハアーかわい嫁女と二人で田刈り
鎌を持つ手もひとりではずむ
チヨイと恥ずかし恥ずかし仲のよさ
ソレ……

七ハアー笠郷米どと豊年まつり
おどり気嫌の姿もうれし
チヨイとうさうさ宮太鼓
ソレ……

八ハアー山の初雪朝日にとける
誰の思ひでとけるかあの娘
チヨイと気になる気になるあのえくぼ
ソレ……

九ハアー里も平和に今年も暮れて
年の瀬もせも笑顔の笠郷
チヨイとうれしいうれしい旅度
ソレ……

養老音頭

(一) フー日本よい国 孝子が汲めばヨ
滝の水さえ滝の水さえ 酒となる
ソレドンドとなるのは滝の音
養老よいとこエサヤレコノ日本一

(二) フーおちぢ 飲みしやれ 養老の水をヨ
若い血が湧く 若い血が湧く 意気がわく
ソレドンドとなるのは滝の音
養老よいとこエサヤレコノ日本一

(三) フー花のかけから笑顔で覗くヨ
月も酔うな 月も酔うな ほんのりと
ワレドンドなるのは滝の音
養老よいとこエサヤレコノ日本一

(四) フー滝の上から裾野を見ればヨ
招く三筋の 瀬が光る
ソレドンドなるのは滝の音
養老よいとこエサヤレコノ日本一

薩摩義士
隼人——隼人——

一、薩摩隼人の魂は
燃えりや火をばく 桜島
木曾川治水に命をかけた
これをまことの薩摩義士

「故郷離れて 他国の空でヨ
アツツクソダマツタダ
命すそ身のヨ薩摩義士
アツツクソダマツタダ」

二、項は宝暦四年目の
梅もつほみの浅き春
隼人泣かぬと妻子と別れ
美濃へ旅立つ薩摩義士
「薩摩隼人は男でござすヨ
アツツクソダマツタダ
義理と度胸のヨ難工事」
アツツクソダマツタダ」

三、隼人死しても世の爲に
今も堤は生きてゐる
この名残せし 今本松は
永久にたえん 薩摩義士
「

三、隼人死しても世の爲に
今も堤は生きてゐる
この名残せし 今本松は
永久にたえん 薩摩義士
「

三百六十五歩のマーチ

(水前寺清子 唄)

一

幸せは歩いてこない だから歩いて行くんだね
一日一歩 三日で三歩 三歩進んで二歩さがる
人生は一・ニ^{ワンツウ}パンチ 汗かきベソかき歩こうよ
あなたのつけた足あとにや
きれいな花が咲くでしょう

腕をふつて 足をあげて

ワンツー・ワンツー 休まないで歩こう

二

幸せの隣にいても わからない日もあるんだね
一年三百六十五日 一歩違いで逃しても
人生は一・ニ^{ワンツウ}パンチ 歩みを止めずに夢みよう
千里の道も一歩から 始まることを信じよう

三

幸せの扉は狭い^{セライ} だからしやがんで通るのね^{トオ}
百日百歩 千日千歩
ままになる日も ならぬ日も
人生は一・ニ^{ワンツウ}パンチ 明日の明日はまた明日^{アシタ}
あなたはいつも新しい^{アタラ}
希望の虹をだいている

未来音頭

作詞 三波春夫 編曲 近藤浩章

作曲 いずみたく 唄 三波春夫

一

みどり豊かに心を開き 夢は未来に長良川
飛驒で唄えば美濃路へ響く
郡上おどりと華やかに

ソレ ここは未来のお祭り広場

語る未来は 燦^{サン}々^{サン}々^{サン}

ソレ 語る未来は さん 々 々

二

北にアルプス 南に名古屋
木曾路はるかに 中^{ナカ}日^{ニチ}本^{ホン}

固く結んで広がりながら

実る姿は さざれ石

ソレ ここは未来のお祭り広場

創る未来は 燦 々 々

ソレ 創る未来は さん 々 々

三

丸い地球を七重に八重に
包む大きな愛がある
歌とおどりで世界をつなぎ
若い力の花が咲く

四

ソレ ここは未来のお祭り広場
目指す未来は 燦々々
ソレ 目指す未来は さん々々

人が恋しい想い出深い 月の姿も様々に
川も野山もみな活き活きと 命讀えて虹の彩^{イロ}
ソレ ここは未来のお祭り広場

愛の未来は 燦々々
ソレ 愛の未来は さん々々

愛・夢・明日

作詞 横井 弘 編曲 江口浩司
作曲 江口浩司 唄 杉田愛子

一

緑に萌^モえる 山山へ
清らかな愛を 歌う滝

笑顔で声を かけあつて
心のぬくもり 伝えゆく
ふるさと養老
ふるさと
〈 養老わが町

二

涼風^{スズ}渡る 碑^{イシ}に
昔を偲^{おも}ひ 薫^かる花

果てない夢を 受けついで
豊かな文化を 築きゆく

ふるさと養老
ふるさと
〈 養老わが町

三

紅葉^{アキタ}に映える 家並みが
明日^{アス}を目指し 伸びる町

新たな出合い 積み重ね

確かな幸せ 育てゆく
ふるさと養老
ふるさと
〈 養老わが町

最近カラオケ全盛の世の中となつたが、昔懐^{フルサト}
かしこんな歌を思い出して頂き、明日の郷里^{フルサト}の為
頑張ろうではありませんか。

方言

(括弧は共通語)

方言は故里^{フルサト}の宝じゃと云われ、今では指紋と共に声紋^{セイモン}といって方言なまりやアクセント分析が法医学犯罪捜査に役立っていると聞く。美濃の^{ミノ}じゃ言葉^{コトバ}は一寸汚い感じはするが、俗言に^{ソコ}美濃の蛇池^{メノヘ}に大蛇^{オホヘビ}が居るそうじゃが雄蛇^{オスヘビ}じゃか雌蛇^{メスヘビ}じゃか何じゃかかんじゃか分らんじゃと語尾にジャをつけてよく使う。又サイガもよくつける。

西美濃には西美濃の言葉でしか表現できない味いもあるものだ。知らず知らず使っている方言をきくにつけ、ここに生れ育ったことを誇りに思える人間、人間の温かきを知る人になってもraithたいものだ。探せばずいぶんあるもんじゃが、思いつくままに挙げてみよう。

ジャガタラ・ジャガイモ	(馬鈴薯)
サツマイモ	(甘薯)
ナスビ	(茄子)
シヤケ	(鮭)
ネエージン	(人參)
ゴンボ	(牛蒡)
キリバン	(まな板)
オジャ	(雑炊)
オケドクサン	(仏事に もる餅)
オカツテ	(台所)
オブクサン	(仏飯)
オミド	(御堂)
ヤットカメヤナモ	(お久し振ります)
ソウスルサイガ	(そうすること)
ソコニオキヤアエエガヤ	(そこに置けばよい)
オアガリヤアス	(お上り下さい)
オーキニ	(ありがとう)
イキヤアセンカ	(行きなさいませんか)
ホンニナッ	(なるほどなあ)
オージョウコク	(困る)
	(里芋)
	(れんげ)
	(大根)
	(つくし)
	(おかゆ)
	(赤飯)
	(五目飯)
	(晩酌)
	(かきもち)
	(かまど)

ドモナラン	(不服である)	ソソコク	(損をする)	カド	(表庭)	ジヨリ	(草履)
ナンヤアナ	(何ですか)	シンサイ	(しなさい)	アスブ	(遊ぶ)	オジャミ	(お手玉)
オイトクレンカ	(やめてください)	シヤチャク	(世話やく)	クロ・スマツコ	(隅)	ベベ	(着物)
セーダイテ・	(一生懸命)	マワシスル	(準備する)	イツチヨウラ	(晴着)	ヨウケ・ギョウサン	(沢山)
クツクト		ゴウワカス	(腹が立つ)	物ガオツコチル		ヨウアビン	(よく泳げない)
チヨウスク・	(えらそうにする)	センドユウ	(何度も言う)		(物が落ちる)	オマエントコ	(お宅は)
イバットル		ゴザツタ・ミエタ	(来られた)	ヤツス	(化粧する)	マメジャ	(丈夫だ)
コウテクル	(買ってくる)	コウタンカ	(買ったのですか)	アヌキダマ		ヨウヤラヘン	(できない)
アガリハナ	(縁側)	ツケモン	(漬物)		(上向きに寝ること)	カズケル	(なすりつける)
ドツチ	(すっぱん)	ドツペ	(魚かご)	ヘエカマス	(盗む)	ホツコリセン	
ムカゼ	(むかで)	ウデマメ	(枝豆)	ヘエトモナイ			(病が早く直らん様)
ヨゴミ	(よもぎ)	ヘンビノシタマガリ		泣キカラカス	(とんでもない)	ジヨウラカク	(あぐらをかく)
ヘル	(蛭)		(彼岸花)			クダシイ・オクンサイ	
ヘンビ	(蛇)	ガエロ・ゲエロ・	(蛙)		(ものすごく泣く有様)		(下さい)
イシカケ	(石垣)	カワズ		タイダイ	(わざわざ)	チャット・ハヨオ	(早く)
ランキヨウ	(らつきよう)	オミツキサシ	(仏飯器)	ヨクドシイ	(欲深い)	ヘツチャラ	(平気)
ユンベ・ヨンベ		キンノウ	(昨日)	カラゲル	(しはる)	ギツチヨ	(左きき)
	(ゆうべ・昨夜)	シアサツテ	(明々後日)	シプト	(死人)	ツキヤイ	(つきあい)
ユウダツツアン	(夕立)	サギツチヨ	(左義長)	ハタバル	(くたばる)	モウジッキ	(もうすぐ)
インピツ・エンペツ	(鉛筆)	ヒチャ	(質屋)	ヒヤカス	(からかう)	オボコイ	
センチバ	(便所・廁)	イビ	(指)	モノマエ	(結婚前)		(うぶ・世間ずれしていない)
カナゴ	(つらら)	ジベタ	(地面)	チヨウラカス	(だます)	ジャケラ	(じようだん)

オソガイ	(恐い)	ムチャンコ	(無意味・無茶苦茶)
ヤツパシ	(矢張り)	サカシマ	(さかさま)
イゲ	(湯気)	ウデル	(ゆでる)
イスグ・ユスグ	(すすぐ)	モロタ	(貰った)
イゴク	(動く)	モロテ	(貰って)
チイト	(一寸・少しは)	アホラシイ	(馬鹿らしい)
アホ・タアケ・タワケ	(馬鹿・阿呆)		
バカヤロ	(馬鹿者)	ドバチ	(罰)
オンツ・オンタ	(雄)	メンタ・メンツ	(雌)
ガンチ	(片目)	シヨンベ	(小便)
ウンコ・ババ	(大便)	ワヤクソ	(無茶)
カラグル	(束にする)	アカン・イカン	(駄目)
コウコ・ダイコツケ		サンマイ	(墓地)
	(たくあん)	ウル	(うるち米)
ナガタン	(包丁)	ムギカラボウシ	(麦わら帽子)
オンボ	(尾)	ツボ・ツボドン	(たにし)
ツバクロ	(つばめ)	メメズ・メメゾ	(みみず)
トロクサイ	(のろい)	クロ	(すみ・隅)
ドベ	(びり・最下位)	ケナルイ	(うらやましい)
ワッチ・ワシヤア	(私)	オラガ	(俺が)
ワシンタ	(私達)	ワシンドコ・ウチンドコ	(私の家)

オシメリ	(恵みの雨)	サブイ	(寒い)
ジミジミスル		ハクシヤミ・ハクシヨン	
	(底冷えする)		(くしやみ)
ヨド	(よだれ)	ウチ	(家)
ヒトネル	(育つてゐる)	インネ・ウンニヤ	(いいえ)
ナモシ	(ねえ)	チビット	(少し)
オマハン	(あなた)	カケジ	(掛軸)
カミスリ	(かみそり)	ドベタ	(泥土)
メゾ	(溝)	アツチベタ	(向う側)
コツチベタ	(こちら側)		
ヨンダリーヤ・ヨンダロカ・ヨンデアゲンサイ			
	(呼んであげなさい)		
コナンダ・コーヘナンダ	(来なかった)		
カクイタ	(隠した)	ヨミヤ・ヨマンカ	(読みなさい)
ニイサ・アニサ・アニキ			
	(兄)	アネサ	(姉)
ノウナル	(なくなる)	ヘツツク	(くつつく)
ズツナイ・エライ	(苦しい)	ドヅク	(なぐる)
ダダクサ	(粗雑なこと)	等・等	

村役場の沿革

明治十七年（一八八四）十月船附・横曽根・烏江・栗笠・大野の五ヶ村連合して、船附村中に連合役場を設け、同時に下笠村に下笠村役場も置かれた。

明治二十二年（一八八九）七月一日町村制実施の際船附村大野村合村して船着村と称し、船着横曽根の両村連合して船着村外一ヶ村組合を設けた。同時に烏江栗笠二村連合して栗笠村外一ヶ村組合を設く。

明治三十年（一八九七）四月一日船着・栗笠・上之郷・下笠の五ヶ村の区域を以て笠郷村と称した。

多芸郡横曽根村は安八郡浅草村創立でこれに属した。

同年八月二十七日船着を大字船附大野と分称した。

役場もその後（大正末期か？）船附地内ではあるが、村の中央笠郷尋常高等小学校（大正七年統合）のある北側へ統合建築された。

昭和二十九年（一九五四）十一月三日シャープ勧告で出来た町村合併促進法により養老郡九ヶ町村を

主体に合併（五四九〇世帯二八、七七九人）岐阜県下で最大の町養老町として発足、今では八五八九世帯三四、三三八人（平成四年九月末現在）に発展しました。

町役場では旧村毎に支所出張所が設けられたが昭和六十三年（一九八八）三月末で廃止一本化されて移動巡回窓口が造られた。又笠郷出張所は就業改善センター自治会館として今は利用されている。

学校の変遷

幕末頃の寺小屋は法覚寺、安田三郎右衛門宅

明治五年（一八七二）八月三日学制公布

明治六年（一八七三）二月下笠村に立身第一学校、大野村に立身第三学校、栗笠村に勉旃学校、船附村に修文義校を創設。

明治十年（一八七七）三月立身第三学校は修文義校に合併。

明治十九年（一八八六）四月小学校令発布、小学校を尋常高等の二科とし三年の義務教育を四年に延長し尚貧民子弟の為に簡易科小学校を置く事となった。

明治十九年十一月修文義校を船附尋常小学校及び船附簡易小学校と改称す。（場所旧尊光寺西）

明治二十三年（一八九〇）十月三十日勅育勅語下賜。

明治二十六年（一八九三）十月二十二日御真影を奉戴し船附簡易小学校船附村外一ヶ村と組合立尋常小学校を建て船附尋常小学校と改称。

（敷地三七九坪）

明治二十八年（一八九五）五月船附村一ヶ村組合立尋常高等小学校を船附に設立（高等科設置）御真影奉戴。

明治三十二年（一八九九）三月船附尋常小学校船附高等小学校に分離別立。（場所紺屋敷地内に）

（五月下旬校下新築一八〇名 校下新築二七〇名 敷地四六四坪）

明治三十四年（一九〇一）船附高等小学校を笠郷高等小学校と改称（村立）

明治四十年（一九〇七）改正小学校令義務教育年限を六ヶ年に延長せられる。

明治四十一年（一九〇八）三月三十一日船附尋常小学校と笠郷高等小学校を合併、船附尋常高等小学校と改称。

大正七年（一九一八）四月船附尋常高等小学校及び下笠尋常小学校を廃校し笠郷尋常高等小学校を置く。

大正九年（一九二〇）二月二日現在地に新校舎を新築落成。

校訓「真面目であれやり為げよ」

昭和十六年（一九四一）四月小学校が国民学校と改称。

昭和二十一年（一九四六）十月文部省が男女共学実施を指示。

昭和二十二年（一九四七）四月「六・三・三・四制」の小学校・中学校・高等学校・大学の四段階となった。（学校教育法施行）

同 学制改革により高等科を廃し中学校として分離し笠郷村立笠郷小学校と改称。

昭和二十九年（一九五四）十一月三日町村合併により養老町笠郷小学校と改称。

昭和三十四年（一九五九）八月十三日、九月二十八日大水害被害甚大。

昭和三十五年（一九六〇）四月完全給食実施。

昭和四十六年（一九七一）十二月笠郷中学校体育館施工（工費二八五〇万円）

昭和五十五年（一九八〇）東部中学校発足笠郷中学校閉校。

昭和六十一年（一九八六）一月二十七日笠郷小学校校舎及び食堂棟竣工式。

昭和六十一年（一九八六）十一月十日新運動場完成

船附郵便局

明治七年三月一日船附村百七十四番地に船附郵便取扱所を新設し同十九年十一月十二日局舎を同村百六十一番戸に新設。同二十一年船附郵便局と改称、明治三十年笠郷村制施行で笠郷郵便局となる。

同三十七年二月二十一日電信事務を開始した。

昭和五十三年十二月八日養老町船附百十一番地に局舎新築開局された。集配取扱局で区域は川北、輪之内も含まれていたが、昭和十年六月多芸島村同二十二年十月州本村、同二十三年六月浅草村が大垣市合併と共に大垣局に統合され、福束村だけは今も集配が行われている。

歴代局長は左の如し。

安田七郎兵衛（取扱人）、安田重舞、安田昌一郎、
安田昌已、大橋五雄、伊藤政雄、橋本昇（現在）

三 味

米野分（今の元屋敷宅地北端）牧田川堤防内側の
小段にあった所を元三味といい、外側川寄に露天焼
場があったとか、お墓数基建ち、昔文蔵さんと云う
人が住んでいて犬を沢山飼っておられ子供達は恐が
っていたが、大犬は餓死したとか。戦前には周りに
桜十数本あり、満開時には四、五本の大本によじ登
り花の小枝を折ってきた記憶がある。戦中迄牛馬の
削蹄場に使われたりした。それから三味は五反田中
起地内の墓地に移り西側に小川が流れていて熊笹が
茂り、昔の埋葬から穴を掘っただけの露天で火葬を
していた。ドンワラ作りには酒と豆腐がふるまわれ

組中で作って大八車で焼場迄運んで準備したもの
で、幼児は空地の一角に埋葬した。

今は練瓦積煙突も建て立派な火葬場となり重油
で火葬が行われている。又焼香場も完備し、敷地
内は昭和五十年頃墓地建設用地に区画整理して村
人の希望者に分譲された。

今では露天火葬様式（薪とドンワラで火葬を行
う）は上之郷でその名残りを留めている。

なお老人会では墓地清掃を年二回実施美化して、
皆様が心持ち良く墓参されることを望んで居られ
る。

養老の滝

人皇第四十四代（女帝）元正天皇御宇九月に美
濃国へ行幸、東海東山北陸道の国司来り集いて雑
伎を奏す。

當耆郡多度山に泉あり、是にて身を洗えば快く、髪洗えば白髪も黒く、膚のびやかに、痛みを洗えば忽ち癒し眼精も明になると云えり。天皇行幸成て此泉は老を養ふべしと仰せられ即年号を養老と改元ありと美濃雜事記にあり、養老年間は七年に及び俗に謂われる養老滝是也。一説には養老神社のある掬水霊泉だとも云われている。俗説には孝子源丞内のお酒の伝説もある。

たと川の滝を清みかむかしより

宮つかへけんたきの野の上に

これは万葉歌人大伴家持が多芸野を歌った歌である。

船 附 湊

（角川日本地名大辞典）

濃州三湊の一つ。牧田川と揖斐川の合流点の堤西

岸に位置する河港で、川幅が広い良港であった。

「濃州循行記」に「この港には浦高札があり、船稼ぎをする者は八戸、湊問屋は安田七郎兵衛という。この湊は上り荷物を多く取扱い名古屋の荷物はその納屋町桑名屋伊右衛門より運送し、信州辺りの荷物は大山問屋より運送したとあり、かなり活気に満ち、居酒屋や舟大工もいた。

大垣と桑名を結ぶ桑名街道が通り、また九里半街道（三湊より米原まで）の始点でもあったので、物資のほかに伊勢参宮汐干狩の客も多かった。

しかし、今は河港の機能はまったくない。

三湊船賃並人馬賃錢書上

(天保七年) 申九月 牧田御問屋中え 烏江架笠舟付問屋より

勢州桑名え船路八里余 尾州熱田え船路十五里余 三ヶ所ヨリ牧田え道法三里
御用物 沓荷物

鱒船沓艘 貳貫五百文 五貫文

鵜飼船沓艘 沓貫八百文 本馬 百三十文 二百四十七文

同小船沓艘 沓貫三百文 輕尻 九十三文

四ッ葉船沓艘 九百文 一貫七百度 人足一人 六十三文 百六十四文

県民性西濃人の性格

郷土作家豊田穰氏(穂積町在住)は「母ふたりの

記」の中に美濃人を分析してこう書いている。「中

津川、恵那を含む東濃は、信州に近く信州人の特質を受けついでいる。向学心が強く、理屈っぽい、学

問芸術を重んじ商売で金をもうけることを必ずしも人生の成功であるとは考えない。論争が好きで労働組合が強く、社会党・共産党の票が多い。

西濃は大体この反対で「実利的、商業的であり、もっと言えば功利的で自民党の金城湯地である。」と。ある郷土史家は県民性をこう説明している。

「尾張藩は大大名で、西濃は小大名と天領が主です。互いにせめぎ合い、尾張藩の敵となるような反権力的な勢力は育ちにくい。これは幕府と尾張藩の政策によるものです。隣人を敵として角を突き合せる個人主義は明治以降封建的な家族制度として色濃く西濃に残っておりまゝ。彼らは血統、血族、家屋敷、遺産相続に敏感でこれらに力を注ぎます。芸術家、宗教家あるいは思想家、教育家などは生まれにくい風土なんですな」と。



宝曆治水薩摩義士

薩摩藩士の宝曆治水の御苦労については、皆様概略はお耳に入っていると思いますが工事内容をみますと、牧田川筋で船附地内と高淵地内各式百間（一間は約二米）の川浚え工事が組まれて居り我々の祖

先は恩恵を被っていたのです。

二大難工事の千本松ノ切堤と大樽川洗堰には明治三十三年顕彰碑が建てられました。伊勢国多度村西山喜兵衛氏発起池辺村高柳元県議山田貞策氏等の努力です。

墓地遺蹟をみても岐阜三田洞から竹鼻、大藪、今尾、桑名迄散在していますし、工事区域は百九十三か村にまたがり（美濃百四十一か村、伊勢三十五か村、尾張十七か村）工事を施した堤の総延長は六万三百一十間（一〇八、五杧）にも及んでいます。如何に広大な地域だったか察せられます。

文芸でも杉本苑子直木賞作品歴史小説「孤愁の岸」伊藤信の「宝曆治水と薩摩藩士」岸武雄の児童文学「千本松原」等優秀な名作も生まれました。数年前にはすわらじ劇団や森繁久弥によって舞台化されて大好評を博しました。

今から二百四十年前幕府の命により、薩摩（鹿児島県）から三百里離れた美濃国（岐阜県）迄、

平田鞆負正輔が総奉行となり、一千余名の藩士が遙々来られて、各工区に別れて慣れぬ土木工事に身を削られたのです。

そもそも事の始まりは、前年十二月二十五日江戸留守居役へ美濃国の川普請を云い付けられ急飛脚を江戸から国元鹿兒島へ送ったが、島津侯が知られたのは正月の十日頃早速家来衆を集め評定が開かれたが先の赤穂浪士のお城明渡しの大評定の如く藩論は二分した。

関ヶ原合戦では西軍についた外様大名とは云え西国の雄藩七十七万石、度々陳情を受けている美濃の国を救うと共に、大金を使わせて島津侯の力を弱らせたい腹積りがあり、おめおめそんな命令に従うよりいさぎよく戦った方がいいという強硬意見も出たが、家老平田鞆負は考えてみれば美濃とは縁もゆかりもないが同じ日本の国の人間、その人達が長い間苦しんでいると聞くからは、いのちをかけて助けるのが薩摩武士の本分ではないか。裏には徳川の計ら

いもあろうが函をくいしばってこらえ「お手伝い普請をすなおに受けようではないか、それはお家をすくう為でもあり薩摩武士のはまれのためである」と言上、殿様も「薩摩藩が一つ心になってひき受けよう」と決められた。初めの話で十五万両はいるとの事、総奉行になった平田鞆負は大阪商人に立寄り金の工面をして大牧鬼頭兵内が本宅を解放してくれた本小屋へ来られた。

先発した伊集院副奉行等藩士達は宝暦四年二月二十七日第一期工事の鍬初め式が行われいよいよ工事は始った。

お手伝い普請とは幕府が行う直轄工事を薩摩がお手伝いするもので幕府の作った設計書に従い、工事に必要な材料を買いととのえ、請負うもので全監督指図はすべて幕府というわりの悪い仕事なのだ。工事内容をよくみると二十二万両はかかるので平田は借入金 of 工面と仕事の進行具合とで大変なのだ。勿論国許島津藩も租税の重課となり金の調達

にも大変だ。

閏月の二月・三月・四月と丸三月かかって涙と汗の連続だったがとも角福束輪中の雨波村の普請を最後に第一期工事は終った。

さて工事をやるには機械のない時代ですべて人海作戦、これには金がかかるが仕方がない。

一つの世にもある欲と情にからまる人間模様ドラマがこ

こでも繰広げられた。前年の飢饉で儲けな損の土民感情と欲はった庄屋達は役人と心を通じていて百姓達は思う様に働いてくれない。人夫曰当は他村出役銀二匁自分の村仕事は一匁七分貰えるのだが女子供でも一人前の男と同じ様に日当を払わせ、仕事はサボる薩摩の人へは一汁一菜の食事でよいとか、ワラジやミノ等恵んではならぬ金を貰えとか、工事の石や材木等材料調達も遠方からせよとの命令が伝わり、指揮者笠松郡代側の無理難題非協力な百姓共、工事のおくれ等中にたった藩士の苦悩如何許りかと思われる。

第二期工事は雨期に入って大変六月の大雨では牧田川筋つつみの根元の蛇かごさえ押し流されてしまったという。

幕吏の工事命令について一切言訳は聞かれず悲憤やる方なく切腹自害した藩士六月三人、七月五人、八月十六人、九月十一人を数えている。大体薩摩は禅宗が多く当地方は真宗寺院であり公儀を恐れて遺骸の埋葬を断る有様、生きても死してもその御苦勞筆舌に絶します。寺に伝わる古文書によると腰のものにて怪我をしたという届書を出して葬られており近くでは根古地天照寺に三名の墓があり、大場東浄土三昧に義歿者慰霊堂が建てられ24名を改葬されている。ここは伊勢湾台風で牧田川根古地決潰で浸水、多芸輪中内の道路改修の際道下に眠って居られた藩士の骨壘多数発見された物で知らぬ事とは申せ懺悔に堪えない。

六・七月は大雨期でもあり八月まで工事中止第二期工事は難工事許りなので準備として材料集め

をした。これも大変、一例をあげれば油島へ切工事で蛇かごにつめる石等加茂郡太田から材木等は可児郡奥山の幕領から切り出したりして運ばねばならない。金や手間のかかるやり方だが命令として仕方がない。

又この頃小奉行、歩行士、足輕等身分の低いさむらい四二〇人中病人一五七人、1-3が病人となり、最後には家来五三名切腹自害三三名病死の犠牲者を出した。

工事終盤には協力する百姓達も出、幕吏も近くの山からの材料調達も許す様になった。

3月28日二期工事を最後に一年半で一二〇か所にまたがる工事を完成し4月15日から5月10日迄行われた幕府の検査も「けっこうな出来」と賞められて終った。

平田鞆負総奉行は連れて来た家来に犠牲者を出し、遺族に対して申訳ない、一面最初見積りの三倍もの40万両を使い巨万の落債を作って末長く藩に苦難を

残した事誠に申訳ない死んでお詫びしようと決心して、家老へ最後の報告書を書きあげ、宝暦五年五月廿五日

住みなれし里も今更名残りにて

立ちぞわづらふ美濃の大牧

と辞世の歌を残して自害し、幕府の手前急病で死んだことにして、遺体は川舟で桑名へ運び、京都伏見の大黒寺に葬られました。享年五十二歳。

江戸幕府政治も終り、関係町村では漸く御苦労を偲び顕彰の声も出初めました。大正年代に入り薩摩義士顕彰会が出来「薩摩工事役館趾平田鞆負翁終焉地」記念碑や銅像も建てられた。当地では薩摩義士と呼び大衆の幸せの為一身を捧げ尽して下さった義士の事蹟を末長く伝えたいと思います。今では春夏二回の慰霊祭が行われ、かかる御縁で岐阜と鹿児島は姉妹県として文化交流を深め友好にとめている。

日向松を植えられ緑濃い千本松原に昭和43年薩

摩藩士犠牲者八十余名をまつた治水神社が建立さ

れ、又境内に最近義士三人が土木作業に精出している姿の銅像が建てられた。

治水神社の一軒下流に宝暦治水碑（前記）が建ており、付近は千本松原県立自然公園であり、三大河川には油島大橋、長良川大橋、立田大橋が架けられ便利となり国営木曾三川公園として中日治水タワーも出来ている。水郷レジャーにお出掛けの際は治水神社へも足を運んで鎮魂と感謝の誠を捧げて頂きたい。

三之手工区工事記録

烏江高淵之間川内

一、淵浚長二百間

平均横十間 深三尺 此土千坪

牧田川通船付地内鼠ヶ森

一、淵浚長貳百間

平均横十五間 深二尺 此土千坪

濃尾震災

今年は濃尾震災の起きた明治二十四年から百周年に当たったので大垣を始め県下各地で記念行事が繰りひろげられた。この地震は震度8.4で、震源地は本巣郡根尾村の根尾谷能郷（北緯三五、六度東径一三六、六度）で激震地帯が福井県から美濃尾張であり、その区域は北は宮城山形から南は九州鹿児島に及び全国土の六〇％が人体に感じた未曾有の大地震であったのだ。

記録によれば岐阜測候所の検測では「明治廿四年十月廿八日午前六時卅七分十一秒ニ於ケル地震ハ最初上下及水平動ト共ニ北・南へ震動セシガ十秒ヲ経テ大烈震ト為リ北西・南東へ震動セリ。一秒ヲ経テ器械ヲ損シ其余ヲ測ル能ハサルモ烈震ノ間五分余后ハ南北・南々西・北々東へ震動ヲ成セリ而シテ地ノ実動ハ曲尺四寸余モアリシナラン」と「震災誌」に記されている。その後岐阜では十

月末までに烈震四回強震四〇回を記録した。

なお余震は翌二十五年にいたっておきまらず一月中に烈震一強震八、総震動回数一六四さらに三月にいたっても八八回の弱震がおきるといったものだった。根尾村水鳥地区で国の特別史蹟根尾断層もこの時出来たもので、あの広大な地域が上下六米水平二、七米一瞬に陥没してしまったのだ。

各地の被害は死者七二七三人、家屋の全壊全焼一四万二一七七棟、半壊八万一八四棟、山くずれ一万余、根尾谷を通る大断層を生じ内陸型地震として地震史上最大級のものであった。

二五年一月三日、九月七日、二七年一月一〇日の余震で家屋破損などの被害があった。

当時の大垣興文高等尋常小学校長、長屋由郎先生は俄然轟声と共に一大震動を起し、地裂け、水湧き、家倒れ、人圧せられ叫喚号泣の声四方に起る……とこの一瞬の出来事を「震災小誌（大垣市興文小学校所蔵）」に書き残されている。

この時岐阜大垣笠松等五カ所が焼野原になり、中でも一番悲惨だったのは真宗大谷派大垣別院開闢寺（大垣市伝馬町）だった。

今年九月一日には大垣別院で百周年追悼供養法要が行われた。真宗の盛んな土地で丁度御開山親鸞聖人の御命日として晨朝勤行に大勢の同行が参詣していた。

読経後のお説教

最中にグラツと来て柱は折れ土ぼこりと共に大屋根が落下、僧侶は高座におちてきた鴨居にはさまれサンドイッチの状態となり、参詣人の殆んども本堂倒壊で圧死、丁度朝餉の

マグネチユード 地震そのものの大きさを表わす尺度 で記号はM Mで分類すれば次表のとおり	
呼び名	M
大震	7以上
中震	5ー7
小震	3ー5
微小震	1ー3
極微小震	1未満

準備時間とて何処からか火の手が上がり皆そのまま焼かれてしまった。焼失区域は藤江町・伝馬町・岐阜町・高屋町・本町・中町・清水町・魚屋町・新町等大垣の町の中心街殆んどだった。

別院の死者は一五〇人と云われ、中には木材にはさまれて着物をはがれ命からがら家へ戻っても壊れて入れず止むなく警察（当時寺内町にあった）へ全裸の儘助けを求めた老婆があったとも伝えられている。

各地でも地は割れ道路は寸断され堤防は崩れ橋は落ち、物凄い轟音と共に寺が倒れる鐘付堂が倒れる住んで居た家やあちこちの家が倒れ多くの死傷者が出た。

この大災害で御先祖に関係者のあるお家があると思われませんが、当村の尊光寺でも第十九世住職の長男で副住職児玉徳眼師が美濃教区の大野町に巡教に出られ途中岐阜町の宿屋八幡屋で止宿中に圧死され類焼に合われており、私の祖母の父も村の寺に参詣

中本堂倒壊圧死されて居り曾祖父兵左衛門も朝詣りの帰りに地震に遭い、町家の屋根瓦が落ちてきて頭に十纏位の傷跡があったとの事（明治四十三年歿八十一才）

山地寄りには被害も少ないが地盤の軟弱な平野に人口の集中している当地方は震源地伊尾川沿いの関係もあり（村の中央笠郷小学校は東経一三六、三六〇一度北緯三五、一七五一度海拔二米、横曽根は標高二、五米だ）被害は別表の通りだ。村で満足に残ったのは尊光寺山門と谷様のお茶席とか。海津郡高須町では死者の被害は少なかったが、二度目の激震（三分後）で殆んどの家屋は壊滅した。その廢居の中を真宗の坊さん二人が枕経を勤めて歩いて居た。これを見た町長は禅宗の人だったが、有縁の人々を弔う姿を見て深く感動なされた。十一月に門徒衆の惨状を聞かれた第二十二代門跡現如上人（大谷光瑩師）は数珠五千組を用意され「こんな時だからお念仏を称えて下さいヨ」

と各村々で激励して歩かれた。その折高須の町長は御門主を笠松迄出迎えられ、崩れた堤防や泥状土の湧き出した所、橋の落ちた所等を案内して回られた。高須を出られた御門主は今尾を回られ伊尾川を船で遡上され船附安田藤蔵様で一泊大垣へ向われた。

養老郡誌によれば当局は同日栗笠・船着・根古地新田・大巻・多芸島・小畑・口ケ島・高田・上多度の九ヶ町村に救難所を設置しようとしたが、其地の役場転覆して事務を掌ることも出来ず、倉庫等も倒壊して米穀を得る事が出来ず竹木藁席を集めて仮小屋で漸く設備を作り本部を水陸運漕の便のよい船着村に置いて材料集めに東奔西走した。

飢に泣き甚に彷徨する者無慮一萬餘人に達し用意した米穀薪炭忽ち欠乏を訴え之を他郡に仰がんとし、ても他郡も亦窮状に陥って之を得るの途なく依て三重県桑名郡長に依り米数百俵を買収し大船三艘で之を廻漕し薪炭は多度山麓諸村より数千貫を購入し之を各避難所に送り一時の急を救った。

県及び旧笠郷地区周辺の被害状況

町村別	総人口	死 者	重傷者	軽傷者	計	総戸数	全 潰	半 潰
岐 阜 県	937,491	4,984			負 傷 13,762		50,125	33,459
大 垣 町	18,306	670	351	426	1,447	4,474	2,676	888
上 多 度	1,244	3	2	1	6	239	5	40
大 場	375	1	5	4	10	67	46	21
下 笠	1,663	4	8	34	46	307	233	71
岩 道	251	3	3	2	8	46	32	14
上 之 郷	296	7	3	8	18	49	40	8
横 曾 根	647	1	1	1	3	111	53	58
船附・大野	1,813	25	28	38	91	356	251	105
栗 笠	845	19	16	18	53	176	136	40
烏 江	600	3	4	4	11	136	97	39
今 尾 町	3,013	68			負傷58	591	549	42

又安八郡役所では前夜から大垣に泊っていた小柳若湊一行力士（東京京都合同大角力地方巡業大垣場所の為）八〇人に救援を依頼し、また大垣監獄支署（寺内町にあった）から囚徒五〇人を巡査をつけて出し救援作業に赴かせたりした。

力士の中で大関楯甲はこの時旅館の家族を助け出し、再び逃げおくれた老婆を救助しようと思ったが落ちてきた梁を背中に支え老婆を逃がしたが遂に力尽きて死去したという。二十九才、福島県猪苗代町出身。この時に前相撲をとっていた松若も救助されたのだが、その恩義を感じ楯甲を名乗り、後大阪相撲横綱若島となっている。

罹災者には天皇皇后両陛下からの恩賜金やら政府当局から三五〇万円支出（明治廿一年県財政六四万円である）国民一般からの温かい義損金や救援物品が届けられ救済された。中に真宗本派本願寺が白米二五〇俵を垂井駅へ送られたり、東本願寺が古着類一万点約四〇梱包を大垣町で配ったという新聞記事

もある。

十一月二日から勅使の毛利侍従が約一ヶ月に亘り精力的に県下の被災地を巡回され住民たちを激励されている。大垣へ十一日入られその夜は養老に泊られたが天皇陛下のお使いということで感激した地元民やお供たちが「この際養老の滝でも見物されては……」と勧めたところ「陛下のお使いで来ている。私事を混同してはいけない」と滝見物を断わられたという話が伝えられている。

尚記録によれば尾張国中島郡被害二二、二〇五戸のうち全潰一二、六〇〇戸死者九〇五人負傷者一、一三〇人を数えたとある。

以上世に之を濃飛大震災と称して今猶人人の恐るる所である。

次に記憶に新しい関東大震災の記録について述べておこう。

大正十二年（一九二三）九月一日午前十一時五十八分四十四秒関東地方は激しい地震に襲われた。

中央気象台の地震計の針はすべて飛んでしまい東大理学部地震計が辛じて記録したという。

最大振幅一四・二〇cm震度七、九と観測。東京府の倒壊建物三万六千五百八十四戸、東京市は折柄お昼の食事時間帯とて、いずこからか火災が起こり六二、四％が焼失、焼死者行方不明者六万八千六百〇人と報ぜられ日本橋、京橋、本所、深川区域等は殆んど全焼状態となつてしまつた。全被害では死者数は一四二、八〇七人全壊全焼失家屋は五七五、三九四戸だった。

尚昭和三十五年五月のチリ南部沖地震はM九、五であり、遙か太平洋を渡り日本でチリ地震津波となり、死者一三九人二八三〇戸の流失家屋が出ている。

終戦前後には度々地震があつたが、大地震は数十年或は数百年を周期に起こると云われるが、遠き昔の惨事を憶ひ起こし、いたずらに狼狽することなく、災害に備える準備を怠らない様にしたいものだ。

地震メモ

物 価 の 変 動			
品 目	単位	震 災 直 後	11月末
白 米	1 升	20銭	9銭
み そ	100匁	2銭	1銭
醬 油	1 升	3銭	2銭
種 油	1 升	35銭	30銭

伊勢湾台風水害

我々東海地方で近代に体験した最大の強烈な災害として一番先に思い出されて、脳裡に深く残っているのが伊勢湾台風である。あの時当地方では

二度に亘る大洪水に見舞われたのだ。

昭和三十四年（一九五九）八月十三日午後八時二十分に牧田川根古地堤防が一二〇米決壊し多芸輪中の農地二九〇〇ヘクタールと約一七〇〇戸の家、十二ヶ所の排水機が一夜のうちに水没して泥海となり二十九日間の湛水で旧笠郷小学校では二米余の最高水位となり悲惨な状態であった。

この水害は八月十二日から十三日にかけて活発な前線活動と台風七号の北上に伴う影響で記録的な集中豪雨となり、揖斐川上流部でも連続六〇〇ミリの雨量に達し、八月八日から九日にかけて台風六号で山間部は二五〇ミリ前後、平野部でも一〇〇ミリ前後の降雨が前ぶれのようにあり堤防はゆるんでいたのだ。

この集中豪雨で昼間養老山脈の各谷川が丁度勝浦から那智の滝をみる様に、あちこちに白く眺められた。

出水は高淵で警戒水位六、五米を上回る八、二九

米となり、揖斐川本川今尾で八米を超える高水位が十三日午前三時から午後九時まで十八時間も続いた。そして遂に堤防が決壊して大洪水となったのだ。

堤防が切れたとの合図で各家では家財道具の運び出しや小高い堤防での避難場所造り等大忙がしとなった。この水害で本家では遂に鴨居迄浸水し、八幡神社では拝殿に向う石段も水没してしまった。幸い拙宅は堤外地にある為被害を免れたが、親類の避難家族と三世帯の同居生活が始まった。

本家では早速親戚で小舟を借りて来て朝夕二回は必ず水没した自家の盗難防止と雨戸はずれを見廻りに行く忙がしきだった。自分も休日等には舟で巡回の手伝いもした。

世の中にはいろんな人が居るもので、被災した住民の家屋留守中の二階へ盗みに入る奴も現われたりした。

直ちに決壊口仮締切工事に着手、九月二十日漸

く完了したが、伊勢湾台風で再び決壊水没して被害甚大となった。

台風十五号（伊勢湾台風と名付けられた）は九月二十三日硫黄島付近に発生、洋上を北西に進み中心付近の最大風速七五米以上の超大型台風になる恐れがあるので（中心気圧海上九〇〇mb）当局は防災準備を呼びかけ二十六日午前十時には暴風雨警報を発令した。

刻々と迫ってきた台風は遂に当地方にとって最悪のコースとなり午後八時和歌山県潮岬付近に上陸（九三〇mb）本州縦断午後九時鈴鹿峠付近（九四〇mb）十時揖斐川上流（九四五mb）に達し当地方を直撃して翌早朝富山湾（九六〇mb）に抜け日本海海岸沿いを北上したがこの間名古屋では中心気圧九四五mb最大風速三七米瞬間最大風速四五、七米を記録、風速三〇米の暴風圏半径三百軒に及び伊勢湾岸一帯は七米位の高潮に襲われて海岸堤は二四〇ヶ所が破堤、各河川の堤防は至る所で決壊して名古屋市南部

は水浸しとなり、水に吞まれる人一円の濁水の海と化し家の中で救助を求める人、家を流される人で空前の惨状が展開し市民のみで一八五一人にのぼる死者行方不明者が出て物的被害総額一、二八七億円を超えた。

警察庁調べでは被災者約一六一万人死者行方不明四九七七人全壊流失家屋約三万九千戸である。幸い養老町の人的被害は死者一人負傷二六人と少なかった。

茲で各地へ自衛隊が出動して救助活動に当った。水浸しの中で一番困るのは飲料水だ。早速給水や炊出しも始まり被災地では自衛隊の有難味が身に泌みた。

当時私は名古屋に勤めていて同僚に被災者が出たので油まみれの泥水の中腰迄かって築港付近の家へ見舞に行った。又全国から寄せられた救援物資の中へどう間違ったのか花嫁衣裳の振袖の梱包が混りこんでいたのも思い出の一つだ。

度々洪水に悩まされていた輪中地帯の生活の知恵で上げ舟（今も下笠小野三男宅に残されている）や二階へ滑車利用の上げ仏壇の装置を考えている家もある。農家で一番の財産は床の間にある大きな仏壇なのだから。

水がひいてからは後始末に大忙がしとなり部落の道路や屋敷の汚物の処理、家畜死骸の処置、中には水浸しで半分バラバラになった仏壇おちた壁の修理、下に溜ったヘドロの片付け、家財や床板の水洗い、戸障子畳の整備、衛生関係消毒処置管理等大変だった。

又三重県方面から名古屋への通勤者は、尾張部伊勢湾護岸堤防の欠壊で近鉄や関西線は水没して不通となり足を奪われ養老線を迂回利用して毎日多芸輪中水没地帯を跳めつゝ大垣へ出て通っていた。

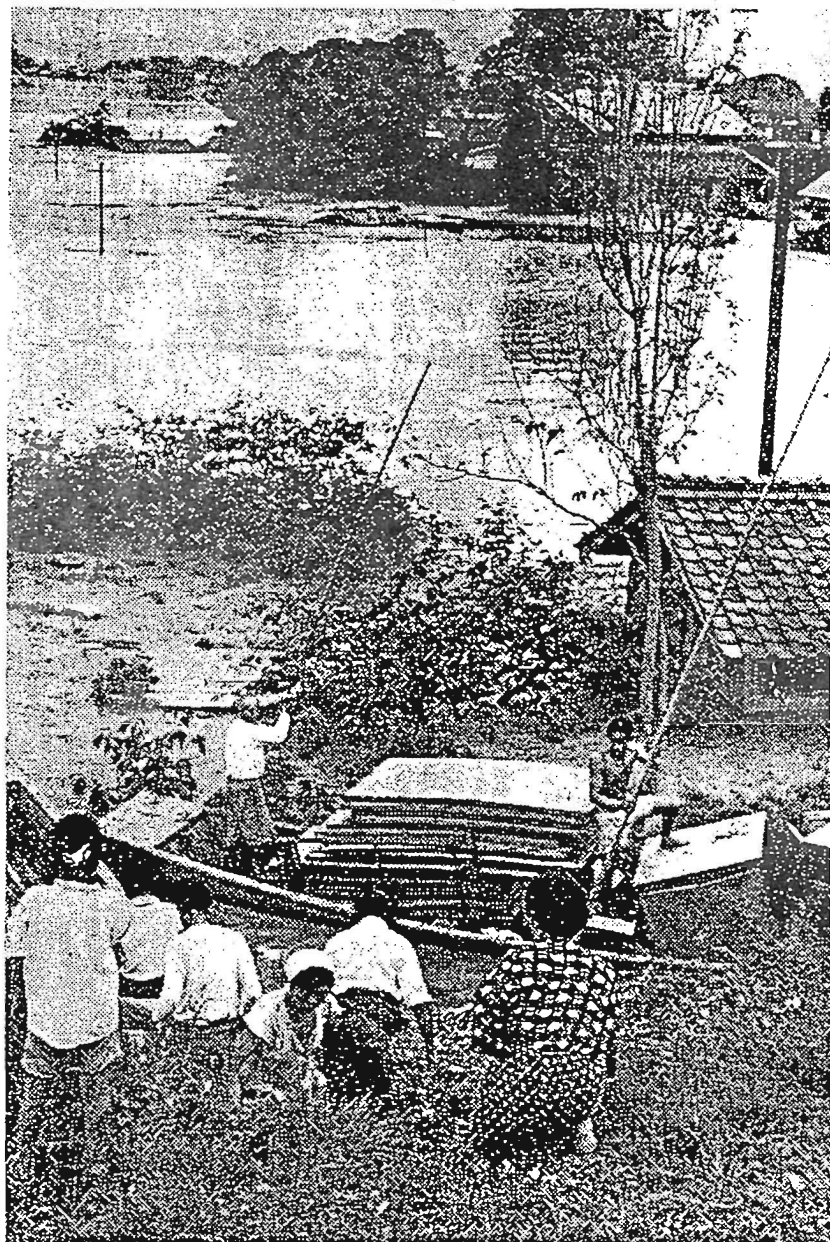
養老町では九月二十七日午前三時半災害救助法が発動され炊出し給与、自衛隊の飲料水供給が開始された。（共に十月三十一日迄）十月十日牧田川川俣締

切工事完了十月十五日排水完了、この間当局や各地からの救援物資の配給も始まった。飲料水は大垣市借上車で十一月十日迄給水された。其後簡易水道付設、大野等には鉄筋コンクリート造り公営住宅等の建設又農地復旧事業にも取りかかった。

罹災者は第一次災害一万二千人第二次災害九八〇五人、農作物被害一〇七九、七〇万円、水産物被害三〇六〇万円となった。幸い人的被害（前述）二十七名の僅少で慰められるのだが笠郷小、中学校、池辺小学校建物、備品の被害甚大、何分当輪中南部は海拔〇米地帯であり、下池は海拔マイナスイ、四米なのだ。

下笠早戸神社、岩道早扉神社には多芸輪中浸水位標がある。

最近笠小体育館横駐車場側に水位標柱が建てられた。それによると、決壊は八月十三日午後七時五十分最高水位二米二〇釐二回目は九月二十七日午前一時四十二分一米九一釐と書いてある。



濁流にのまれた家からタタミ、タンスなどを堤防に運び上げる人たち(養老町船付で)＝岐阜市徹明町、全日写真中評本部委員、近藤竜夫氏撮影

養老鉄道

大正二年（一九一三）始めて開通したもので、養老郡の中東部を南北に走り郡内貨物の運輸及び旅客に便益を与えてくれた。殊に養老や霞間ヶ谷が観光地として世間に認められる様になり、皆この鉄道を利用したので其季節には乗客は常に多かった。

敷設に努力下さった立川勇次郎について述べておこう。立川勇次郎は大垣藩士清水恒右衛門の二男として文久二年（一八六二）生れ、後に同藩士立川清助の養子となった。

二十才で弁護士試験に合格し明治十九年（一八八六）上京して開業するが、時代の進展を見越して明治三十二年関東で最初の電気鉄道である川崎電気鉄道会社（京浜急行）次いで東京電力会社を創設。又東京市街鉄道会社（市電）を創立、乗車区間に關係なく三銭の均一運賃を確立する等日本の交通史に大きな功績を残した人だった。

余談だが大垣駅は明治十七年（一八八四）五月二十五日敦賀関ヶ原間の鉄道が大垣まで延長工事が竣功し東海地方最初の鉄道が開通し駅が開設された。明治二十年大垣武豊間も開通、同二十二年東海道線全線（新橋神戸間）が開通するに至った。昭和十九年駅前に噴水池（亀の池）が造られ、水都大垣のシンボルとして多くの市民に親しまれたものだ。同六十一年（一九八六）駅ビルアピオ完成、駅周辺も近代的に整備されて一変した。

先の勇次郎は晩年郷里のために養老鉄道を手がけることとなった。

当時四日市と大垣とを鉄道で結びつけたいという沿線有志の熱意で鉄道敷設願いを出し色々促進運動が行なわれ、又大垣藩士で後に第二代鉄道庁長官となった松本莊一郎等の尽力もあり明治二十七年認可された。その後事情があって進展せず地元民の期待は焦燥に変わろうとした明治四十四年（一九一一）資本金一五〇万円をもって養老鉄道

株式会社を設立した。

そして客馬車や人力車などの業者を説得して、池野―大垣―養老間で開業したのが大正二年（一九一三）七月汽車として営業を始めた。その六年後大正八年には第二期工事で現在の区間に延長して、揖斐桑名間全長五七、六キロの単線が開通し、この鉄道が孝子の伝説で知られる養老の滝の景勝を世に出した。

勇次郎は大正十一年に揖斐川電気株式会社を創立して、社長となり合併経営を行い、その電力で十二月五日全線電化され昭和三年（一九二八）養老電気鉄道に変更した。その後昭和十九年（一九四四）近鉄に合併して経営を引継ぎ現在に至っている。

立川勇次郎は大正十四年東京で病没享年六十四才。法名浄光院明誓世鑑電勇大居士。立川家墓所は赤坂町御勝山安楽寺にある。昭和二年養老駅前広場北側に高さ約五米の顕彰碑が建てられ、毎年顕彰祭が行われている。

当初鉄道敷設計画では友江駒野間船附地内を真直ぐ田圃の中を南へ通り、東井戸池林下付近（現笠郷小学校東）で養老へ支線を通す計画で測量もされたが、時の地主谷金吾さん、桑名の諸戸清六さんは殆んど自分の土地許りがかかるので反対された。理由は住民が百姓をやらなくなり働けなくなるとか。

一面話し合いが難航するので県会議員佐竹直太郎さん（昭和三年から二期八年間衆議院議員）が養老へは高田を迂回する様に尽力され決ったとか、又工事には西脇壮三様が一部請負われた。又材長様が栗の枕木を調達されたとか。村人が珍らしい蒸気機関車が走るのを見に行き蒸気をかけられ逃げたとか、色々裏話が残っているが兎も角船附発展には惜しいことだったと思われる。

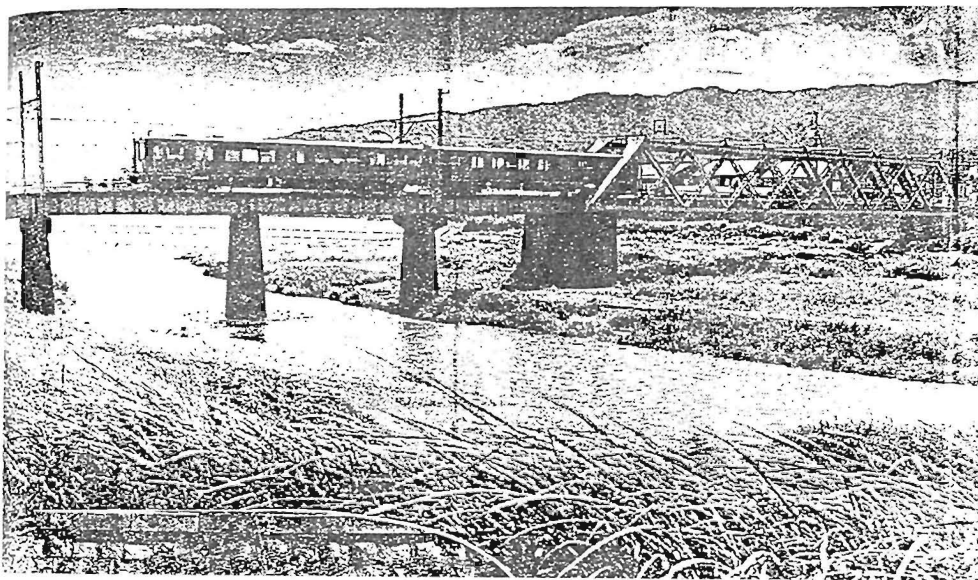
其後諸種の事情で揖斐川の舟運も次第にさびれていってしまい、戦中戦後の近鉄養老線は貨物輸送でドル箱的存在になっていた。

近養
老鉄線

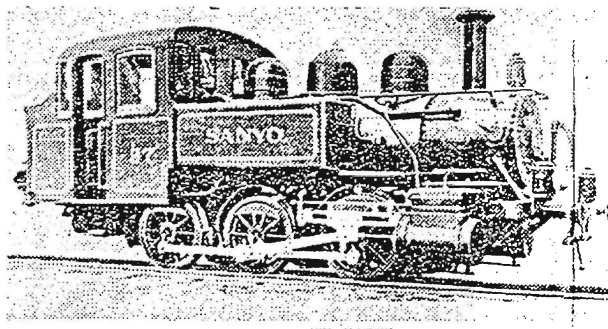
走り続けて70年

(平成5年80周年です)

養老の山合いから平野部に向かつて牧田川の鉄橋を走る養老線電車
——養老町烏江



鉄道の建設工事から開業時に走っていた蒸気機関車——機関車史研究会提供



江戸時代封建制度とは

明治維新の制度改革以来板垣退助・大隈重信等の自由民権思想に刺激され教育や選挙権等女性の地位も次第に高まって来て今では夢の様なお話ですが封建時代に触れてみます。所謂士農工商の身分階級制度は御存知と思います。先ず関係ある歴史の流れについて書きます。

蓮如上人吉崎御化導の頃本願寺門徒軍団の形式が出来て、戦う加賀軍団の百年間の横暴の元となりました。文明八年（一四七五）上人吉崎退居の折、小浜迄の船上で船にゆられてのお念仏が本山報恩講二十八日に行われる坂東節のはじまりといわれています。文明十二年（一四八〇）に山科本願寺建築、明応五年（一四九六）大阪御坊が建ち、後の石山本願寺城での十四年間信長と戦う事となります。

其後多度山麓では信長軍と本願寺門徒との衝突が続き遂に元亀二年五月（一五七一）伊勢長島の一向

一揆が起こり、大垣城に住み信長に仕えた氏家ト全（西美濃三人衆）も石津郡太田郷安江村で一向宗軍の反撃に会って戦死しております。

左記高須城主小笠原貞信は多良高木貞勝の長男として生れており長女を吊った上野河戸で娘の法名をとり寒窓寺を建てている。余談休憩。

長島願証寺に集まった門徒六万余も天正二年九月（一五七四）水軍包囲火攻めで漸く鎮圧されました。信長は比叡山始めあちこちの寺院焼討を行い、永禄三〇五年（一五六〇）一五六二）信長西濃に出兵しており多芸七坊等もこの頃焼かれてしまいました。

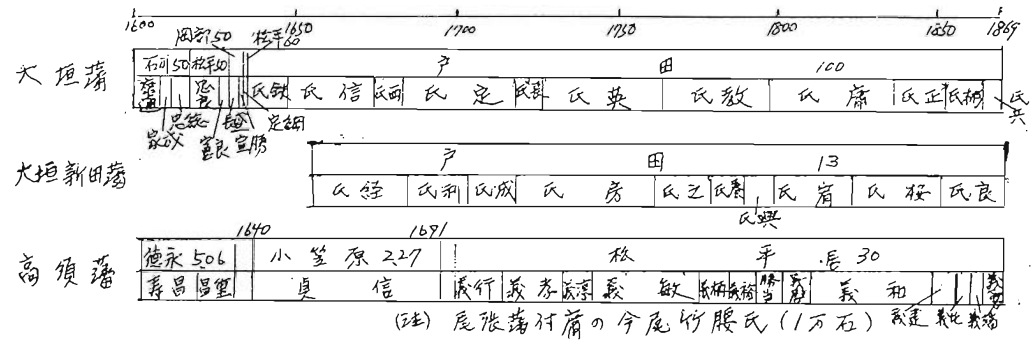
次に豊臣秀吉の時代となり、一五八七年六月キリスト教の禁止令が出され反面本願寺は加護されました。

其後一六〇〇年関ヶ原の合戦、一六一五年大阪夏の陣となり豊臣氏は亡び、家康の江戸幕府時代が始まりました、東本願寺分離政策がとられました

た。

次に当時の幕政の仕組み統制について述べてみます。大名藩主には親藩御三家（尾張・紀州・水戸）と譜代（三河以来の家臣で大名となったもの）と外様（関ヶ原以後徳川氏に服属した大名）があり、將軍様のお膝下には諸藩に江戸屋敷を構えさせ、妻女を人質として住まわせ、江戸との間を往復させる

一 藩主 張 系 圖



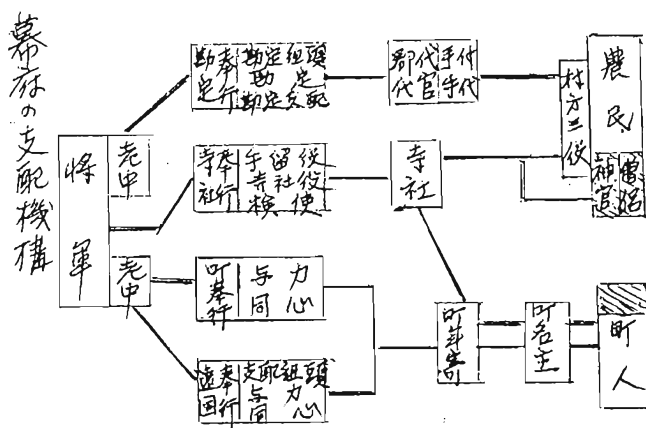
三勤交代制度を作り、屋敷と三勤交代費用とを併せて藩財政の半分は費やされたといわれます。氣に入らねば改易、取潰し、減封、移封等將軍の思いの儘で、改めて將軍様の権力の偉大さを思い知らされます。

又裕福と思われ、危険視された諸大名には、御手伝普請と称し、神社仏閣の造立、城や道路河川の改修工事等が命せられ、設計、指図はあく迄幕府であり、莫大な金子の供出負担をさせられます。お手伝とは名許りなのです。

我々が一番お世話になった薩摩義士を例にみても、縁もゆかりも無い鹿児島津候に、木曾三川分流工事お手伝が命せられ、工事の御苦労は御存知の通りです。

藩士達異国で慣れぬ土木の労役、難儀な工事工程、借金に借金を重ねて調達して費やされた工費は四十万両、幕府負担は一万両足らずと云われています。

した。



百姓は天下の根本だとして武士の次として高く評価されたのも、農業をやらせ、殿様の禄高を年貢米で取立てる為です。米作りが一番大切ですから職人商

政を執った。

此時より知行を何百町と町数にて取扱ひ、信長
の頃は永樂錢の何貫文と云うようになり、大閣秀
吉より地方検地して知行を高でいう様になりました。
又此時食分男二合五勺、女一合宛の一食を定
められて扶持とされました。従つて五人扶持等
う下級武士では女は縫物等質仕事、男は傘張り等
内職せねば食べて行かなくなつたのです。

工商は町人で、工は親方、徒弟、商は主人、番頭、手代、丁稚制度であり、穢多非人等賤民として社会から差別を受け続けました。

村方の支配としては地方三役の下に名主・庄屋

(江戸時代の村長)があり、人別改、宗門改、五人組改等村内の政治全般に亘り、命令の伝達、年貢の割当てから納入其他色々な陳情や報告物、村のもめ事始め夫婦喧嘩の裁き迄せねばならなかったので仲々大変な仕事量だったと思います。又組頭・年寄や百姓代があつて名主を補佐しました。

農民百姓にも二通りあり一般百姓と水呑百姓という制度があつて本百姓は検地帳に登録、貢納責任者、水呑百姓は田畑をもたない小作人です。大名には、居城補習言上、婚姻許可制、諸大名参勤作法等定めた武家諸法度がある様に庶民にも御触書きが出されました。

村 高 一 覧 表

(のびゆく養老町より)

村名	慶長郷牒 (慶長十八年)	元和改帳 (元和二年)	正保郷帳 (正保元年)	天保郷帳	旧高及所轄沿革 取調帳(明治元年)
舟付	七〇二、〇九〇	七〇二、〇九〇	七一〇、〇九〇	七二八、三五五	一九九三、一三四
上之郷	六一六、〇〇三	六一六、〇〇三	六一六、〇〇三	六一六、〇〇三	六一六、〇〇三
大野	一一三、九〇〇	一〇七、九〇〇	新開 一一九、九〇〇 一、七九二	一二一、〇三九	一七八、九四三
下笠	四五九、八〇〇	四四五、〇〇〇	新開 四五〇、〇〇〇 九三七、三六〇	六三〇、〇一〇	一八一五、九九六
栗笠	五八四、一五三	五九六、一五〇	新開 六〇四、一五三 六八、〇〇〇	六一六、三五二	九七七、五五四

石斗升合

田畑永代売買の禁止令、分地制限令、勝手作りの禁等色々制限されました。後に御触書によって農民の生活がどんなに規制されたのかを掲げておきます。藩主代官からはもっと細かく生活上の制限した御触れが出されました。

為政者の農民観は、百姓は「財の余らぬ様に、不足なき様に」「死なぬ様に、生きぬ様に」と再生産に必要な部分だけを残しその余剰を「胡麻ゴマの油と百姓は、絞シボれば絞るほど出る」（西城物語）と表現されているように徹底的に収奪したのでした。

村では隣近所で五人組に分けられ連帯責任体制の為、常に他人の家を見張りして生活していました。キリスト教信者等宗門の關係が最も厳しく、墮落したり犯罪者を出したりしては大変な事だから、隣の事許り気にする日暮しでした。

地方三帳といひ成箇郷帳・年貢可納割付・年貢皆済目録他に検地帳や名寄帳をそなえておき、宗門改帳には一人一人の宗旨を決め（壇那寺）一年毎に各

村々から殿様に差出し、村控も作っておき、村人は古郷送り、往来手形、寺手形等証明もして貰いました。

嫁入り縁付く時には、庄屋が村の寺の旦那（門徒のこと）であり宗旨を明記し切死丹でない旨を証明し嫁ぎ先庄屋へ古郷送りの一札（※別紙一札参照）を文書で持たせてやり、必ず寺へ挨拶に行き寺の宗門改帳に記載されます。

宗門改帳には一家中で倅、娘の時は名前と年令が書かれてあるが、嫁入ると名前すら書かれなくて〇〇女房とか〇〇母と年令が記載され、五人内男三人の如くになっています。

男女同権、機会均等法の現代では、とても考えられない様な人権無視の世の中でありました。

明治四年四月戸籍法が改正され、それ迄庶民には苗字が無かったのですが姓が名乗れる様になり、公郷藩主等は華族、武士は士族、一般は平民となりました。

当時の厳しい封建時代を知る参考に御触書を記してみよう。

慶安の御触書

諸国郷村江仰せ出さる。
ゴウソノエオホ

①一、公儀御法度を怠り、地頭・代官の事おろそかに存ぜず、さて又名主・組頭をハ真の親とおもふべき事。
ゴハット

⑤一、朝おきを致し、朝草を刈り、昼は田畑耕作にかゝり晩には縄をなひ、たはらをあみ、何にてもそれぞれ之仕事、油断なく仕るべき事。
ツカマツル

⑥一、酒・茶を買ひ、のみ申す間敷候、妻子同前の事。
マシク
(中略)

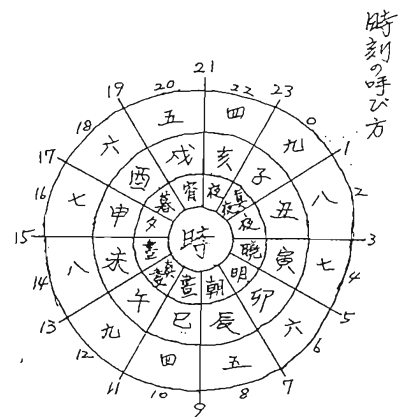
⑪一、百姓は分別もなく、末の考へもなき者に候ゆへ、秋に成候得ば、米雑穀をばむぎと妻子にもくはせ候。いつも正月、二月、三月時分之心を

通 釈

一、幕府の法令を怠り、地頭・代官の事を粗末に考えることなく、さらに名主・組頭を真の親と
思つて尊敬すること。

一、朝起きをして、朝は草を刈り、日中は田畑の耕作にはげみ、晩には縄をなつて俵をあみ、何事にもそれぞれの仕事を念を入れて行うこと。
一、酒や茶を買つて飲んではいけない。妻子も同じ。

一、百姓は思慮分別もなく、末のことを充分に考えないから、秋(収穫期)になると、いつも正月、二月、三月の冬枯れ時分のつもりで、食物



もち、食物を大切に仕るべく候に付、雑穀專一に候間、麦・粟・稗・菜・大根、其の外何にても雑穀を作り、米を多く喰ひつぶし候はぬ様に仕るべく候。

⑫ 一、飢饉の時を存じ出し候得ば、大豆の葉、あづきの葉、ささげの葉、いもの落葉など、むぎと捨て候儀はもつたいたなき事に候。

⑬ 一、男は作をかせぎ、女房はおはたをかせぎ、夕なべを仕、夫婦共にかせぎ申すべし。然者、みめかたちよき女房成共、夫の事をおろそかに存、大茶をのみ、物まいり、遊山ずきする女房を離別すべし、さり乍ら、子供多く有之か、前簾恩をも得たる女房ならば格別也。又みめさま悪候共、夫の所帯を大切にいたす女房をば、いかにも懇に仕るべき事。

⑭ 一、百姓は衣類の儀、布・木綿より外は、帯・衣裏にも仕る間敷事。

は大切に節約すべきであるから、雑穀は大切である。麦・粟・稗・菜・大根その他をとわず雑穀を作り、米を多く食いつぶさぬようにするのと。

一、飢饉の時を考えれば、大豆の葉、あづきの葉、ささげの葉、いもの落葉などをむやみに捨てることは、もつたいたなきことである。

一、男は農業に精を出し、女房は芋機を織り、夜なべをして夫婦ともに稼ぐこと。しからは、たとえ美しい女房であっても夫のことをおろそかに考え、茶ばかり飲み、物詣りや行楽好きの女は離別すべきである。しかしながら、子供が多くあって、前々からいろいろ世話をかけた女房であれば特別である。又、容貌はみにくくとも夫の世帯を大切に仕る女房は、よく親切に仕る事。

一、百姓は衣類のことで、麻の布と木綿以外のものは、帯や着物の裏地にも使ってはならないこと。

㉓ 一、たば粉のみ申間敷候。是は食にも不成、結句

以来煩に成るものに候。其上隙もかけ代物も入り、火乃用心も悪候。万事に損成ものに候事。

㉔ 一、親に能々孝行の心深くあるべし。(後略)

(前略)年貢さへすまし候へば、百姓程心易きものは之れ無く、よくよく此趣を心がけ、子々孫々迄申伝へ、能々身持をかせぎ可申者也。

慶安貳年丑二月廿六日

(徳川禁令考)

※一六四九年三代將軍家光の時、全三十二カ条

田畑永代売買禁止令

一、身上能き百姓は田地を買ひ取り、弥宜く成り、身代成らざる者は田畑沽却せしめ、猶々身上成るべからざるの間、向後田畑売買停止たるべき事。

一、たばこをすってはならない。これは食物の足しにもならず、結局、将来病気になるものだ。其の上時間もつぶし、お金もいり、火の用心も悪い。万事損になるものである。

一、親にはよくよく孝行する心を深くもたねばならない。

年貢さえ納めてしまえば、百姓ほど心配のないものは他にないから、十分にこの意味を心にとめて、子や孫にまで申し伝えて、しっかり働いて財産をつくらねばならない。

通 釈

一、資産ある百姓は、田地を買いとり、いよいよ豊かになり、家計の苦しい者は、田畑を売却して、いよいよ家計が苦しくなるので、今後田畑の売買は禁止する。

一札

一濱洲多摩郡押成村石文治儀

船材又石文、福貞、石文治儀

切此丹定、重、石文治儀

以海、石文治儀、石文治儀

法定寺、石文治儀、石文治儀

め、石文治儀、石文治儀

事、石文治儀、石文治儀

西水二已二月

多摩郡船材



石文治儀



石文治儀



押成村

石文治儀

田畑永代売買御仕置^{オシオキ}

一、売主^{ロウシヤ}牢舎之上追放。本人死候時ハ子同罪。

一、買主^{カタイロウ}過怠牢。本人死候時ハ子同罪。
^{タダシ}但買候田畑ハ売主之御代官又ハ地頭江取上之。
^{ヘコレヲトリアゲ}

一、証人過怠牢。本人死候時ハ子^{カマイ}ニ構なし。

一、質に取り候者、作り取りにして質に置き候者ヨ
^エリ年貢役相勤候得ハ、永代売同前之御仕置、但^{ライ}頼
^{ノウジン}納質といふ。

右の通り田畑永代売買^{ゴチヨウジ}御停止之旨被仰出候。

寛永二十年末三月（一六四四）

（徳川禁令考）

田畑の永代売買の処罰規定

一、売主は投獄の上追放刑。本人が死んだ場合は
その子を同罪に処する。

一、買主は罰金刑。本人が死んだ場合はその子を
同罪に処する。ただし買った田畑は売主の代官
または領主へこれを取り上げる。

一、証人となつた者は罰金刑。本人が死んだ場合
はその子は無罪。

一、田畑を質にとつた者が、質地を耕作し、収穫
しその質地の年貢諸役を質入れ人が負担する場
合は、永代売同様に処罰する。このような質入
を頼納質という。

右の通り、田畑永代売買を禁止する旨、仰せ出さ
れた。

※当時の標準経営規模が十石（およそ一町歩前後）
である。

田畑勝手作りの禁令

一、（前略）本田畑にたばこ^{タバコ}作申間敷旨、被仰出^{オホセイダサレ}候。

一、田方に木綿^{モメン}作り申す間敷事。

一、田畑共に、油の用として菜種作り申す間敷事。

（寛永二十年八月廿六日）

（徳川禁令考）

国民の祝日

〔元旦〕 一月一日

年のはじめを祝う。

〔成人の日〕 一月十五日

おとなになったことを自覚し、みずから生き抜こうとする青年を祝いはげます。

〔建国記念の日〕 二月十一日

建国をしのび、国を愛する心を養う。

〔春分の日〕 春分日

自然をたたえ、生物をいつくしむ。

〔みどりの日〕 四月二十九日

自然に親しむとともにその恩恵に感謝し、豊かな心をはぐくむ。

〔憲法記念日〕 五月三日

日本国憲法の施行を記念し、国の成長を期する。

〔こどもの日〕 五月五日

こどもの人格を重んじ、こどもの幸福をはかるとともに、母に感謝する。

〔敬老の日〕 九月十五日

多年にわたり社会につくしてきた老人を敬愛し、長寿を祝う。

〔秋分の日〕 秋分日

祖先をうやまい、なくなった人々をしのぶ。

〔体育の日〕 十月十日

スポーツにしたりし、健康な心身をつちかう。

〔文化の日〕 十一月三日

自由と平和を愛し、文化をすすめる。

〔勤労感謝の日〕 十一月二十三日

勤労をたつとび、生産を祝い、国民たがいに

感謝しあう。

〔天皇御誕生日〕 十二月二十三日

天皇の御誕生日を祝う。

藤井実応大僧正

（養老町の文化財八十七号）

浄土門主（もんす）浄土宗総本山知恩院第八十五

世門跡の藤井実応貌下が老衰のため平成四壬申閏年九月三日遷化されました。享年九十五歳でした。

慈に貌下の略歴に逸話を混えて御生前を偲ばさせ

て頂きます。

師は明治三十一年十月二十三日養老郡笠郷村船附で父藤井宗市母フサの長男として誕生なされ船附小学校を出られ少年時代は名古屋市松坂屋の前身という呉服店へ丁稚奉公をなされました。番頭さんについて反物の販売に行かれ金儲けのため余りの駆け引き商売の実態を経験親のしつけ「ウソをつくな」に反するので大変心を痛められ商人になるのをやめられました。そして向学の念に燃えておられた師は大正四年四月京都東山中学へ入学されました。当時の中学校進学者は村で数人お大尽の息子位で今でいうなら高校進学出来ない子供達位の割合です。家は農家の水呑み百姓とても学資は送って貰えず、今でいうアルバイト牛乳配達や新聞配り等しての苦学力行努力をされました。大正八年三月「ハハキトク」の電報を受取り辛じて終列車に間に合い大垣に着かれ、三里の道程を歩いて漸く実家へつかれたのは明方近く頃で

した。然も母は亡くなられていました。

朝になり父が昨日夕方おふさが植えていったチシヤだと畑の野菜を指して説明されたそうです。

私は親鸞聖人得度の時の御歌明日ありと思う心の仇桜夜半に嵐の吹かぬものかはを思い出します。恐らく若い藤井師が現世の諸行無常なることを教わり身に応え転機になったものと思います。

同年八月には当村生蓮寺川瀬了道上人のお世話で海津郡南濃町行基寺（高須藩主Ⅱ御三家尾張候の一族Ⅱの菩提寺）山田淳応住職につき得度なされました。

当地方は浄土真宗大谷派寺院が多い所で藤井宗市様は師匠寺尊光寺の熱心な壇信徒でしたので得度の前二人揃って旦那寺を訪門され老僧に指導を受けられました。

「重吉（本名）が浄土宗の僧侶になりたいと申しますが当地方は殆んどが浄土真宗ですがよろしいでしょうか」と相談なされ、真宗寺は世襲だが禅宗や浄

土宗では本人の努力勉強次第で上にあがれるからよろしいとの御返事だった由。

最近このお話をきき矢張り昔の人は道スジを通しておられるなど感心しました。

知恩院門跡就任帰郷の節は先づ先祖のお墓に詣られてから実家に立寄られてすぐ行基寺の得度師匠のお墓に報告なされました。

大正十年十二月山下現有大僧正より増上寺において傳宗傳戒

大正十四年三月宗教大学（大正大学の前身）

卒業

同年四月 浄土宗内地留学生

浄土宗の僧侶になるには前修行をしてから本山に二十一日間こもって修行をやりま^{ギョウ}す。これを伽行と申します。その間一步も山内からは出られま

せん。山下大僧正は昭和九年百三歳で亡くなられましたが、知恩院門跡浄土宗の管長を三十三年間もおやりになった高僧ですが、最後の日に御伝法

を受けられた時「私はみなさんを指導する力のある者ではありません。ただ法然上人のみ教えをお取次させて頂いたにすぎません。あなた方はこれから自らがお念佛を申し人様にもお念佛を伝えなさる菩薩方であられるから最後に拝ましてもらいます」と云われお十念（十べんのお念仏）をなさいました。

その時管長は九十歳位私共は二十歳位の小僧ですから常不輕菩薩（お釈迦さまの弟子、一切の人を拝まれた方）であらせられると本当に感激なされました。なんと素晴らしい出会いでしょう。仏教では特に善知識を選べと申されます。藤井師はよき師に恵まれました。よき友に恵まれて私は幸せだったとよく申されました。

大正十四年七月長野教区諏訪組紫雲寺住職拝命
寺院運営布教活動で理想と現実に悩まれて昭和二年紫雲寺住職辞任

この後は在家活動の中で昭和八年～昭和十五年浄土宗立布教講習所主事兼講師 昭和十八年豊橋住友

青年学校校長又東海高校講師旧国鉄名古屋鉄道教習所や東京鉄道教習所講師等しながら布教活動が続けられた。

師は温厚篤実物しずかな方で慎重実行型な方で長く椎尾弁匡大僧正（名古屋建中寺住職増上寺法主）に師事随行されて人格が完成されました。若い時には津島の中野善英上人等と共生運動トモイキもなされ永平寺で一ヶ月座禅を組まれたり当時流行した西式健康法もされた。

昭和三十五年五月岐阜教区高須組円心寺住職
拝命

昭和四十五年六月三河教区岡北組大樹寺住職
拝命（松平徳川將軍家菩提寺）

昭和五十三年七月浄土宗大本山増上寺法主拝受
昭和五十三年十月大僧正拝受

藤井師はハガキ通信として毎月簡単な近況と共に法語を印刷なされ有縁の方々に出す事を昭和二十五年から始められ随分長く続けられました。が知

恩院に行かれてからは止められました。ハガキ伝道の先達ともいえましょう。又特に宗祖法然上人高祖善導大師については造詣が深く信仰上の主な著作も「拝む生活」「生死を超えて」「現代を生きる法然上人の宗教」「法然上人と一枚起請文」等十数冊に及んでいます。

『日常生活において阿弥陀佛の本願を信じてただ南無阿弥陀仏と申すばかりにて、阿弥陀佛の御本願により只今からみ仏の光明摂化を頂き、住みにくいこの世も、安らかに力強く生きて行く事ができる。そして当来必ずみ仏の浄土に生き往くことが出来る』

この宗門の教え法然上人の御遺訓「人の為には身、命、財を捨てても法を説きなさい」のみ教えを身につけて実践なされ、念仏はいつでも申される どこでも申される 誰でも申され、万人救済―誰でも救われる法門である。と信じられ「自信教人信」―自ら信じ人を教えて信ぜしむる―を実行なされた方でした。これを貌下の語録やお歌から伺わせて頂きました。

す。

み仏を常に念ずる者は み仏常に照したもう
み光我身をとおして輝き ありがたい心が次々と湧いてくる 人は互に相和し 拝み合う
拝みの中にくらす 朝は仏と共に起き 夜は仏を抱いて眠る立居起臥、仏と離れざる 明るいめざめ 正しい進み 和やかな生活

(拝むところより)

紫雲寺に建立の歌碑

声澄みて松吹く風も南無阿弥陀

あみだほとけと吹き渡るかな

昭和六十年頃の作

人の世の憂き悲しみの谷底を

静かに照らす弥陀の月かげ

昭和五十七年七月知恩院第八十五世拝受

平成元年四月再任決定(任期七年)五十九、六

十の二年間全日本仏教会会長に就任

平成四年五月全国国宝重要文化財所有者連盟副

理事長就任

次に私なりの思い出を述べてみます。奥様がいつか家のごぜんさま（藤井師のこと）は姿勢がよくて緋の衣を召され前の方に座られるのでめだつと話されましたが、故郷での亡父の五十回忌を始め年回法要には御繁務中必ず参詣され師匠寺の読経中は身動き一つされずに数珠を手に正座して詣っておられ口をモグモグされておりお念仏を申されていたのだと思います。帰られた後には御自分が読経供養なされました。

又或る時に長生きの秘訣をお尋ねしたら、三項目程の中に『吸う息より吐く息を長くしなさい。数えて呼吸してみなさい。心がけて訓練すると倍位迄長くなりますよ』と教えて下さいました。成程歌手でもお坊様でも吐く時は長く息を出すもので肺活量も増え健康につながると了解できました。

大樹寺のとき奥様辰子様がごぜんさまは経済観念がなくて困りますわと愚痴られた事がありました。

在任中重文の山門の解体次に多宝塔の大修理等手掛けられ今度は大屋根葺替えをするのだが東京へ替る事になってしまったと申されました。重文修理等は補助金だけでは出来ない大事業なので文化庁や愛知県庁岡崎市役所議会壇信徒等各方面を東奔西走なされ大きな仕事に精魂を傾けて居られたので家庭面ではサワラン哉と思いました。知恩院では錠で別居生活となりましたが。

毎年現代名僧筆墨展が岐阜高島屋や名古屋のデパートで開かれ出掛けても目録には出ているが條幅でも色紙でも初日に即売されて仕舞うのか或は出品点数が少ないのか中京地方では有名人であり欲しい方が多いのか分からないが見当らなかった。又機会があつて私が頂いたものに数ある法語色紙御染筆の中から無作為に頂いたものですが「正受」と書かれたのが多かったのは何故か不思議に思っています。

今年四月には五年がかりの昭和平成解体大修理の

三門が修復落慶法要に導師を元気に努められ五月の御忌法会が最後となり七月頃より御不調で入院されたとの事。

藤井師晩年は人格円満人徳の塊りみたいで念仏弘通聖教宣布に精進なさいました。貌下最後の御遺墨（別掲）を見てもその心意気が伺われます。

十月二日知恩院での本葬には各宗門の方々始め五



藤井法主御夫妻と共に芝増上寺にて

今現在 説法

知恩院
明善堂

つとね下り錦筆

千人が参集大きな本堂はお別れを惜む方々で溢れました。弔辞には宮沢喜一内閣総理大臣（奥野誠亮代議士代読）山田恵諦全日本仏教会会長（比叡山天台座主、藤井師より三才年長）外多数ありました。参列者の中に今春選抜高校野球に出場し東山施風を巻き起した東山高校硬式野球部員が学校を代表して公式戦のユニホーム姿でお別れに来てお

り、胸の「東山」の校名は母校先輩に当る藤井門主の揮毫であり、知恩院吉永講の御詠歌斉唱の方々と共にひときわ目をひきました。

二男藤井正雄師は大正大学教授でありNHKテレビ電話相談宗教儀式の解答者として出られ著書もありこの道を進んで居られます。

以上お人柄の一端でも知って頂けたらと思ひ大変長くなりましたが藤井貌下を偲びつつ追憶させて頂きました。

合掌

(H 4・12・27 記)

人生の指標

昔の言葉に「子供叱るな我が来た道 老いを笑うな行く道なもの」といわれています。

今船附で活躍中の皆様方も高令化社会は益々進みいつかはお年寄となるのだから、参考迄に先賢の教えから心構えを集めて記してみます。

日々の糧 (一)

人間五十の声をきくと「娑婆^{シャバ}はこんなもの」と安価^{タネ}なあきらめの座につく。これ老衰^{モト}の原、早死の因 五十になっても 七十超えても、すべからく青年の如き夢をもち、希望にもえ、

幼児の如き空想をも抱^{イダ}け。

信念に生き、念願^{オコ}を発し、使命を感じて

勉強もこれから、事業も今から、

せめて百までは生きよう……と希^{ネガ}え。

但し 今晚死んでも笑うて死ねる―信仰による肚^{ハラ}のドン底をすえてからのこと。

これ健康の要素、長寿の妙術。

日々の糧 (二)

人が見ていなくても 黙々と働け

認めて呉れなくても 黙々と働け

糞正直と嗤^{ワラ}われども

馬鹿だと貶^{ケナ}されても

ただ黙々と 全身全霊を

打ち込んで黙々と働け

かくて断々乎として進むとき

相当の事ができるものだ

案外疲れも少ないものだ

思わぬ援けもあるものだ

次第に興味も湧くものだ

論より証拠だ　ところみよ

果してどうか　やってみよ

食前のことば

我今幸に仏祖の加護と衆生の恩恵により、

この美わしき　食を受く。

謹みて食の由来を尋ねて味の濃淡を問はず、

謹みて食の功德を念じて品の多少を忖はず。

戴きます。

食後のことば

我今此の美わしき食を終りて

心豊に力　身に満つ。

願わくば此の心身を捧げて己が業にいそしみ、

誓って四恩に報い奉らん。

ごちそうさま。

老人六歌仙

次に誰でもが出合う筈の老苦を面白く示した、

武儀郡出身の名僧仙厓和尚（一七五一―一八三七）

の「老人六歌仙」の歌を照会します。

皺がよる、　はくろができる　腰まがる

頭ははげる　髯白くなる

手がふるう　足はひよろつく　歯はぬける

耳は聞えず　目はうとくなる

身に添うは頭巾　襟巻　杖　眼鏡

たんば温石　しびん　孫の手

聞きたがる　死にともながる　淋しがる

でしやばりたがる　世話やきたがる

くどくなる　気短かになる　愚痴になる

心が曲がる　慾深くなる

またしても同じ話に孫はめる

達者自慢に人はいやがる

或る人が作り直した歌。面白くないがこれも事実

である。

皺がより　はくろもできた　はげあたま

けれども　腰はしやんとしている

手がふるい　足はひよろつき　齒はないが

耳も聞える　目もみえるなり

目はうとく　耳とおくなり　忘れがち

されどたつしやで歩けるはよし

身に添うは頭巾　襟巻　杖　眼鏡

本も離さず　よめるうれしき

聞きたがり　死にともないが　今日一日ヒトヒ

すこやかなるは　ありがたきかな

またしても　同じ話に孫ほめて

孫に先祖の心伝えん

くどくなり　気短かになり　愚痴出るも

南無阿弥陀佛申すうれしき

せめて私達この替え歌位を人生航路の最後にした

いものと健康第一、よく働いて美しく老いたいもの

とあります。

時代環境は変わっていても大東亜戦争末期一人の特

攻隊員の辞世の句の「散る桜　残る桜も　散る桜」

又親鸞聖人御得度の際の有名な御歌「明日ありと

思う心のあださくら　夜半ヨワにあらしの吹かぬもの

かは」これ等も真理をうがつたものです。

行誠上人（一八〇六―一八八八）のお歌にも

あわれとて見送る人も　やがてまた

あわれと人におくらるる身ぞ

音もせで　よせくるものは歎きても

返らぬ老の波にぞありけり

老の戒め

一、紅葉は春の花よりも　更に趣オモムキあり

若さより老いて後　人は円熟す　晩成すべし

二、昔日ムカシを自慢シマンすべからず

人の価値は今日コンニチに定まる　励むべし

三、余命少なき一日は 若き日の十倍の価あり^{アタイ}

慎しむべし

四、世間に陰徳の種子まけば^{タネ}

家門に陽報の花咲かん 努むべし

五、いまだ死を免れたるものはあらず

迎えのある時は 安んじて旅立つべし

村の変遷

牧田川流路については郷土史研究者によると時村から多良一之瀬を経て牧田広瀬橋迄は現流とあまり変わらないが、大昔は養老山脈の麓を南下し沢田上方^{ウワガタ}竜泉寺明徳小倉津屋駒野前から今尾下で^{シモ}揖斐川に合流していたらしい。

現在本村から移住した小畑照男氏の沢田下町付近田圃下からの砂利採取事業や勢至^{セイシ}の鉄座の繁栄や源義朝が平治の乱に敗れ源氏橋から五人もが柴で覆っ

た船に乗り知多半島の内海^{ウツミ}へのがれた話等で証明されるが、永禄九年（一五六六）の大洪水で河状を変え五日市から高田中学辺りを侵して高田の北側を高田橋付近へ新流を作り牧田川南流になった。（多芸橋^{タギ}を通る現牧田川を北流と呼んだが水量は少なかった。）徳永法印寿昌^{ヒサマサ}が慶長五年（一六〇〇）頃烏江村前迄新牧田川を掘削して抗瀬川と合流させたとか、兎も角その後も度々洪水あり牧田川破堤の記録は続く。江戸時代には水運も盛となり烏江栗笠船附湊が発展して行ったと思われる。それについて村のうつりかわりについて目を向けてみよう。

鼠ヶ森地区の提防両側は竹藪多く改修前後の家並道路は笠郷村地図の様に思われる。

船附栗笠中間南側に諸式小屋（水防倉庫、一時内務省木曾川上流改修事務所）があり、隣に隔離^{セキリ}病舎^{ゴヤ}があって通るのに気持の悪い所だった。隔離病舎は大正十年頃島田の高田橋南坂の西堤防下へ

移されていった。

昭和七年頃牧田川上流高田北迄堤防拡幅補強工事が行われ烏江船附等で一部移転され、馬線といって馬でトロツコ数台をひかせて土砂運搬をなし、若者は土木作業で金儲けに出た。

日本の歴史の流れを見ると先に述べた封建制も明治維新を迎え、田畑の売買や田畑勝手作りも出来るようにはなったが、岩倉具視は憲法を發布し帝国議會を召集して、天皇中心の地主制を強め地租改正し、時代は日清日露更に世界大戦と進み、米価は高騰して地主は太って大地主となり自作農は転落して小作人そして都市ルンペン労働者となり、反面大地主は働かないで反当三俵の小作米をとり茶屋遊びに浮身をやつす様になっていた。

又ロシヤの革命に刺激され大正十五年三月に労働農民党が結成され日本農民組合も創立された。

政府もどん百姓と虫けらの様に輕蔑されていた農民達の一揆暴動を極度に警戒したので、地主的土地所

有者の廃絶する風潮に関心を持ち氣勢をあげたるも当地方では組織を固めざる内に支那事變が起り次で大東亜戦争に嫌応なしに進展していった。

昭和二十年八月十五日遂に我国は敗戦の憂目を見アメリカによりマツカーサー元師を首班とする進駐軍が日本を管理する事となり、憲法制定財閥解体等諸制度改廢する中昭和二十三年十一月には農民の渴望せる農地解放となり小作人は其の耕作せる農地は全部一反八百乃至壹千円にて小作人の手に入り全部自作農となり戦前の地主は殆んど壊滅した。前の新円切替時に預金封鎖もとられた。

又この農地改革で在村地主の保有地は六反と制限不在地主には地を持つ事を禁じ、高率な物納小作料も金納化することになった。この後二十六年八月農業委員会が発足して今日に至り水呑百姓の私達も自称中流階級の生活と変った。

何と云っても一大変革をもたらしたのは国道二五八線の開通からだ。

以前は湊の関係で町並中心、地区別には鼠ヶ森

(村内西ノ割宮辺) 港(村内北ノ割) 紺屋敷(村内南ノ割) 等で形成され栄えたが二度に亘る牧田川堤防拡張工事で移転又移転で様相が変わってしまった。

昭和七年ゝ九年頃堤防両側にあった鼠ヶ森集落は八幡神社中心に南へ移転第二回昭和四十八年ゝ五十年頃には鼠ヶ森は再度移転港北町は元屋敷北米野の堤防を削り養老町が宅地造成して移転し大体今の家並が作られた。

六羽野では村の南へ移住したり分家を建てたりして次第に南方へ発展して行った。

伊勢湾台風(一九五九)後は国の土地改良事業により土地改良区を作り耕地整理が始った。

船附分でも大野お宮下から角田松下茶木原へ通る学校新道以南は下田^{シモタ}といつて降雨浸水等(土地低き為)で米は満足に取れず東沼(菖蒲池^{ショウブイケ})中沼西沼等堀田附近は名の通り田と沼が交互に並んでいた水郷地帯でクリーク状で小舟を使って収穫等なし、長じ

よれんで堀潰れのヘドロをあげどべすきで田面にひろげ境はめんつけをして田植をした。これが肥料だ。

先づ大場新田を堀削して浚渫船^{シユウセツセン}を細池に入れ以上の堀田の干拓から始まった。

田圃は美田に様替りし現在の様に田圃の農道も縦横に整備され用悪水路も完備大きいのは西八間と東八間栗笠^{ハチケ}からの用水路も作り上げ通学道路や村々の区画も変った。残務整理や登記作業も昭和四十八年に完了した。(勿論排水機のお蔭もある) 細池の北には東部中学校も移転広幡上多度笠郷池辺の子供達が通っている。(五十五年から)

中起にある墓地は第一回五十一年第二回六十二年に整備された。

昭和四十六年大野から下笠関ヶ原へ抜かれる農免道路が出来、四十七年には国道も南北に通り道路側には会社や事業所住居等も建っていった。

国道筋には二、三個所数軒の建売分譲住宅が出き始め段々今の団地となっていた。

一番増えたのは喫茶店、パチンコ店だった。又最近ではカラオケや倉庫も大分建っていた。

村の中央提防上に大きな火の見櫓がそびえている。下の小屋は消防団の消防器具が納めてある。

昔は朝夕寺が鐘を搗き時を知らせていたが今はこの火の見で正午の時報がならされている。

有事の場合夫々打鐘とサイレン吹鳴の方法規則がきめてある。

又二、三の小字には半鐘をつるした火の見もある。

あとがき

なるべく正確なものを伝えたいと心掛けてきましたが、間違った事項もある事と存じます。お気付の点御教導頂ければ幸甚です。

途中には本題とは余り関係のない家庭における日用宝典みたいな項目を集めてみました。何か一つでも参考にして頂けたらいいなと思っています。以上色々綴ってまいりましたが、多少でも昔を思い出し乍ら今後の心の糧にして頂けたらと願いつつ筆を置きます。

未熟な私の郷土誌印刷に当り、旧知の福井新男氏に種々御相談致しました処、心良く御引受下さいまして格段のご尽力とご協力を賜って刊行の運びとなりました事をここに銘記して感謝の意を表します。

尊光寺児玉様、山口一易先生始めお名前は省略致しますが多数の方々に何かと大変御協力を頂きました。

ほんとうに有難うございました。

(完)

船附区の人口と戸数

人口 一、六三八人世帯数 四〇一世帯

男 八三五人

女 八〇三人

(平成四年十月一日現在 住民基本台帳)

森	ケ	狛	5 9
敷	港		3 7
敷	屋	中	2 0
敷	屋	紺	5 8
野	屋	寺	3 9
敷	羽	六	6 5
東	屋	元	3 0
北	前	村	3 6
代	前	村	1 1
田	割	中	3 3
		大	1 3
計			4 0 1

ふるさといまむかし

船着村史稿

平成五年十一月一日印刷

平成五年十一月二十三日発行

編集人著者 宮島貞雄

岐阜県養老郡養老町
船附二八二番地

☎ 〇五八四〇三五―二七七―

印刷所 宝印刷

大垣市浅中三丁目八二―六

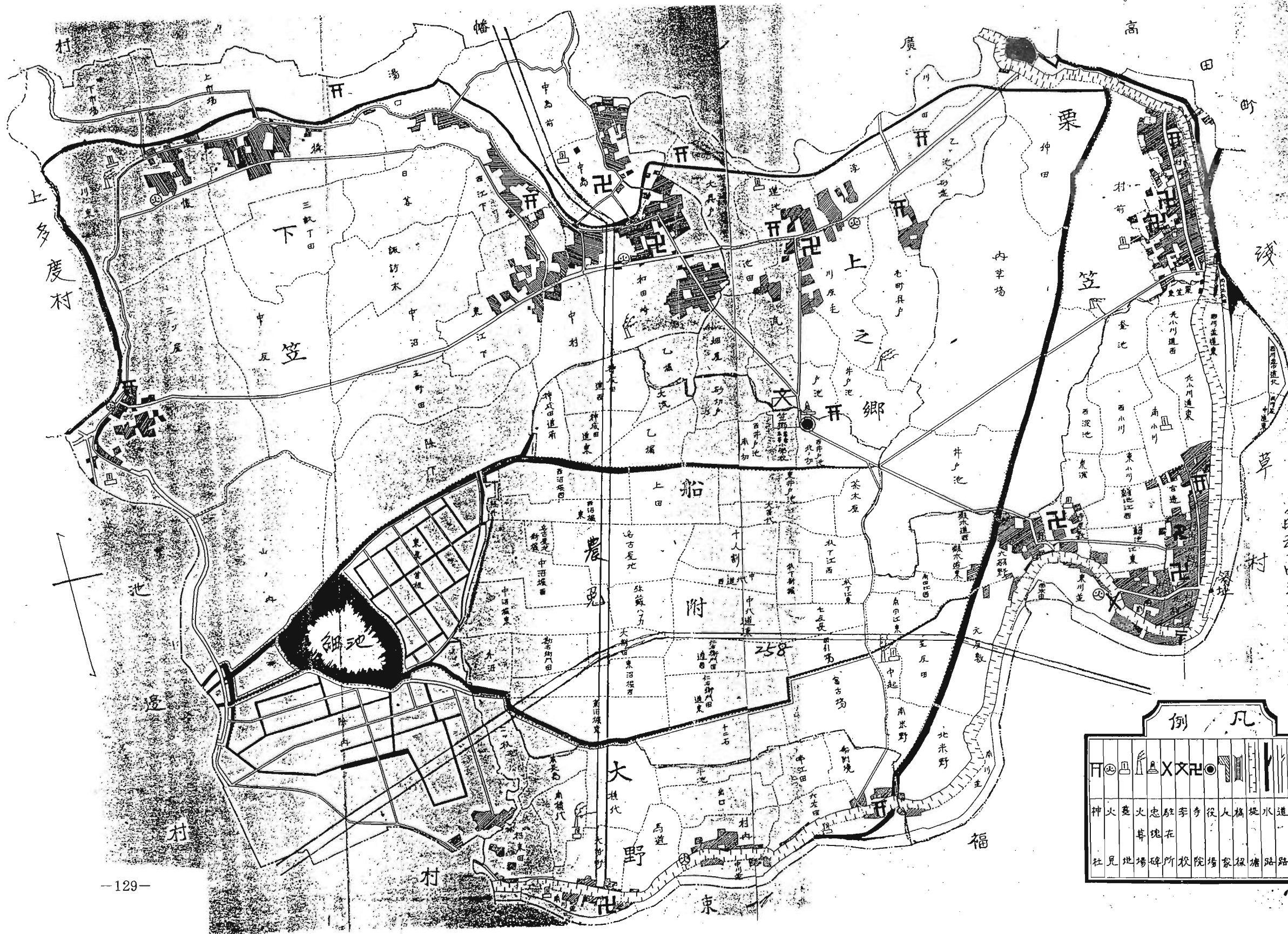
☎ 〇五八四〇八九―六二六―

後援 養老町船附区

区長 藤井進一郎

岐阜縣養老郡笠郷村全畧圖

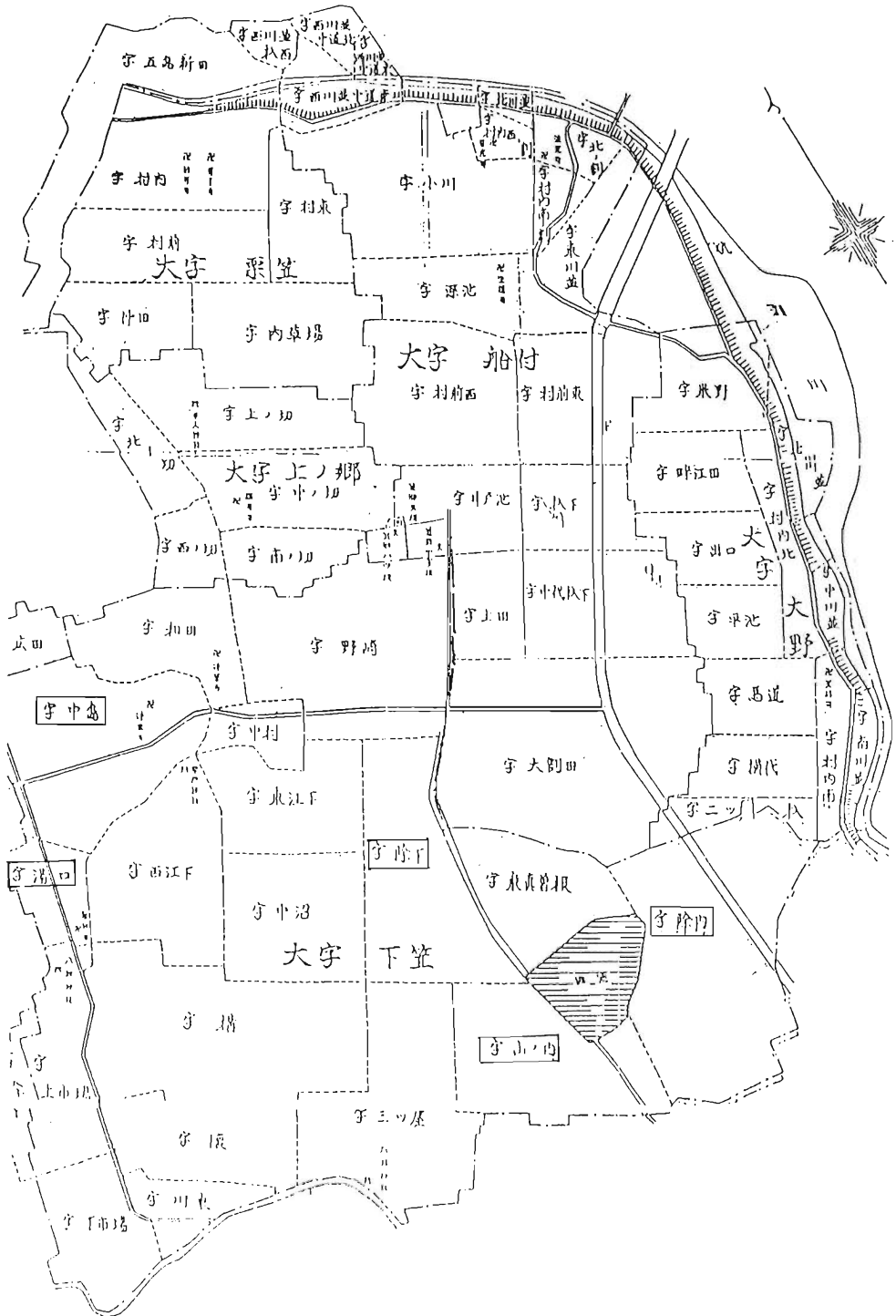
縮尺 八十分之一
(昭和十四年六月製圖)



例 凡

神	火	墓	火	忠	駐	宇	寺	役	人	橋	堤	水	道	大	縣
社	見	地	場	碑	所	校	院	場	家	探	塘	路	路	界	界

笠郷全略図

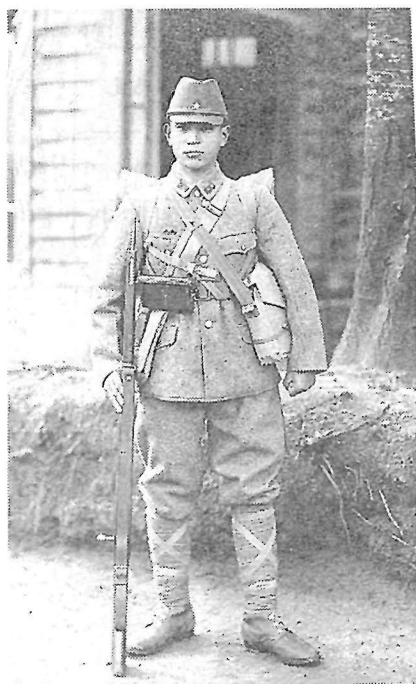




整地碑（自治会館前）（44頁）



宗門改帳（105頁）
安田法覚寺・尊光寺



昭和13年出征直前の著者（52頁）



テラー運搬車（14頁）

参 考

金 錢 換 算 表

金一兩 〓 銅四貫 〓 三、八六〇文	金一兩 〓 銀六十匁	金一兩 〓 十六朱	金一兩 〓 四分
五〇〇文	一匁 十分	一朱 六錢二厘五毛	一分 二十五錢
十二錢五厘	一分 十厘六六六	二朱 銀七匁五分	一分 (歩) 四朱

明和6 丑年 1769年							明和5 子年 1768年							明和4 亥年 西曆1767年						
米一升	銀一匁	金一兩	銅一〇〇文	銀一匁	金一步	金一兩	米一升	銀一匁	金一兩	銅一〇〇文	銀一匁	金一步	金一兩	米一升	銀一匁	金一兩	銅一〇〇文	銀一匁	金一步	金一兩
代	銅	銅	米	米	米	米	代	銅	銅	米	米	米	米	代	銅	銅	米	米	米	米
丁只	丁						丁只	丁						丁只	但丁					
四四文〇八三厘	四五文九分二厘	七二文	四貫五〇〇文	二升一合七二二	一升七合七七	二斗四升五合	四九文一分七七一	四五文九分八二	六七文二分	四貫二〇〇文	一升九合六勺二三八	一升三合六勺六	二斗五升	四六文四分	四八文二分七厘	六七文二分	四貫文	二升七合一四	一升四合五勺	二斗一升七合五勺

安永元辰年 1772年							明和8卯年 1771年						明和7寅年 1770年					
金一両	金一步	銀一匁	銅一〇〇文	金一両	銀一匁	米一升	金一両	金一步	銀一匁	銅一〇〇文	金一両	銀一匁	金一両	金一步	銀一匁	銅一〇〇文	金一両	銀一匁
米	米	米	米	米	米	米	米	米	米	米	米	米	米	米	米	米	米	米
丁	丁	丁	丁	丁	丁	丁	但	只	只	只	只	只	丁	丁	丁	丁	丁	丁
四二文三分〇厘七六	四四文〇六厘七六	八三文二分六厘	八六文六分六厘	五貫二〇〇文	二升二合六勺九才二三	一升九合六勺六六	二斗九升五合	一石一斗八升	二斗四升二合五勺	一升六合一勺六六	一升八合八勺八五	五貫一五〇文	五貫一五〇文	八〇文	四貫八〇〇文	一升九合六勺六	一升五合三勺三三	二斗二升

安永4未年 1775年					安永3午年 1774年							安永2巳年 1773年						
金一両	銅一〇〇文	銀一匁	金一步	金一両	有利米	米一升	銀一匁	金一両	銅一〇〇文	銀一匁	金一步	金一両	金一步	銀一匁	銅一〇〇文	金一両	銀一匁	金一両
銅	米	米	米	米	代	銅	銅	米	米	米	米	銀	銅	銅	銅	米	米	米
五貫一〇〇文	二升一合七勺六才五	一升八合五勺	二斗七升七合五勺	一石一斗一升	只	丁	丁	只	只	只	只	只	只	只	只	只	只	只
					一石四斗六升〇五勺	三九文三分七厘	八〇文	五貫文	二升五合四勺	二升一合一勺六八八	三斗一升七合五勺	一石二斗七升	四〇文〇三分二厘	八一文	五貫二五〇文	二升三合八勺〇九五	二升〇合八勺三才	三斗一升二合五勺

安永 6 酉年 1777 年							安永 5 申年 1776 年							安永 4 未年 1775 年				
申 利 有 合	米 一 升	銀 一 匁	金 一 兩	銅 一 〇 〇 文	銀 一 匁	金 一 步	金 一 兩	有 利 米	米 一 升	銀 一 匁	金 一 兩	銅 一 〇 〇 文	銀 一 匁	金 一 步	金 一 兩	有 利 米	米 一 升	銀 一 匁
	代 只	銅	銅	米	米	米	米		代 只	銅	銅	米	米	米	米		代 只	銅
一石之元利 一石三斗六升三合四	四九文五分六厘	九三文二分	五貫七〇〇文	二升〇一勺七五	一升九合一勺六六	二斗八升七合五勺	一石一斗五升	一石〇〇四合九勺五才	五五文四分四厘	八四文八分	五貫三〇〇文	一升八合三勺〇二	一升六合一勺六六	二斗四升二合五勺	九斗七升	一石〇〇五合一勺一六	但シ 四六文九分四厘六	八一文六分

安永 9 子年 1780 年								安永 8 亥年 1779 年								安永 7 戌年
利有米	銀一匁	金一步	金一兩	銅一〇〇文	銀一匁	金一步	金一兩	有利米	銀一匁	金一步	金一兩	銅一〇〇文	銀一匁	金一步	金一兩	水記 畑田入録 半皆りな 作無にし て
	銅	銅	銅	米	米	米	米		銅	銅	銅	米	米	米	米	
一石三斗三升七合	一〇〇文	一貫五七二文	六貫三〇〇文	二升三合七勺	二升三合五勺	三斗五升七合五勺	一石四斗三升	一石四斗一升四合五勺	九八文四分	一貫五三六文	六貫一五〇文	二升	二升〇五勺	三斗〇七合五勺	一石二斗三升	

天明 3 卯年 1783 年									天明 2 寅年 1782 年									天明元年
利有米	米一升	銀一匁	金一步	金一兩	銅一〇〇文	銀一匁	金一步	金一兩	利有米	米一升	銀一匁	金一步	金一兩	銅一〇〇文	銀一匁	金一步	金一兩	記録なし 大雨洪水 田皆無
	代	銅	銅	銅	米	米	米	米		代	銅	銅	銅	米	米	米	米	
一石〇一升二合二三	八四文七分	九六文	一貫五〇〇文	六貫文	一升一合三三	一升一合三三	一斗七升	六斗八升	八斗〇〇九勺	七五文六分三	九六文	一貫五一二文	六貫四八文	一升二合六九四	一升二合八勺	一斗九升二合	七斗六升八合	

天明 6 午年 1786 年									天明 5 巳年 1785 年									天明 4 年
利有米	米一升	銀一匁	金一步	金一兩	銅一〇〇文	銀一匁	金一步	金一兩	銀七匁五分	銀一匁	金一步	金一兩	銅一〇〇文	銀一匁	銀七匁五分	金一步	金一兩	記録なし 天明三年大飢饉
元米	代	銅	銅	銅	米	米	米	米		銅	銅	銅	米	米	米	米	米	
六斗一升九合〇四	一一四文六分二	九二文八分	一貫四四八文	五貫八〇〇文	八合七勺二四五	八合四勺三三	一斗二升六合五勺	五斗〇六合	七七二文	九九文二分	一貫五四八文	六貫二〇〇文	一升五合一勺六	一升五合六勺七	一斗一升七合五勺	二斗三升五合	九斗四升	

米 価 格 表

西曆一七八七年	天明七末年	二朱三匁
一七八八年	八申年	二朱三匁
一七八九年	寛政元酉年	二朱二匁
一七九〇年	二戌年	二朱
一七九一年	三亥年	二朱一匁
一七九二年	四子年	二朱一匁
一七九三年	五丑年	二朱一匁
一七九四年	六寅年	二朱二匁
一七九五年	七卯年	大雨 二朱五匁
一七九六年	八辰年	二朱四匁
一七九七年	九巳年	二朱三匁
一七九八年	十年年	二朱一匁
一七九九年	十一未年	二朱一匁
一八〇〇年	十二申年	大雨洪水 二朱三匁
一八〇一年	享和元酉年	大雨洪水 五朱四匁
一八〇二年	二戌年	二朱三匁
一八〇三年	三亥年	二朱二匁
一八〇四年	文化元子年	二朱二匁

西曆一八〇五年 文化二丑年

一八〇六年	三寅年	二朱
一八〇七年	四卯年	二朱一匁
一八〇八年	五辰年	大雨水入り 三朱二匁
一八〇九年	六巳年	銀十二匁 二朱一匁
一八一〇年	七午年	三朱二匁
一八一一年	八未年	一朱四匁
一八一二年	九申年	二朱一匁
一八一三年	十酉年	二朱一匁
一八一四年	十一戌年	大雨不作 三朱二匁
一八一五年	十二亥年	二朱二匁
一八一六年	十三子年	二朱二匁
一八一七年	十四丑年	不作 三朱一匁
一八一八年	文政元寅年	二朱三匁
一八一九年	二卯年	二朱二匁
一八二〇年	三辰年	二朱
一八二一年	四巳年	二朱〇五匁
一八二二年	五午年	二朱一匁
一八二三年	六未年	二朱一匁
一八二四年	七申年	三朱二匁
一八二五年	八酉年	大雨洪水 四朱一匁

西曆	一八二六年	文政九戌年	二朱三匁
	一八二七年	十亥年	二朱二匁
	一八二八年	十一子年	三朱一匁
	一八二九年	十二丑年	越前大地震 五朱三匁
	一八三〇年	天保元寅年	江戸大火事 五朱五匁
	一八三一年	二卯年	総人口二七二〇万人 四朱三匁
	一八三二年	三辰年	全国飢饉 四朱三匁
	一八三三年	四巳年	五朱四匁
	一八三四年	五午年	四朱
	一八三五年	六未年	四朱三匁
	一八三六年	七申年	五朱三匁
	一八三七年	八酉年	諸国飢饉 九朱二匁
	一八三八年	九戌年	四朱二匁
	一八三九年	十亥年	佐渡百姓騒動 五朱二匁
	一八四〇年	十一子年	五朱三匁
	一八四一年	十二丑年	四朱二匁
	一八四二年	十三寅年	四朱三匁
	一八四三年	十四卯年	五朱二匁
	一八四四年	弘化元辰年	四朱
	一八四五年	二巳年	四朱三匁
	一八四六年	三午年	米騒動 八朱

西曆	一八四七年	弘化四未年	五朱四匁
	一八四八年	嘉永元申年	五朱二匁
	一八四九年	二酉年	五朱二匁
	一八五〇年	三戌年	大雨洪水 十朱三匁
	一八五一年	四亥年	七朱二匁
	一八五二年	五子年	七朱一匁
	一八五三年	六丑年	七朱一匁
	一八五四年	安政元寅年	七朱二匁
	一八五五年	二卯年	六朱一匁
	一八五六年	三辰年	四朱二匁
	一八五七年	四巳年	五朱一匁
	一八五八年	五午年	八朱一匁
	一八五九年	六未年	八朱三匁
	一八六〇年	万延元申年	十朱三匁
	一八六一年	文久元酉年	十二朱三匁
	一八六二年	二戌年	十朱二匁
	一八六三年	三亥年	九朱
	一八六四年	元治元子年	十二朱二匁
	一八六五年	慶応元丑年	十六朱二十五匁
	一八六六年	二寅年	十六朱五十七匁

西曆	一八六七年	慶応三卯年	十六朱二十八匁
	孝明天皇崩御（三十六才）慶応二・十二・二五		
	明治天皇	慶応三・一・九銭祚	四・九・八明治と改元
	一八六八年	明治元辰年	四分十一朱
	一八六九年	二巳年	三兩七朱
	一八七〇年	三年年	四分十四朱
	一八七一年	四未年	四分二朱
	一八七二年	五申年	十三朱
	一八七三年	六酉年	地租改正 金一兩二十錢
	一八七四年	七戌年	一兩八十七錢
	一八七五年	八亥年	二兩〇五錢
	一八七六年	九子年	一兩十八錢
	一八七七年	十丑年	西南の役 一兩三十四錢
	一八七八年	十一寅年	一兩九十二錢
	一八七九年	十二卯年	二兩六十四錢
	一八八〇年	十三辰年	四兩八十錢
	一八八一年	十四巳年	三兩二十八錢
	一八八二年	十五午年	日本銀行創立 二兩〇八錢
	一八八三年	十六未年	一兩二十五錢
	一八八四年	十七申年	一兩八十四錢
	一八八五年	十八酉年	一兩七十三錢
	一八八六年	十九戌年	一兩五十五錢

西曆	一八八七年	明治二十亥年	一兩四十六錢
	一八八八年	二十子年	一兩四十二錢
	一八八九年	二十丑年	二兩
	一八九〇年	二十三寅年	二兩
	一八九一年	二十四卯年	三兩六十四錢
	一八九二年	二十五辰年	二兩二十八錢
	一八九三年	二十六巳年	三兩六十六錢
	一八九四年	二十七午年	三兩六十六錢
	一八九五年	二十八未年	四兩
	一八九六年	二十九申年	五兩七十二錢
	一八九七年	三十酉年	四兩十六錢
	一八九八年	三十一戌年	三兩二十八錢
	一八九九年	三十二亥年	四兩
	一九〇〇年	三十三子年	三兩七十六錢
	一九〇一年	三十四丑年	四兩七十六錢
	一九〇二年	三十五寅年	四兩九十六錢
	一九〇三年	三十六卯年	四兩三十六錢
	一九〇四年	三十七辰年	四兩三十六錢
	一九〇五年	三十八巳年	五兩二十八錢
	一九〇六年	三十九午年	五兩二十八錢
	一九〇七年	四十未年	四兩七十二錢
	一九〇八年	四十一申年	四兩九十二錢

西曆	明治	米検査制度
一九〇九年	明治四十二酉年	四円
一九一〇年	四十三戌年	五円三十六銭
一九一一年	四十四亥年	六円十六銭
明治天皇崩御（六十一才）	明治四五・七・三〇	
一九一二年	大正 元 子年	八円二十二銭
一九一三年	二 丑年	八円三十二銭
一九一四年	三 寅年	七円二十八銭
一九一五年	四 卯年	四円三十七銭
一九一六年	五 辰年	五円二十五銭
一九一七年	六 巳年	六円
一九一八年	七 午年	八円四十八銭
一九一九年	八 未年	戦争米騒動 十円六十銭
一九二〇年	九 申年	総人口五五〇〇万人 二十円
一九二一年	十 酉年	十四円二十銭
一九二二年	十一戌年	十四円二十銭
一九二三年	十二亥年	東京大震災 十円四十銭
一九二四年	十三子年	十五円三十銭
一九二五年	十四丑年	十三円六十銭
大正天皇崩御（四十八才）	大正十五・十二・二五	
一九二六年	昭和 元 寅年	十二円七十銭
一九二七年	二 卯年	十四円八十五銭
一九二八年	三 辰年	十四円六十銭
一九二九年	四 巳年	十円四十銭

西曆	昭和	
一九三〇年	昭和 五年年	六円二十八銭
一九三一年	六 未年	六円五十銭
一九三二年	七 申年	満州事変 八円二十銭
一九三三年	八 酉年	十円八十銭
一九三四年	九 戌年	十四円八十銭
一九三五年	十 亥年	十円九十銭
一九三六年	十一子年	十一円八十銭
一九三七年	十二丑年	十二円九十銭
一九三八年	十三寅年	十三円四十二銭
一九三九年	十四卯年	十六円三十五銭
一九四〇年	十五辰年	十六円三十銭
一九四一年	十六巳年	大東亜戦争始まる 十六円八十銭
一九四二年	十七午年	十六円九十銭
一九四三年	十八未年	十八円四十二銭
一九四四年	十九申年	十八円八十銭
一九四五年	二十酉年	六十円 大東亜戦争終る
一九四六年	二十一戌年	二百二十円
一九四七年	二十二亥年	七百円
一九四八年	二十三子年	一千四百八十七円
一九四九年	二十四丑年	一千七百十五円
一九五〇年	二十五寅年	二千六十四円
一九五一年	二十六卯年	二千八百十二円

西曆	昭和三十七辰年	三千元
一九五二年		
一九五三年	二十八巳年	三千二百八十円
一九五四年	二十九午年	三千六百四十八円
一九五五年	三十未年	三千九百二円
一九五六年	三十一申年	三千九百九十五円
一九五七年	三十二酉年	三千八百五十円
一九五八年	三十二戌年	三千九百六十円
一九五九年	三十四亥年	伊勢湾台風 三千九百六十六円
一九六〇年	三十五子年	四千百十七円
一九六一年	三十六丑年	四千二百八十九円
一九六二年	三十七寅年	四千八百八十二円
一九六三年	三十八卯年	五千三十円
一九六四年	三十九辰年	新潟地震 五千七百七十五円
一九六五年	四十巳年	六千三百八円
一九六六年	四十一午年	七千二十円
一九六七年	四十二未年	七千六百七十七円
一九六八年	四十三申年	八千二百〇八円
一九六九年	四十四酉年	自主流通米 八千二百十八円
一九七〇年	四十五戌年	減反奨励 八千二百十八円
一九七一年	四十六亥年	八千六百三十一円
一九七二年	四十七子年	九千三十円

(注) 米価は生産者価格一俵(六十町)の価格

西曆	昭和四十八丑年	一万三千九十円
一九七三年		
一九七四年	四十九寅年	一万三千七百二円
一九七五年	五十卯年	一万五千六百十二円
一九七六年	五十一辰年	一万六千六百十二円
一九七七年	五十二巳年	一万七千三百三十二円
一九七八年	五十三午年	一万七千三百五十一円
一九七九年	五十四未年	一万七千三百七十九円
一九八〇年	五十五申年	一万七千六百七十四円
一九八一年	五十六酉年	一万七千七百五十六円
一九八二年	五十七戌年	一万七千九百五十一円
一九八三年	五十八亥年	一万八千五百五十二円
一九八四年	五十九子年	一万八千五百四十五円
一九八五年	六十丑年	一万八千七百四十四円
一九八六年	六十一寅年	一万八千七百十四円
一九八七年	六十二卯年	一万七千六百円
一九八八年	六十三辰年	一万六千七百七十二円
昭和天皇崩御(八十七才)		昭和六四・一・七
一九八九年	平成 元 巳年	一万六千七百七十四円
一九九〇年	二年 午年	一万六千五百三十四円
一九九一年	三年 未年	一万六千三百六十六円
一九九二年	四 申年	一万六千二百六十六円
一九九三年	五 酉年	冷夏凶作 一万六千二百六十六円

(西脇正義調査)

和曆西曆对照表

時代	和曆	西曆	時代	和曆	西曆	時代	和曆	西曆	時代	和曆	西曆
大和時代	大化	645~	奈良時代	治安	1021~	鎌倉時代	建保	1213~	室町時代	寛正	1460~
	白雉	650~		万寿	1024~		承久	1219~		文正	1466~
	斉明	655~		長元	1028~		貞応	1222~		応仁	1467~
	天智	662~		長暦	1037~		元仁	1224~		文明	1469~
	弘文	672~		長久	1040~		嘉祿	1225~		長享	1487~
	武徳	673~		徳承	1044~		安貞	1227~		延徳	1489~
	朱鳥	686~		永承	1046~		寛喜	1229~		明応	1492~
	持統	687~		天喜	1053~		貞永	1232~		文龜	1501~
	文武	697~		康平	1058~		天福	1233~		永正	1504~
	大寶	701~		治暦	1065~		文暦	1234~		大永	1521~
平安時代	慶和	704~	平安時代	延久	1069~	室町時代	嘉禎	1235~	安土・桃山時代	享祿	1528~
	靈龜	708~		承暦	1074~		暦仁	1236~		天文	1532~
	養老	715~		承暦	1077~		延応	1239~		弘治	1555~
	神亀	717~		永保	1081~		仁治	1240~		永祿	1558~
	天平	724~		応徳	1084~		寛元	1243~		元龜	1570~
	感宝	729~		寛治	1087~		宝治	1247~		天文	1573~
	平勝	749~		嘉保	1094~		建長	1249~		文祿	1592~
	平宝	749~		永長	1096~		康元	1256~		慶長	1596~
	神護	757~		承徳	1097~		正嘉	1257~		元和	1615~
	神景	765~		康和	1099~		正元	1259~		寛永	1624~
平安時代	宝龜	767~	鎌倉時代	長治	1104~	室町時代	文応	1260~	江戸時代	正保	1644~
	永暦	770~		嘉承	1106~		弘長	1261~		慶安	1648~
	天曆	781~		天仁	1108~		文永	1264~		承応	1652~
	大同	782~		永久	1110~		建治	1275~		明暦	1655~
	弘長	806~		永安	1118~		弘安	1278~		万治	1658~
	天和	810~		保安	1120~		正応	1288~		寛文	1661~
	承和	824~		天治	1124~		乾元	1299~		延宝	1673~
	嘉祥	834~		大治	1126~		嘉元	1302~		天和	1681~
	昇寿	848~		長承	1131~		徳治	1306~		元禄	1684~
	文衡	851~		保延	1132~		延慶	1308~		宝永	1704~
平安時代	觀慶	854~	鎌倉時代	永治	1135~	室町時代	應長	1311~	江戸時代	正徳	1711~
	元仁	857~		康治	1141~		正和	1312~		享保	1716~
	寛平	877~		久安	1142~		文保	1317~		元文	1736~
	昌泰	885~		仁平	1144~		元亨	1321~		寛保	1741~
	延喜	889~		久保	1145~		正中	1324~		延享	1744~
	長平	898~		平治	1151~		嘉暦	1326~		寛延	1748~
	承平	901~		永暦	1154~		元徳	1329~		宝暦	1751~
	慶暦	923~		応保	1156~		元弘	1331~		天明	1754~
	天曆	931~		長寛	1159~		建武	1332~		寛政	1772~
	徳和	938~		保安	1160~		延元	1334~		享和	1781~
平安時代	天徳	947~	鎌倉時代	永仁	1161~	室町時代	興国	1336~	江戸時代	文化	1801~
	康保	957~		嘉応	1163~		正徳	1340~		文政	1804~
	安和	961~		承安	1166~		建中	1346~		天保	1818~
	天祿	964~		天安	1169~		文天	1370~		弘化	1830~
	延元	970~		治承	1171~		弘和	1372~		嘉永	1844~
	貞元	973~		養和	1175~		元中	1381~		安政	1848~
	永觀	976~		永暦	1177~		正長	1384~		万延	1854~
	寛延	983~		建久	1181~		嘉吉	1428~		文治	1860~
	永祚	985~		文治	1182~		文安	1429~		慶治	1861~
	正暦	987~		建仁	1184~		宝徳	1441~		大正	1864~
平安時代	長徳	989~	鎌倉時代	建久	1185~	室町時代	享徳	1444~	江戸時代	昭成	1865~
	寛弘	995~		正治	1190~		長祿	1449~		大正	1868~
	長保	999~		久治	1199~		康正	1452~		昭成	1912~
	弘和	1004~		建久	1201~		長祿	1455~		大正	1926~
	寛弘	1012~		承元	1204~		長祿	1457~		大正	1989~
	寛弘	1017~		建暦	1206~						
				建暦	1207~						
				建暦	1211~						



元祿時代旧多藝上石津兩郡村落圖



(多良村西木良一氏所藏)

伊勢七郷

石津

五斗八升六合

例

黑原 邵果

道子

ニ依リ其他者里

一索回養老却

高不負一

... 1-10

千五百五十三石

七月十三日

五

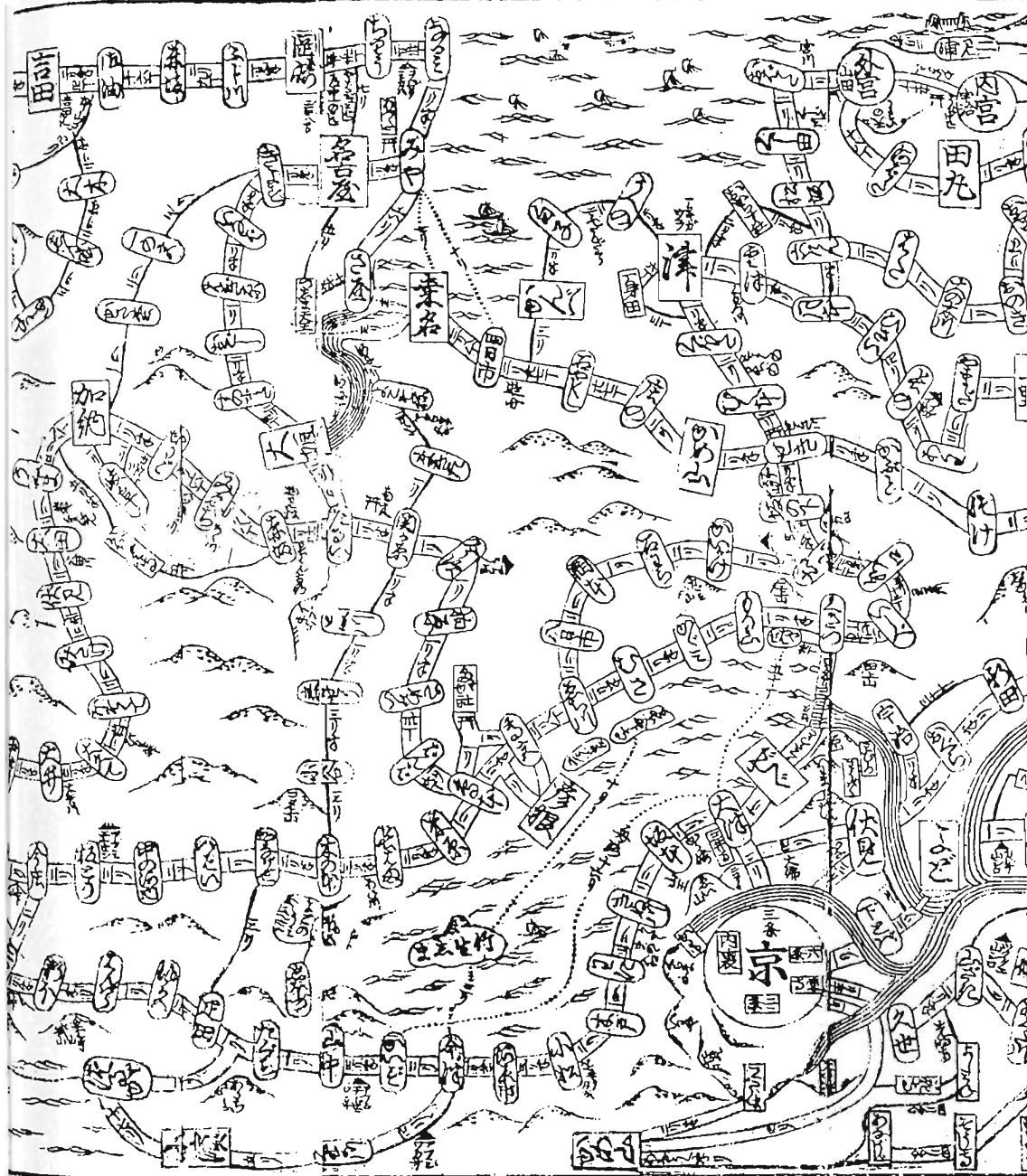
中七種九食

卷之六

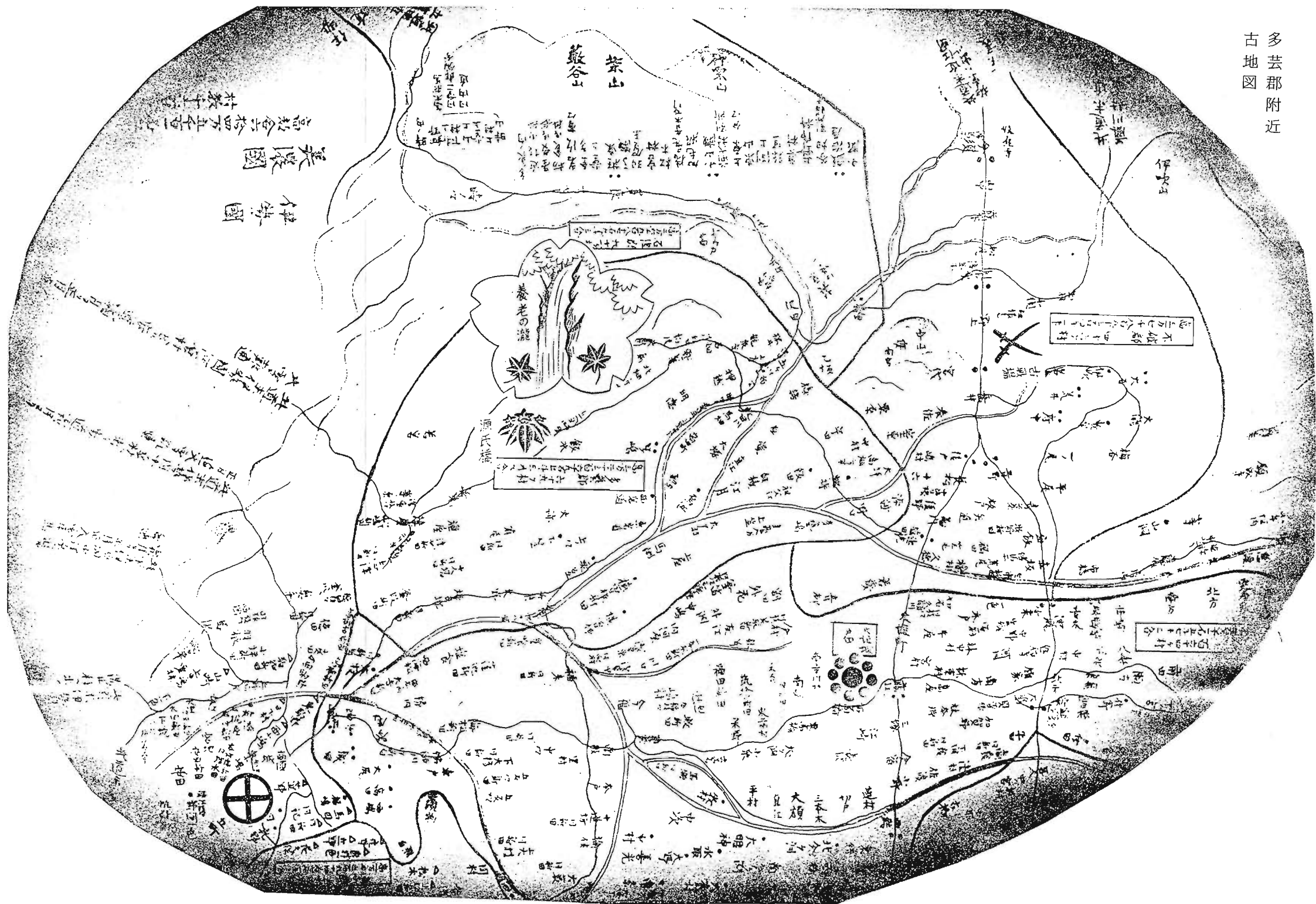
四斗八

251

道中獨案内国 寛政四年版



多芸郡附近
古地図



[illegible]

